

資料

(平成四年十月)

第三十七回「合宿教室」(阿蘇)感想文集

——日本人としての自覚をもとめて——

社団法人 国民文化研究会

— “合宿教室” 37年の歩み—

回数	年度	開催地	参加人員	主要講師
1	昭和31年	霧島	92	広田洋二・日下藤吾・川井修治
2	“ 32年	福岡	127	竹山道雄・高山岩男・浅野晃
3	“ 33年	佐賀	72	勝部真長・木下彪・森三十郎
4	“ 34年	阿蘇	160	花田大五郎・中山優・野口恒樹
5	“ 35年	雲仙	200	木内信胤・花田大五郎・佐藤慎一郎
6	“ 36年	雲仙	203	小林秀雄・木内信胤・津下正章
7	“ 37年	阿蘇	215	福田恆存・木内信胤・黒岩一郎
8	“ 38年	雲仙	202	竹山道雄・木内信胤・木下広居
9	“ 39年	桜島	202	小林秀雄・広田洋二・木内信胤
10	“ 40年	大分	215	岡潔・花見達二・木内信胤・夜久正雄
11	“ 41年	雲仙	240	福田恆存・木内信胤・戸川尚
12	“ 42年	阿蘇	336	林房雄・太田耕造・木内信胤
13	“ 43年	霧島	353	竹山道雄・高谷寛成・木内信胤
14	“ 44年	阿蘇	403	岡潔・木内信胤・木下道雄・奥田克己
15	“ 45年	雲仙	491	小林秀雄・木内信胤・桑原暁一
16	“ 46年	霧島	302	村松剛・木内信胤・戸田義雄
17	“ 47年	阿蘇	402	木内信胤・山本勝市・胡蘭成
18	“ 48年	雲仙	433	村松剛・木内信胤・山口宗之
19	“ 49年	霧島	528	小林秀雄・木内信胤・戸田義雄
20	“ 50年	阿蘇	435	福田恆存・木内信胤・夜久正雄
21	“ 51年	佐世保	372	長谷川才次・村松剛・木内信胤
22	“ 52年	雲仙	332	木内信胤・衛藤藩吉・高木尚一
23	“ 53年	阿蘇	440	小林秀雄・木内信胤・松本唯一
24	“ 54年	霧島	268	木内信胤・高山岩男・山田輝彦
25	“ 55年	雲仙	431	福田恆存・法眼晋作・宝辺正久
26	“ 56年	阿蘇	353	齋藤忠・村松剛・青砥宏一
27	“ 57年	霧島	321	齋藤忠・黛敏郎・幡掛正浩
28	“ 58年	雲仙	327	齋藤忠・小堀桂一郎・長内俊平
29	“ 59年	阿蘇	302	吉岡一郎・小堀桂一郎・加納祐五
30	“ 60年	阿蘇	249	市原豊太・高村坂彦・小田村四郎
31	“ 61年	島原	294	江藤淳・村松剛・小柳陽太郎
32	“ 62年	阿蘇	269	小堀桂一郎・鈴木一・関正臣
33	“ 63年	島原	227	児島襄・小堀桂一郎・加納祐五
34	平成元年	島原	204	村松剛・山田輝彦・國武忠彦
35	“ 2年	阿蘇	204	黛敏郎・小柳陽太郎・占部賢志
36	“ 3年	厚木	244	田久保忠衛・國武忠彦・山内健生
37	“ 4年	阿蘇	257	村松剛・平川祐弘・奥富修一
累計・参加人員				10,705名

第三十七回 “合宿教室（阿蘇）” 全参加者の感想文と和歌詠草

とき 平成四年八月八日（土）から十二日（水）まで四泊五日間

ところ 熊本県阿蘇国立公園「阿蘇の司」

参加総数 二五七名

目次

“はしがき”に代へて	理事長・小田村寅二郎	2
大学別参加者数・その他の人数の内訳		5
“合宿教室”の日程表（四泊五日）		6
第37回“合宿教室”のあらまし		7
感想文と第二回目の“短歌詠草”	参加者全員	31
短歌詠草	合宿中の第一回目の創作作品	111
	参加者全員	142
あとがき		
カメラ・レポート28枚（33ページから87ページの左頁に掲載）		



“はしがき”に代へて

小田村寅二郎

(本会理事長・元亜細亜大学教授)

今から三十六年前の昭和三十一年（一九五六年）に本会が創立して以来、一年も欠かすことなく続けて来たこの「合宿教室」は、本年は第三十七回目を八月上旬の四泊五日間、九州・熊本県の阿蘇国立公園内の阿蘇町「阿蘇の司・ピラパーク・ホテル」で開催しました。しかし、開催初日の八月八日には、南方海上から襲来してゐた「台風十号」が九州に上陸、九州全土を縦断中といふことで、空・陸双方の交通が停止し、主要道路も通行禁止となり、参加者の現地到着が不可能になってしまいました。ただ、その日の夕方から台風の北上と共に、交通機関が徐々に回復し、続々と到着、同日夜半から翌朝にかけて、ほぼ全員近くが現地参集を得たことは、不幸中の幸ひでした。その間、「合宿運営委員及び事務局」諸氏の果敢適切な対応の成果も加はり、一方、参加者各位の合宿に寄せられた深い心情に、主催者一同も深く感激した次第です。

さて、全国津々浦々から馳せ参じてくださった参加者諸君（五十七大学から、男女学生一二九名（うち女子学生三八名）、社会人二九名、および関係者九九名、の合計二五七名）は、台風によるやむなき日程の変更はあったといへ、第二日目の早朝八時半（当初予定通り）から、先づお招き申し上げた講師、筑波大学名誉教授の村松剛先生（たけし）の「国際情勢と日本」と題する御講義の席に列して熱心に聴講し、引き続きの質疑に対する村松先生の懇切な御応答を伺ひながら、いまの日本が置かれてゐるきびしい国際環境について、各自それなりの理解を得たことは、何よりの喜びでした。

この御講義のあと、各班に分かれての「班別討論」で御講義の内容が検討され、そのあと一日遅れの「開会式」の運びとなり、先づ開会宣言、国歌斉唱二回、ついで、「祖国のために貴い生命を捧げられた先人の御霊に」一分間の黙禱を捧げたあと、参加学生を代表してリーダー学生の一入、京都産業大学四年の濱地賢太郎君が「自分の気持を述べるだけでなく、班員

の心や講義をされる先生・先輩方の心を知る、といふことが大切なのだ、と思つて取り組んでいきませう」と呼びかけたのに対して、全参加者は「この合宿教室に参加したからには、自分から進んで飛び込んでいかななくては」との気持ちにさそはれていったやうでした。場所もよし、台風一過後の空気は殊のほか澄み切つてゐる阿蘇の高原で、夏山の展望を窓外に眺めながら、今年の「合宿教室」はこのやうにしてスタートいたしました。宿舎側の設備・対応もよく、この合宿教室独自の日程の運びにも大変好都合でした。

全期間を通じ、主催者側の諸講師によるさまざまな講義の中には喜んで、さきの村松剛先生と同様にお招きした外部講師の東京大学名誉教授・現福岡女学院大学教授の平川祐弘先生の「故竹山道雄著『ピルマの竖琴』再考」と題する御造詣深い御講義とそれに続いての質疑に対する御応答があり、深い感銘を与へてくださいました。諸講師のお話熱心に聴き入る参加者たちでしたので、場内にはピンと張りつめた緊張感がみなぎつて、真摯な求道くどうの場が繰り広げられていきました。

さて、この「合宿教室」では、「学問」と「人生」と「祖国日本」と「世界の平和」といふ四つの命題を今年も掲げました。いまの日本の大学生生活では、これら四つの命題に何らの統一性・関連性が見られないため、この合宿教室では、そのことへの指摘と反省の上に立つて、この四つの命題を何とかして各自の心中に統一的に把握してもらはうと、参加者諸君に強く期待しました。はじめのうちは、いろいろな抵抗や反感を持たれた方もをられました。しかし日程が進むにつれて、濃淡の差こそあれ、ごく一部少数の学生を除き、ほとんどの参加者諸君は今日の大学が「心を鍛へることの重要性」を忘れてゐること、また「知識偏重」と「学問の分化」が精神の混迷をもたらしてゐることなどについて、これらの欠陥を欠陥として認識し直すと共に、これらへの対処には、結局一人ひとり、学問の名に値する真の総合的な学問を求めて学生生活を確立するのてなければならぬこと、さうしなければ、これからの日本の発展に寄与することにはならない、といふ重要事を把らへてくださった、と思はれました。特に今回も、日本の伝統と文化のすばらしさが、特に若い諸講師によつて説かれたことは、一同の心に沁み入る成果であつた、と回想されます。それは同時に、三分の一世紀を越えて三十七年間もつづいたこの「合

宿教室」が、「創始者層」から「後続者層」に継承されつつあることを、確認出来た喜びに連なることでした。

一方、大学生諸君にとって、「友情、友との付き合ひ」の問題は、大切な関心事でありますので、「上^{うは}っつらだけの遊び友だちではなく、真に心を許し合ふことの出来る友だちを持ちたい」といふ願望に対して、この「合宿教室」では、「こちら側がどういふ心掛けで自分自身の心を整へて相手に相対していけば、真に心を許し合へる友と出会うことができるか、それにはどう努力すべきか」についても、各班ごとの、胸襟を開いての「班別討論」、「輪読」、各自が詠んだ和歌についての「相互批評」などを通じて、具体的な経験を積んでくれたことは、各自の大きな収穫となつたと思はれます。また合せて、「読む書物の選び方の如何が、自分の人生にとってどんなに重要なかかはりを持つか」また、「読書に際して『輪読』といふ勉強の仕方が、独りで読むのに比して、どんなに深い意味合ひを持つか」についても、真剣に考へてもらへたことと思ひます。

なほ、ここに編した『この感想文集』は、全参加者が「解散の間ぎは」に走り書きしてくださったものです。紙面の都合上全文をそのまま載せ得なかつたことは、なにとぞご容赦いただきましたと存じます。「この文集全体の編集」には、十余名の方々（編集後記に記載）が、公務・社務の余暇をさいて取り組んでくださったことを、心から感謝してをります。今夏の「合宿教室」に参加された方々、またこの「文集」をお読みいただく方々に、勝手ながら私からお願ひ申し上げたいことは、どうか全ページを通じて御読みたいだきたい、といふことであります。

また、最後になりましたが、この合宿事業を行ふに当りまして、本年もまた、朝野からお寄せくださいました得難い御支援の数々に對しまして、会員一同に代り、心から厚く御礼を申し上げます。

来年（平成五年）の合宿教室（第三十八回）は、八月七日（土）〜十一日（水）の日程（四泊五日）で、

神奈川県「厚木市立七沢^{ななきば}自然教室」で行ふことに決定してをり、その合宿運営委員長には、東京在住の小

柳志^{しのぶ}乃夫^{のぶ}さんを煩はすことになりました。



「第37回合宿教室」記念撮影（参加者257名）・於・阿蘇国立公園「阿蘇の司」

参加者

（学生班 五七大学）（洋数字は参加学生数）

- 防衛大学校10 拓殖大8 福岡大7 福井工業大6
- 明治大6 早稲田大6 九州大6 福岡女学院大5
- 鹿児島大4 亜細亜大3 金沢大3 富山大3
- 熊本商科大3 宮崎産業経営大3 日本大2
- 海上保安大学校2 大正大2 法政大2 西南学院大2
- 熊本大2 金沢工業大2 佐賀大2 九州女子大2
- 尚綱大2 尚綱短大2 佐賀女子短大2
- 中村学園大2 東北大1 東京大1 中央大1
- 明治学院大1 目白女子短大1 日本経済短大1
- 日本文理大1 帝京大1 上智大1 立正大1
- 武蔵野女子大1 金沢経済大1 大谷大短大1
- 京都産業大1 京都外語大1 湘北短大1 東海大1
- 大阪外語大1 第一工業大1 奈良県立商科大1
- 淑徳大1 大阪教育大1 九州国際大1 北九州大1
- 産能短大1 東和大1 九州造形短大1 長崎県立大1
- 熊本短大1 グリーンマウンテン大1

計 一二九名（うち女子三八名）

（社会人班）会社員・公務員・教員など計二九名

（招聘講師）二名（国民文化研究会）八九名

（事務局）七名（写真）一名

総計 二五七名

第37回 全国学生青年合宿教室 (阿蘇) 日程表

平成4年

8月 8日 (土) (第1日)	8月 9日 (日) (第2日)	8月10日 (月) (第3日)	8月11日 (火) (第4日)	8月12日 (水) (第5日)
	(起床) - 洗面・清掃 (7:00) 朝の集ひ 朝食	(起床) - 洗面・清掃 (7:00) 朝の集ひ 朝食	(起床) - 洗面・清掃 (7:00) 朝の集ひ 朝食	(起床) - 洗面・清掃 (7:00) 朝の集ひ 朝食 (8:00)
	(8:30) (講義)	(8:30) (講義)	(8:30) (講義)	(合宿を顧みて) 国文研・副理事長 宝辺商店取締役社長 宝辺 正久 氏
	評論家 筑波大学名誉教授 村松 剛 先生	福岡女学院大学教授 前・東京大学教授 平川 祐弘 先生	亜細亜大学講師 神奈川県立湘南高教諭 山内 健生 氏	参加者による (全体感想自由発表) (10:00) (10:10)
	(10:00) (10:10) 質疑応答 (10:40)	(10:00) (10:10) 質疑応答 (10:40) 記念写真撮影 (11:00)	(10:00) (10:10)	感想文の執筆 および 第二回 短歌創作
	班別研修	班別研修	班別研修	(11:30) 班別懇談 (12:00) (12:10)
	(12:30) 昼食	(12:30) 昼食	(12:30) 昼食	閉会式 (このあと昼食) (1:00)
	休憩	休憩	休憩	
	(2:00)	(1:30) (短歌創作導入講義)	(1:50) (講話)	
(2:00) (打合せ)	(2:00) 開会式 国文研・理事長 小田村 寅二郎 氏	福岡県立須恵高校教諭 那須 三元 氏 (2:30)	国文研・常務理事 事務局長 長内 俊平 氏 (3:00) (3:10) 班別研修	
(3:00) 班別研修 (輪読)	オリエンテーション (3:10) (合宿導入講義)	レクリエーション (草千里)	班別研修	
『日本への帰帰』 第27集	東京理科大学講師 八木 秀次 氏 (4:50)		(4:10) (創作短歌全体批評) 日商岩井㈱ 大阪エネルギー部長 沢部 寿孫 氏 (5:10) 夕食	
(5:00) 夕食	夕食	(5:00) 夕食	入浴	
入浴	入浴	入浴	休憩	
休憩	(6:50) (青年体験発表) 吉川 理夫 氏 黒岩 真一 氏 (7:45) (7:50) (古典講義)	(7:30) (講話) 元・日特金属工業㈱ 常務取締役 加納 祐五 氏 (慰霊祭の説明) 福岡県立三池高校教諭 浜田 清人 氏 (8:30)	班別	
(7:00) 班別研修 (輪読)	東急建設㈱東京支店 建築部審査課長 奥富 修一 氏 (8:35) (8:50)	慰霊祭 (9:30) 班別懇談 (10:00) 就床 (10:30) 消灯	短歌相互批評	
『日本への帰帰』 第27集	班別研修		夜の集ひ	
(10:00) 就床 (10:30) 消灯	(10:00) 就床 (10:30) 消灯	(9:30) 班別懇談 (10:00) 就床 (10:30) 消灯	(9:30)	

※八日は早朝から、台風第十号による風雨が強く、九州全域の交通機関が途絶したため、予定の開会時間に合はない者が続出、やむなく臨時的な班構成による「班別輪読」を行った。夕刻から逐次、復旧して八日中に参加者のほとんどが到着した。

第三十七回 “合宿教室” のあらまし

第一日

(八月八日・土曜日)

今夏の「第三十七回全国学生青年合宿教室」は、熊本県阿蘇の「阿蘇の司・ピラパークホテル」で八月八日(土)から四泊五日の予定で開催された。しかし、第一日目の八日には、台風十号が早朝から九州全土を縦断する猛威を振り、為に東京と九州間の全空路のストップを始め、鹿児島本線の博多以南の運休、合宿地を通過する熊本と大分間を走る豊肥線の全面不通がこの日の朝から夕刻迄続くといふ不慮の災害に遭遇してしまった。そして当日午後二時に予定されていた開会式迄に現地へ到着できた人数は予定の五分の一の五十名に過ぎず、急遽開会式を見送つて交通事情の回復と台風の通過を待つといふ事態となった。それでもやうやく同日夕刻には豊肥線の一部が開通し、空路も回復するなどにより、その日の真夜中迄には、二百二十名近い人々が、様々の苦難を乗り越えて続々と参集し、翌日朝にはさらに数十名が到着しほぼ予定通りの参加人員となった。参加者各位のその熱意には、主催者一同深く感激の他なかった。

この様な緊急事態への対応により、第一日目の日程は「班別研修」の時間に振替へ、昨年の合宿リポートである『日本への回帰・第二十七集』の輪読を班別に行つた。遅れて参加した者は到着次第、所属班の研修に加はつてゆくといいふことで第一日目を終了した。また一方、第二日目に御登壇予定の筑波大学名誉教授・村松剛先生もまたこの台風の影響でご搭乗予定の飛行機が欠航となることが予想され、ご来場が危ぶまれたものの、「私の話を聞かうとして集つてこられる方が、仮に半数にならうとも、私は何としてもそち

らにたどり着きます」と言はれ、一時は自由席の列車を乗継ぐ事すらお考へになつたが、第一日夕刻にやうやく飛行機が飛び始めた為、何とか夜遅くに阿蘇入りされたのであつた。

第二日

(八月九日・日曜日)

かくして第二日目の朝には、参加予定者のほぼ全員が揃つて村松先生のご講義に臨んだのであつた。尚、合宿スケジュールは、村松先生のその後のご予定の関係もあつて、開会式前に村松先生のご講義、その後午後二時に開会式を挙行、第一日目に予定していた八木秀次氏の合宿導入講義を開会式後に織込む等、若干の変更が行われたものの、台風の影響を最小限度に喰ひ止め合宿をスタートする事ができた。

講義 「国際情勢と日本」

筑波大学名誉教授 村松 剛 先生

先生はまづ、昨年来のソ連邦の崩壊について「数世紀に一度といふ重大な変革」であると言はれ、「ソ連といふ存在が如何に二十世紀を暗くしたか」といふ指摘をされて、共產主義体制の本質、その歴史の意味といふ点からご講義を始められた。即ち、マルクシズムといふものがユダヤ教やキリスト教といった一神教そのままの独善性や排他性あるいはその予言的歴史観をそっくり受継いだものである事。そして、その事によつて政治が宗教と化し、異端、即ち異なる政治思想を全く許容しない極めて殺伐たる政治体制を生み出したといふ事。さらにこの様な思想的先駆はフランス革命にあり、以降この宗教的独裁的政治思想によつて如何に多くの人々が肅正の犠牲と



なつたかといふ事、等を歴史をたどりつつ述べてゆかれた。そして今回のソ連・東欧共産圏の変革によりこの宗教的全体主義独裁体制の崩壊をみた事は人類にとつて慶賀すべき出来事であると述べられたのである。

しかし先生は、ソ連邦の崩壊は今までの大帝国の場合とは異なり、近隣諸国のみならず世界各地に膨張政策を採つてゐたソ連が、ゴルバチョフの登場を契機に瞬間に消滅してしまつた、極めて特異な事態である事を指摘された。即ち連邦消滅後のロシアの現状を見るに、①ロシアは依然として強大な軍事力を維持してゐる事、②ロシア国民には版図を二百年前のエカテリーナ時代に迄縮小された事に対する屈辱感が極めて根強い事、③冷戦構造は解消したもののユーゴ、アフガン等各地で力の空白が生じ、中小規模の戦争が起きてゐる事、等を挙げられて、今後ロシアがどの様に変革してゆくかといふ事のみならず、それによつてどの様な国際情勢を現出するかは全く予断を許さない状況にある事を強調されたのである。

次に先生は中共の動向にお話を移され、この様に米ソの冷戦が終らうとし、世界が新たな秩序を模索しようとしてゐる中、中共はその基本政策を「和平演変（平和裡での体制変革）の回避」に置き、経済の自由化を進める一方で全体主義独裁体制を堅持し、さらに米ソの間隙を縫ふかの様に軍事力の増強を図つてゐる事実を指摘された。そして、中共が北朝鮮、パキスタン、イラン、イラク、アルジェリア、リビアといった国々に核兵器を中心として積極的に軍事支援を図つてゐる事や、南沙群島等を狙ひとしてシナ海への進出を画策してゐる事等の具体例を挙げながら詳しく紹介されたのである。即ち、中共の世界戦略は核兵器の分散による「対米第二戦線」の形成にあり、これによつて自由主義世界に対抗せんとするものであるといふ驚くべき事実を述べられたのである。米ソ両大国の力の拮抗といふ冷戦構造が崩壊した今、中共を中心とした全体主義的国家勢力が抬頭しつつかあるといふ先生の世界情勢認識は、安穩な日本のマスコミ報道や空疎な平和論議に馴された我々の意識に強く警鐘を鳴らすものであつた。

そして、この様に中共の動向が世界の脅威となりつつある現在、日本政府が行はむとしてゐる「天皇ご訪中」といふ事が如何に国際情勢の認識を欠いた、世界の常識からかけ離れた行為であるかを強く警告された。即ち、天安門事件以来自由主義陣営の国家元首が誰一人として訪問してゐない事に象徴される如く、中共は国際社会の中で益々孤立を深めつつ世界の軍

事的脅威の中心となつてゐるのであり、その中共を支援するが如き行為は如何に日本の将来に禍根を残すかを切々と述べられたのである。併せて先生は各々の歴史的経緯に触れつつ、日本の天皇と西欧や支那の皇帝とが如何に性格を異にした存在であつたかを示され、歴代の支那の皇帝がアジアの盟主として君臨し、「朝貢外交」を受けてきた事、それに対し我国は聖徳太子以来、名実共に国家としての独立を保つてきたアジアで唯一の国である事を指摘された。当然ながらそのやうな歴史的認識は支那の民衆には全く無く、今回のご訪中が結果として中共に対する「朝貢外交」に墮してしまふ事は明白であると訴へられたのである。そして現在の米国世論が中共批判を強めてゐる動向をも紹介されて、「今、日本は米国を中心とした自由主義世界の一員として生きるのか、全体主義的独裁体制の側につくのか、その重大な岐路に立たされてゐる」と述べられ、「現在の状況は戦前の三国同盟を想起させる」と深い憂慮を示されたのである。そして最後に「今回の講義はどうしてもこの事（天皇ご訪中問題）を主題にせざるを得なかつた」と危機感をあらはにされてご講義を締めくくられたのである。先の大戦において米国は日独が同盟を結んだ事によつて対日戦を決意したのであり、ご訪中はその事を想起させる程の事態だといふ先生のお言葉は、聴く者に日本の危機の深さ、国際情勢の厳しさをあらためて認識させるものであつた。

開会式

台風の中、各々苦心してはるばる阿蘇の地に集つた参加者が一堂に会し、緊張の高まる講義室に、亜細亜大学法学部二年の松田裕幸君の「開会宣言」が響きわたり、「国歌斉唱」に続いて「戦時、平時を問はず、祖国日本の為に尊い命を捧げたすべての御霊」に対し一分間の黙禱が捧げられた。続いて(社)国民文化研究会理事長の小田村寅二郎先生が挨拶に立たれ、「頭を鍛へる事は簡単だが心を鍛へる事は難しい。その心を鍛へる事を目標とし友との付き合い深めて行きませう」「人生の生き方、目的が掴めないといふ人が多いが、その答は人から与へられるものではなく自分で掴み取るものだから、それを掴み取る姿勢、生きる姿勢を作つていませう」と語られた。

次いで、参加者を代表して京都産業大学理学部三年の濱地賢太郎君が「自分の気持を述べるだけでなく、講義をされる先生や班員

の心を知るといふ事を大切にして合宿に取組んで生きませう」と参加者に呼びかけた。

続くオリエンテーションでは、本合宿運営委員長の折田豊生氏（熊本市役所勤務・43歳）から合宿の参加心得、運営体制、諸注意等について懇切な説明があり、細部にわたる注意事項が指揮班長は松秀文氏（福岡市立奈多小学校教諭・33歳）によつて伝へられ、参加者一同新たな思ひでその後のスケジュールに取組んでいった。

合宿導入講義 「人生と学問——価値相対主義的的人生観からの脱却——」

東京理科大学非常勤講師 八木 秀次 氏



氏は初めに、合宿参加者全員が参加にあつて書いたアンケートを紹介されて、今の大学生活の状況を、①何か今の生活を物足りなく思つてゐる②真剣に語り合へる友人がゐらない③学んでゐることの意味がわからない④成績や就職といった目先の事が興味・関心の中心となつてゐると分析され、「これらは参加者の生の声ですが、今の大学生に共通したものでせう。何か空虚な不安の中にあつて学びの場にゐながら学ぶ喜びを知らないで卒業してゆくのが今の大学生の現状ではないですか」と指摘された。次に今なぜ大学生がさういふ状況にあるのかを、アラン・ブルーム『アメリカン・マインドの終焉』の中の言葉を引用しながら、とりたてて崇高なものもなければ下賤なものもない、全ては平等にほどほどに価値があるとする価値相対主義的価値観のなかで、崇高な人間の姿に対して、凄いな、立派だなと思つて心が動くといふことがないか、あつてもそれは違ふんだと思つて了ひ、学生が「自我といふ狭い世界に閉ぢこもり、自己を超える広い世界を知らない」からだと言はれた。更に近代化の問題に触れて、「現代は自由・豊かさ・平和といふ、人類が歴史の上容易に達成できなかった目標が達成できた時代だ。しかし、それらは何かをする為の条件づくりだったのにその『何か』を問うて来なかつたために、それらが達成された後には希望や理想が失はれ、虚無と思ひ上がりの思想が横行し、自己を超

えた価値が存在するといふことが見失はれてゐる。さうした空虚な不安の中に大学生も生きてゐる」と指摘された。そして、元來、生きてゐることの価値や意味を問ふのが学問だつたといふ小林秀雄氏の講演を引用された後、「残念ながら皆さんが学んでゐる大学の学問は皆さんのこの人生の根本問題には答へてくれないといふのが現状です。しかし本来の学問は違ふ。学問を僕らの人生に直結させる営みの一つがこの合宿教室なのです」と語られた。

次に氏は、『佐久間艇長遺言』を取り挙げられた。乗組員全員が生前本来の配置に就いたまま絶命した事実我当时の人々が驚嘆した事を紹介され、この事実に感動した夏目漱石の『文芸とヒロイック』を讀まれて、「人間は本能のみに従ふとする自然主義文学が隆盛の當時にあつて、漱石はヒロイックな行爲を行ひうる人間の広い世界が確かにあり、それは僕らの心を確かに動かすといふことをいひたかつたのだ」と漱石の人間觀を語られた。

続けて氏は、「崇高なものを俗なレベルに引きずり下ろして安心する」現代の風潮を指摘され、「偶像なしに果して人はよく生きられるか」といふ松原正氏の指摘は重要です。自己の人生に価値や意味を与へようと思ふとき、人間の崇高な姿を見て立派だと思ふことなしにそれは果たして可能なのでせうか」と話された。又、『きけ わだつみのこえ』の渡辺一夫氏の序文に見られる「人間が追ひつめられると獣や機械になる」といふ人間觀を問題にされた後、吉田満『戦艦大和ノ最期』を紹介されて、「ここに描かれてゐる、若者が人生の最後に、自分の命の意味や価値は何かと真摯に問ひを發し、何とか生き甲斐を見いださうとする姿が獣や機械でせうか」と指摘され、渡辺氏の荒涼な人間觀を批判された。

そして氏は、「僕らは今最初に述べたやうに、生きる意味、生きる実感を容易に得られない状況にあります。しかし、このままではいけないのではないかといふ真摯な問ひだけがあります。立派に生きた人の姿にすなほに感じること、そしてその自分の感動は疑ひのないものだと思ふこと。そこからすべては始まる。立派な人の姿を知り、学ぶことが僕らの人生を必ずや豊かにしてくれる。僕はそれを信じます」と述べられ、最後に、「この合宿教室において自分の生活、生き方を見つめ直して下さい」と語られて講義を終へられた。

青年体験発表

初めに、タマポリ株式会社の吉川理夫氏（写真上・亜細亜大学経営学部・昭61卒）が登壇された。氏はまづ「学生の頃以来、自分はどう生きればいいのか、どういふ人間なのかといふ問ひを抱いてきた」と話され、小林秀雄氏の文章を引いて「歴史上の人物に心を向け、自分はいかう思ふといふ様にはね返つてきたものが自分ではないか。歴史は知識として外から与えられるものではなく、自分の内に元々あつて、それに火をつけられるかどうかが大切だと思ふ」と述べられた。更に加藤善之氏（本会・参与）の『浮上する大和心』から文章を引いて「加藤さんが会社の中で〈大和心〉を周りの人に伝へようと努力された姿が偲ばれ、自分のこれからの生き方が問はれる様に感じた。職場でも友人との間でも丁々発止としたぶつかり合ひがなければ信頼関係は育たないし、その中から自分の本当の姿も見えてくると思ふ」と語られて発表を終へられた。

次いで、福岡県立太宰府高校教諭の黒岩真一氏（写真下・福岡大学法学部・昭54卒）が登壇され、「最近或るきつかけから、自分の授業のスタイルを考へ直さなければならぬといふ問題にぶつかつた」と語られた。氏は授業で歴史上の人物の和歌を読み進め、昭和天皇の戦争当時のお気持ちを伝えるために御製も取上げるところ「生徒の感動は予想以上に大きく、陛下の真心が生徒の心にストレートに伝はつた。私はすごいなあと思つたが、生徒の感想文の中に、和歌を通じて初めてその時代に生きた人の心にせまることができ、歴史に対する見方が変はつた、といふ言葉があり、今までの授業は時代の流れを追つてきただけではなかつたかと思へてきた」と述べられた。そして小林秀雄氏の文章を引用して「生徒はなぜ面白と感じたのか。それは人の真心にふれて人生の機微を感じたからではないか。これからは歴史の流れを教へるだけでなく、過去の人々の心に直にふれていく様な授業をしていきたい」と結ばれた。



東京工業大学・工・昭和44年卒・東急建設(株)・東京支店建築部審査課長 奥 富 修 一 氏



氏はまづ吉田松陰を取上げた理由を「奥の深い、人間的魅力のある人物だからだ」と述べられ、「それは彼の残した膨大な文章に現れてゐる。松陰の言葉は力強く、誠実で暖かい。さらに厳しくもある。若い人に必要なものが全て含まれてゐる」と指摘された。

それから松陰の文章を辿りつつ、そこに浮び上がってくる松下村塾での学問交流について語られ、その一つ『諸生に示す(幽室文稿)』の『士別れて三日なれば、刮目して相待つ、一日見ずんば、三歳の如し。朋友相與の情、學問日新の機、誠にかくの如きものあり、況や一月に於てをや』について、共に学問を志し日々成長していく者同士の緊張した交流の様が伝はつてくると述べられた。さらに松陰が学問をするにあたつて大事にしてゐる事について『講孟餘話』から「學記に『學びて然る後に其の足らざるを知る』と云へり。學べば學ぶ程、益々高く益々堅きの味を知るなり。然れども井を掘るは水を得るが為なり。學を講ずるは道を得るが為なり。水を得ざれば掘ること深しと云へども、井とするに足らず。道を得ざれば講ずること勤むと云へども、學とするに足らず。」といふの一節を引かれ、「学問は多くの時間を費やせばよいといふのではない。学問の勘所は『道を得る』ことにあり、それを見極めなくてはならない。道といふ言葉は解りにくいですが、心と目を働かせてその意味を考へて欲しい」と語られ、講義を終へられた。

第三日

(八月十日・月曜日)

講義 『『ビルマの豎琴』再考——竹山道雄が後世に伝へるメッセージ——』

東京大学名誉教授・(現)福岡女学院大学教授 平川 祐弘 先生



まづ先生は「文学に現れた『太平洋戦争』と『大東亜戦争』」といふテーマでお話を始められた。この二つの呼称には戦争に対する解釈の相違があらはれてをり、『大東亜戦争』といふ表現には東アジアを白人支配から解放するといふ意味合ひが含まれてをり、この呼称自体は部分的には正確であると述べられた。しかし、中国の人々にとつてはいづれも違和感のある呼称であり、現在一般に用ゐられてゐる『太平洋戦争』といふ呼名も勝者であるアメリカの歴史解釈を表現したものに過ぎないことを強調された。この様に戦争においては、勝者が過去の歴史の解釈権をも奪ふ程、政治的・心理的に勝利を収める事があり、対日戦争におけるアメリカがまさにさうであつて、アメリカはその歴史解釈をマスメディアによつて宣伝し、更に日本の左翼が熱心にそれに同調したと相俟つて、世にいふ東京裁判史観が浸透したことを指摘された。戦前の皇国史観にも多々をかきな面があつた様に、東京裁判史観にも大きな誤りがあるとしてその点を列挙された。即ち、一つは日本とナチスドイツを同様に扱つてゐることであり、ナチスが行つたユダヤ人虐殺は国家に主導された組織的犯罪であり日本の行為とはとても同断に扱ふことができない事。二つ目に昭和の日本が一貫して侵略行為を行つてきたかの如き解釈がなされてゐる事。つまり、日本の行動はA B C D包囲陣といふアクションに対するリアクションといふ面も否定すべきではなく、持たざる国日本が米英を中心とした持てる諸国に対抗せざるを得な

かつた事も事実であり、さらにはまた侵略とされる行為も出先の軍隊の独断専行といふ色合ひが濃かつたことも事実である、等のことを指摘されたのである。そして先生は、アメリカ占領軍と日本の左翼の合作ともいへる東京裁判史観に基づく日本悪玉論にも、また全面的に大東亜戦争を肯定する様な日本善玉論にも自分は組しないと述べられて、日本の過去について誤解されてゐる点はキチンと弁明すべきだが、日本の行為は全て正しかつたとするナルシズムによる見方もまた世界の人々を説得する事はできない事を強調された。

次に先生は、本論である「文学作品に現れた戦争」をテーマとしてお話を進められ、バイフォーカル・アプローチといふ事を提唱された。即ち、米英側から見た戦争観と日本側から見た戦争観をつきはせる事により、これまでにない新しい視野が開けてくるのではないかといふ問ひかけである。そしてまづ、英国の詩人キプリングが米国人に対して植民地支配の留意点を示した『白人の重荷』といふ詩を紹介されて、植民地経営が先進国民たる白人にとつて〈善〉の事業であつたことを示し、明治の思想家徳富蘇峰がこれに対し『黄人の重荷』なる論説で反論したことを挙げられ、白人支配に対する当時の日本の反発と大東亜といふ発想の萌芽がここにあつたことを指摘されたのである。さらに英国映画『戦場に架ける橋』に見られる英国人の日本人に対する偏見、『アーロン収容所』（会田雄次著）の翻訳に際しての英国人と日本人の見解の相違等の例を挙げられながら、我々は各々の国の過去の捕われ人であることを述べられたのである。

最後に先生は竹山道雄著『ビルマの竖琴』について触れられ、この作品は戦争で亡くなつた人々への鎮魂の詩であり、日本の過去の行為に善し悪しの判断を下してゐるものではないと言はれた。そしてこの作品に関連して、戦後ビルマに残つた日本の藤原少佐について述べられ、英人将兵の墓もつがなないとの手紙を英国女王へ送つた少佐に対しエリザベス女王が返書を送られたことを紹介され、その中の「勝者の自誇の歴史でも、敗者の自虐の歴史でもいけない。当事者双方に納得のいく様な説明が行はれてはじめて戦後が終る」といふ言葉をひかれて、この言葉に日英間の和解の姿が象徴的に現れてゐると指摘されてご講義を終へられた。

福岡教育大学・教・昭和57年卒・福岡県立須恵高等学校教諭 那須 三元 氏



氏はまづ、「歌を初めて作るといふ人でも素直な感動に基づいてゐれば、人の心を打つ、素晴らしい歌ができる」と話された。そして新聞に載つてゐた若者の文章について、「心の実体を離れた言葉が随所に見られる。この原因は、感じる心、相手を思ふ心を鍛へる学問がなくなつてゐるからではないか」と指摘され、「自分の感動をよく見つめ、それを友達に伝へようと短歌を作る事が、本当に物事を豊かに感ずる心を鍛へる学問なのではないか」と、合宿で全員が短歌を詠む意義を話された。生徒らとの思ひ出を交へつつ紹介された。

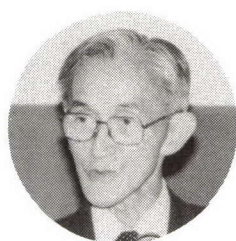
最後に、故和多山儀平氏の歌、昭和天皇の御製に触れられ、「歌を声に出してその調べを大事に味はつて行く中で、祖先の気持ちがあうねりとなり、脈々として伝はつてきます。是非声に出して読んで下さい」と訴へられ、講義を終へられた。

レクリエーション

この後、全参加者は、各々バスに乗車して楽しみにしてゐた阿蘇草千里へと出発した。バスの中では唱歌を皆で歌ひ、和やかな中で草千里へと向かった。緑広がる草千里で友と語らひながら記念写真を撮つたり、また時には放牧されてゐる牛や馬に戯れたり短い時間ではあつたが、阿蘇の大自然を満喫した。幸ひ天候にも恵まれ、草千里での感想を和歌にした者も多く見られた。

講話「つながるは いのちのすがた」

元日特金属工業㈱常務取締役・本会監事 加納 祐五 先生



先生は、「皆さんが班友と心を開いて話し合ひ、普段と違つた何か心が満たされた感じを持たれてゐるとしたら、この体験の持つ意味について一緒に考へてゆきたい」と御講義を始められた。先生はこの心が満たされてゐるやうな感じこそが我々が日頃包まれてゐながら気がつかなくなつたいのちを感じたためではないかと語られ、「このいのちとは知的に理解することはできないもので、芸術的に感ずる他にないものです。信ずるとはいのちが通ずることです」と話された。そして、明治天皇の御製を拝誦してゆかれ、明治天皇が心で感得された自然のいのちが御製に鮮明に現れてゐること、このやうな御歌を読む事によつて、我々が自然のいのちにつながらしめられることの大切さを指摘された。

次に、ルードヴィヒ・クラージェスの研究を援用され、ヨーロッパ文明においてはキリスト教により人間が大地と切り離されてしまひ、人間が自然のいのちにつながることを忘れてしまつた一方、「日本の伝統とは詩魂を失ふことなく守り続けたことにあり、我々の祖先は歌心を持続したことにより心を失はなかつたのです」と指摘された。

最後に先生は、我々現代人が失ひかけてゐる心の回復を図る為には「心は天与のものだから我々が自らできるのはただ養分を与へるだけでその養分とは驚嘆と手本について学ぶことによるしかない」ことを語られ、降壇された。

慰霊祭

濱田清人氏（福岡県立三池高校教諭・32歳）によつて慰霊祭の説明がなされた後、参加者一同は屋外に設けられた祭場に整列し、

慰霊祭に臨んだ。先づ、参加者の気持ちを整へるべく、長内俊平先生（本会常務理事）が、故三井田之先生の

ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもる大和島根を

の和歌を朗詠された。末次祐司先生（本会参与）による御被ひの後、関正臣先生（本会参与）の警蹕の声が響く中、戦時平時を問はず祖国日本の為に尊い命を捧げられた全ての祖先の御霊を、一同最敬礼を以てお迎へした。祭りの庭には篝火があかあかと灯された。海の幸、山の幸をお供へした後、古川修氏（本会理事）が祭文を奏上、上村和男氏（本会常務理事）が明治天皇・昭和天皇の御製を拝誦した。続いて小田村寅二郎先生（本会理事長）の玉串奉奠と共に一同御霊に対し拝礼を行ひ、さらに「海ゆかば」を斉唱した。撤饌の後、再び警蹕と共に一同最敬礼を以て御霊をお送りした。篝火は消され、夜空に月が美しく眺められた。左に慰霊祭における祭文と拝誦された御製を記しておく。

祭文

われらここ火の国阿蘇のカルデラに集ひ第三十七回全国学生青年合宿教室を営みて中日の夜を迎へぬ秀峰大阿蘇の麓に今し天つ日は沈みて夕風をよぐこの合宿地のさやけき草原を斎庭と定めきよめまつりてとこしへにみ国守ります遠つみ祖たちまたみ国のために尊きいのちを捧げましあまたのはらから達のみ霊を招きまつりなぐさめまつらんとみ祭り仕へまつらむとす

顧れば過ぎし大御軍の敗れし時よりみ国の行末いよいよ厳しく危ふき道を行かむとするにひとへに昭和天皇今上天皇の御聖徳に導かれわが国の国際的地位はいよいよたかまりゆきぬ

しかれども民族の自立に基づく世界の新たなる国造りの行はれつつある険しき国際情勢のなかみ国を守りましし御代御代のすめらみことまた御代御代のすめらみことに仕へ奉りしみ祖達のたふときまごころをともしれば忘れゆくときにその外交・その教育・その国防等に憂ふべき嘆かふべきこと打ち重なり再びみ国を危ふき道に立たしむるか胸ふさがれ憂ひかえりみしみられつつ諸講義に耳を傾け天皇の大御歌あるひは古人の言の葉を仰ぎひたすらにみ国の守りを乞ひ

のみまつり老ひも若きもろ共に心を鍛へ言葉を修め日本文化の良き伝統を学び共に立つべき友となりなむと朝夕につとめはげむさまをみそなはし給へ畏かれどもいましみこと達みたまの大き導きによりみ国の行手を守らせ給へとこの合宿教室参加者一同に代り古川修謹み敬ひ恐み恐みも白す

明治天皇御製

歌

すなほなる人の心をそのままにあらはすものは歌にぞありける

孝

まづしくもすごせる親につかへつついそしむ子らが心かなしも

友

したしめば外国人もおのづから心をおかぬ友となりけり

商

外国にしたしみてこそあきなひのみちはいよいよひろくなりけれ

道

遠くとも人のゆくべき道ゆかばあやふきことはあらじと思ふ

ひらくれば開くるままに思ふかなあらぬ道にや人のいらむと

しきしまの大和心をさきだてて道ある国と人といはれむ

昭和天皇御製

終戦時の御製

爆撃にたふれゆく民の上をおもひいくさとめけり身はいかならむとも
身はいかにもいくさとどめけりただたふれゆく民を思ひて
国がらをただ守らんといばら道進みゆくともいくさとめけり

戦災地視察

戦のわざはひうけし国民をおもふ心にいでたちて来ぬ

わざはひをわすれてわれを出むかふる民の心をうれしとぞ思ふ
国をおこすもとゝみえてなりはひにいそしむ民の姿たのものし

第四日

(八月十一日・火曜日)

講義「『深い泉の国』の私たち」

亜細亜大学・商・昭和42年卒・神奈川県立湘南高等学校教諭・亜細亜大学非常勤講師 山内健生氏



氏は先般の参議院選挙において社会党などが所謂平和憲法に抵触するとしてPKO(国連平和維持活動)に反対したこと、またそれに同調した〈平和憲法の規範性を活かせ〉との新聞の社説について「世界の常識から逸脱した全くの事実誤認であり、新聞は読むものであり、読まされるものではない」と痛烈に批判され、このやうな平和憲法論理により国民が自縄自縛され、自国民より他国民を信頼するやうな自己不信の構造が醸成されることを指摘された。そして、この思考停止の状態から脱却するにあたり、氏はエドモンド・パーク等の言葉を紹介されながら、「国家とその伝統は祖先や子孫のものでもある

のだから現在生きてゐる者の都合だけで左右されるものではない」と訴へかけられた。

その後、幕末の吉田松陰が『照顔録』の中で、中国の義人貫高等を「この諸人の死、死友に負かずと謂ふべし。死友に負く者、安んぞ男子と称するに足らんや」と評してゐることに触れられ、氏は「人の人たる所以は死者に負かずといふことで、戦争の時代に戦争を、平和の時代に平和を説くのは現存する者の保身に過ぎない」と批判を展開してゆかれた。

続いて氏は〈自国文化学〉といふことに触れられ、「自国文化学とは自分が自分であることを確かめる学問で客観的学問と主観的学問が結びつくことにより生れるもの」と説かれ、日本が太古の昔から伝統の生き続けてゐる国であることを、身近な例として国民の祝日が単なる休日でなく、歴史的根拠を有してゐることを示された。その一つとして、十一月二十三日の勤労感謝の日が大宝元年に成文化された新嘗祭の日であることを説明され、「一昨年の大嘗祭（天皇の御即位後初の新嘗祭）で総理大臣等閣僚が出席することは政教分離を定めた憲法に反するとの意見があつたが、この様な解釈は全くおかしいことで、憲法とはコンステイテューションの訳だが、これには国の個性、親から受け継いできた伝統との意味がある。日本では、国民の祝日一つとっても千年以上の伝統があり、これが続いてゐることは嬉しいことです」と語られた。

最後にトーマス・インモースの『深い泉の国日本』に触れられ「この詩は、日本は太古からの歴史伝統といふ深い泉に連なつて生き続けてゐる国といふ意味でせうが、素晴らしい言葉だと思ひます。そして良き日本人は良き国際人になるのだと思ひます」と語られ講義を終へられた。

講話「若き友らに語りかける言葉——心のふる里——」

(株)国民文化研究会常務理事兼事務局長 長内俊平 先生

先生は先づ日本の歴史、文化を知るといふことは知識的に知ることではなく、僕たちの血に日本の伝統即ち日本のいのちが流れてゐることを実感することであり、「もし日本とは何ですかと聞かれたら、恥づかしいけれども私ですと答へるしかない



いでせう」と「知ること」の本義を訴へられた。次いで、畑正憲氏（通称ムツゴロウさん）がブータンで会った少女の話をされた。険しい山道を歩くとき、その少女は疲れ果てた畑氏が崖からころげ落ちない様に谷側に立ち、寄り添って歩いたことについて先生は、「この少女の尊い姿に触れたときに、遠い祖先に会ったやうな感動を覚えた」と語られ、さらにその感動の根源の一つとして「人間は誰でも尊いもの悠久なものに触れると感動する。それは生まれた時から真善美を兼ね備へた霊妙な世界——真実在——を誰もが見て来て来ているからだ。」といふソクラテスの言葉を紹介されつつ美しいものを見ると感動するのはその原体験即ち心のふる里が蘇ってくるからなのだ、と話された。

さらに先生は「一切衆生悉有仏性」といふお釈迦様の言葉について「聖徳太子様は、この言葉を深く味識され、人間には霊性が具有されてあるといふ御確信に至り、憲法十七条の二条に（人尤^{はなは}悪^しきもの鮮^{すく}し。能く教ふれば之に従ふ）と書き表されたものと思ふ」と語られたあと、現代の病根は、パンのみを求め、魂を養ふ牧草を刈る努力を怠つてゐることではないか、と警鐘を発せられつつ、魂の糧となる牧草を刈るコツについて語つてゆかれた。先生は子供が持つ素直で清らかな幼心こそが心のふる里であり、この幼心に立ち帰る努力をしていくことがこの牧草を刈ることである。そのためには、最も身近で当り前なこと即ち父母や祖先に感動・感謝することの大事を諄々と説かれ、話を終へられた。

創作短歌全体批評

長崎大学・経・昭和34年卒・日商岩井(株)大阪エネルギー部部长 澤部 壽^と 孫^{つぎ} 氏

前日の夕刻までに全参加者が創作し、提出した短歌は、諸先生方の選歌作業を経て、直ちに若手会員によつて筆写され、事務局の高校生等の深夜に及ぶ印刷作業により二十枚近い歌稿となつて全参加者に配布された。

氏は先づ「皆さんの歌に少々厳しいことを言ふかも知れませんが、それは高飛車な態度でゐる訳ではなく、今後もし是非歌



を作つてみようと思つて欲しいからなのです」と語られた。そして歌稿から各班毎に歌を選ばれ、作者の詠まうとしたところがどこにあるのかを留意されながら、表現の不正確なところ、文法上の誤りのあるところを指摘され、一首一首丁寧に直されていった。また、歌を直されてゆく中で、「文語が使へなくなると、結局祖先の心が分からなくなつてしまふ」と指摘され、日本人は古くから短歌を詠み続け、それを「しきしまの道」と呼び、年齢や職業の違いを越えて自由に心を通はし合つてきたことを話された。最後に、「感性豊かな時期に短歌や古典を学ぶことにより、細やかな心遣ひのできるやうな人になつてください」と語られ、批評を終へられた。

夕食後、別班短歌相互批評が行はれた。各班毎に全員が班員一人一人の歌に心をよせて思ひを述べ合ふ中から、心の通つた研鑽の場が生み出されていった。

夜の集ひ

厳しい日程を消化してきた参加者も、この時ばかりは大いに宴に興じた。

今年もまた、坂東一男先輩（アサヒビール飲料(株)取締役）から心尽くしのビールが届けられた。班毎に、大学毎に様々のグループが登場し、歌ひかつ踊つた「神洲不滅」「進めこの道」の大合唱によつて宴が閉じられた後も、各班室に戻つて最後の夜の尽きぬ思ひを夜の更けるのも忘れて語り合つた。

第五日

（八月十二日・水曜日）

合宿教室最終日の朝がきた。前夜は夜の集ひの後も、各班で心尽きぬ語らひが持たれたらしく、夜遅くまで明りの灯つてゐる部屋が多くみられた。四泊五日間に亘る合宿教室の日程も、あと半日を残すのみである。参加者一同は朝の爽やかな空気を胸一杯に吸ひ

込み、高らかに国歌を斉唱した。

合宿を顧みて

（財）国民文化研究会副理事長・寶邊商店代表取締役社長 寶邊正久 先生

先生は「台風の中大変な難渋をして皆さんがこの合宿に参加されたことを主催者の一人として本当にありがたいことだと思ひます」と先づ述べられた後、「心から思ふ事、本当の事を言ふ、そしてその言葉に耳を傾けて聞くといふことから自身身の精神生活が始まる」ことを話された。そして、吉田松陰の『士規七則』や佐久間艇長の遺言に触れられ、先人のまごころからでた言葉を自分の人生の指針とすることの大切さを語られ、「現在の日本が直面してゐる問題を考へてゆかうとすることも我々が自らの真心に目覚め、これを磨いてゆかうとすることから出発するのです。本当の学問をしたいと思ふ心と日本が直面してゐる大きな危機の中からこれをどう守るのかといふことは大きなところにつながつてゐるのです」と述べられた。最後に先生は本居宣長の「人の誠の心は女童の心の如く未練にして愚かなるものなり」といふ言葉に触れられ、ありのままの心で語つてゆくことの大切さを語られ降壇された。

全体感想自由発表

閉会式も間近に迫り、合宿教室を通じての各自の所感を全員の前で自由に披瀝しあふ全体感想自由発表の時間となつた。学生、社会人を合はせて二十六人が登壇し、思ひ思ひに五日間の所感を述べていった。「人と心の底から通じ合へるのは無理ではないかと思つてゐたが、自分の気持ちを固くならず素直に言ふことができた」「この合宿で自分がやりたいと思つていた学問がはつきりし、今自分がやらなければならないことが分かつた。そしてそれを真剣に話し合へる友人もみつけることができた」「日頃興味を持たない憲法や天皇のことをもつと考へなければならぬと気付いた」「この合宿で人を信じることを学んだ」などの声が聴かれ、またある学生は班

閉会式

員と心から語り合へた嬉しさを歌に詠んで発表するなど、皆生々と語つてくれた。中でも「大東亜戦争に参加した折の軍服を今も洗つてきちんと直してゐます。いざといふ時はそれを着て最前線に立つ覚悟は出来てゐる」と語られた先輩の言葉は心強かつた。

国歌斉唱の後、参加者を代表して中央大学文学部三年の草野直樹君が「参加者一人一人がこの合宿に来年も友達を連れてくれればつながりも広がり楽しくなるでせう。そしてそれが主催者の方々のお礼にもなるでせう」と挨拶した。続いて主催者を代表して(社)国民文化研究会副理事長・九州造形短期大学教授の小柳陽太郎先生は故加藤敏治先生(元・八代市助役、平成元年没)の「ぼくはこの合宿において初めて誠の師を、誠の友を見いだし得たのである。誠の人生がこの合宿により始まったのである。合宿は終はつたのではない。今日から本当の合宿が始まつたのである」といふお言葉と和歌「友らより友らに伝はるとこしへにたゆる日あらし我らの信は」を紹介され、「この信といふ言葉は友人や先人と心が通じあふ、その経験を信じることなのです」と話された。さらに明治天皇の「国のためうせにし人を思ふかなくれゆく秋の空をながめて」の御製を読まれ参加者全員とともに味はれ、「神州不滅といふ言葉は、イデオロギー的なものではなく、日本が神々の力によつて守られてゐるといふことで、先逝きし友らの御霊をうつしく感ずるといふことなのです」と語られ挨拶を終へられた。

その後、全員で「神州不滅」「進めこの道」を斉唱し、亜細亜大学経済学部三年濱田雄一君が閉会宣言を行ひ合宿教室は無事四泊五日の全日程を終了した。

式の後、お互ひに別れを惜しみつつ、来年の再会を約して阿蘇の地を後にしたのであった。

合宿に寄せられたお手紙と歌

神奈川県厚木市長 足立原 茂徳 氏

御参加の皆様が寝食をともにし、思ひを交す友を求めて、有意義な合宿教室となりますやう、遠く厚木からお祈り申

上げます。

台風を衝いて集ひし若き等に語りつがれむ「日本のいのち」

思はざる嵐に集ひいかならむことなからむを祈るはるかに

北九州市門司区・本会員 森田 維佐男 氏

亜細亜大学名誉教授 夜久 正雄 氏

助言者の紹介

砥用町文化財保護委員

(元) 中学校長

鐵中央塩ビ製作所 代表取締役

(元) 法政大学人事部長

(元) 福岡教育大学教授

(学) 尚絅学園常務理事事務局長 尚絅大学講師

舞岡八幡宮 宮司

宮崎産業経営大学 経済学部教授

私立東福岡高等学校 講師

佐賀県立佐賀商業高等学校 常勤講師

日本銀行 監事

浄土真宗本願寺派 沼田組光隆寺

鐵不動産コンサルタント 代表取締役

鐵山陽自動車学校 顧問

鐵千代田コンサルタント 代表取締役専務

航空自衛隊 航空教育隊生徒隊 教諭

宗教法人 乃木神社 称宣

新技術事業団 管理部業務課課長

日産自動車鐵 財務部次長

新日本製鐵鐵 機械プラント事業部

環境プラント部 部長代理

拓殖大学 外国語学部英米語学科 教授

鐵竹中工務店 国際事業本部営業部 情報課長

鐵BBS金明 代表取締役

福岡県立新宮高等学校 教諭

亜細亜大学 助教授

中島法律事務所 弁護士

神奈川県立泰野曾屋高等学校 教諭

九州大学医学部 循環器内科 助教授

公務員

公務員

鐵アクアマリン 代表取締役社長

福岡県立福岡中央高等学校 教諭

熊本県立第二高等学校 教諭

鳥栖市役所 福祉事務所

住友電気工業鐵 生産技術本部主席

山口県立高森高等学校 教諭

久留米大学附設中学校・高等学校 教諭

宮崎県立日向高等学校 教諭

長崎中央郵便局 郵便課 総務主任

日産自動車鐵 宇宙航空事業部 MLRS営業課

防衛施設庁 施設部施設対策第一課

福岡大学医学部精神医学教室 医師

鐵日本インベスターサービス 調査部調査役

北九州市立八幡病院 放射線科技師

稲津利比古

中田 一義

小野 吉宣

東中野修道

中島 繁樹

原川 猛雄

小柳 左門

太田 文雄

加来 至誠

高岡 正人

占部 賢志

白濱 裕

西山 八郎

布瀬 雅義

寶邊矢太郎

名和 長泰

竹下 鉄郎

橋本 公明

内海 勝彦

山根 清

古井 博明

小柳志乃夫

森田 仁士

若築建設 九州支店建築部 技師	池松 伸典	熊本県立楠中学校 教諭	坂本 太郎
熊本赤十字病院 外科医師	福田 誠	甘木公共職業安定所 管理課	古川 広治
大阪府立交野高等学校 教諭	絹田 洋一	学校法人津田学園 津田学園中学校 教諭	三林 浩行
日産自動車 いわき工場開設準備室	奈良崎修二	日本青年協議会	清水久仁子
福岡県立筑紫丘高等学校 教諭	酒村聰一郎	ヤマハ音楽教室システム講師	橋本 加枝
出光興産 店主室	広島 秀明	電源開発 火力部火力業務室	中富 仁
日本油脂 塗料事業部 自動車塗料課技術部	上村 栄章	鐵福武書店 教育部	大島 伸一
福岡県立玄洋高等学校 教諭	矢永 誠二	東急工建 製造部相模原工場事務課	茅野 輝章
福岡県立三池高等学校 教諭	濱田 清人	合宿運営委員 折田 豊生・白濱 裕・布瀬 雅義・酒村 聰一郎	
熊本製粉 不動産部	吉村 浩之	八木 秀次	
芦北町立丸米小学校 教諭	蓑田 誠一	指揮 班 是松 秀文・竹下 鉄郎・濱田 清人・吉村 浩之	
福岡県立春日高等学校 教諭	與島 誠央	竹内 昭彦・大日方 学・日比生 哲也	
安信住宅販売 新宿センター	松吉 基光	木村 俊一郎・久保田 真・坂本 太郎	
公務員	木村俊一郎	眞田 博之	
金文図書出版販売 教育部青雲学院	竹内 昭彦	眞田 博之	
饅干趣会	桐山 澄子	名和 長泰・西山 八郎・池松 伸典・矢永 誠二	
福岡県立玄界高等学校 教諭	日比生哲也	竹内 孝彦・茅野輝章・中富 仁(事務協力者)	
福岡県立玄界高等学校 教諭	竹内 孝彦	蘇原 幸枝(本会職員)	
船橋市立法典東小学校 教諭	佐瀬 竜哉	福岡県立春日高等学校二年 田島 光晴	
日本青年協議会 研修局	大日方 学	戸渡 卓司・福岡県立筑紫丘高等学校二年	
神奈川県立津久井高等学校(定) 教諭	眞田 博之	坂田 裕之・廣田 貴之・豊田 雄啓	
アダマンド工業 海外事業部海外営業課	中澤 栄二	東京都立山崎高等学校一年 稲津 利昭	
小諸市役所 建設部建築課管理係	久保田 真	放送・記録班 森田 仁士・松吉 基光	
熊本県立天草高等学校 教諭		写真 班 今泉 一彦	

走り書きの感想文集

(各班別
に集録)



これは閉会間ぎはの一時間余で参加者全員に、四泊五日間の感想を走り書きで書いてもらったものです。「仮名遣ひ」は原文のまま掲載してあります。

なほ、各人の感想文の末尾に小さい活字で載せられてゐる和歌は、この感想文とともに提出された第二回目のもので、この文集の末尾にまとめて掲載したものは第一回目の創作です。対比して御覧いただくと大変に進歩してゐる跡が分りいただけるものと思ひます。

第一班—男子学生—

今はただへトへトだ

(大正大学 文 四年 岡山英一)

どうしたら皆がお互ひに心を開いて語り合へるやうになるか、そればかり考へて班員に接してきた。辛かった。自分の力のなさが悔しい。このまま皆がどういふ気持ちで帰って行つてしまふのか。申し訳ない。少し落ち着いてから手紙を書かうと思ふ。今はただへトへトだ。

全体感想自由発表にて

班長の情熱我に伝はりしてふともの言葉に救はれし思ひす

学問の感動を知った

(金沢工業大学 工 二年 加藤勲樹)

自分は体育会系の部活にはいつているのだが、合宿にくるまでは、学問ばかりやってるやつに本当の感動などわかるわけがないと思つていた。だが、班別討論のとき班長が長内先生の講話の後、なみだを流して話をしてのを見て、学問でも同じように感動できるということがわかった。同じ日本人でもいろんな考え方をもっている人がいて、そういう人たちに会えたことがとても楽しかった。

最終日部屋の中に

窓越しに見える景色は変らねどいつもと違ふ今日の阿蘇かな

意見を言える人間になりたい

(拓殖大学 外 一年 轟 崇大)

この合宿は全日程がハードスケジュールに感じた。初めての合宿だったので何をするのか見当もつかないまま阿蘇に着した。講義もとてもレベルが高く、眠くなつてしまふときもあった。また、班別研修の時間も班長をはじめ他の班友が自分なりのしっかりとした考えを持ち発言しているのを見てろくな考えを持っていない自分が情けなく思えてしかたがなかった。最終日の全体感想自由発表でも、多くの人達が壇上で自分の感想を流しながら発言する人もいて驚いた。合宿を通して、もっと自分は何事にも真剣に考え、知識を増やし、意見を言える様な人間になる必要があるとしみじみと感じた。

班討論意見とびかふ班友ら少なき意見我のみにして

今まで気づかなかつた自分に気づいた

(第一工業大学 工 二年 清水健司)

高校の担任の先生に勧誘されてなんとなくこの合宿にやってきました。日頃聞きなれないことや興味を持っていないことについての講義は難しく、班別討論でも自分の意見が定まらず班員のみなさんにも迷惑をかけました。しかし、いろいろな講義や人の意見を聞いてなにか自分のものになるような

ものがあつたように思います。今まで気づかなかつた自分にも気づかされたような気がします。始めは自分がこんなところに来て場ちがいではなからうかと思つていましたが、班員のみんなど毎日をくらししているとそういう気持もうすらいできました。徹夜の短歌批評などつらいこともいろ／＼ありましたがいい経験となりました。これからも幼心を忘れずにいろいろとがんばってみようかと思つていきます。

高校の恩師と共に肩くみて元寇歌ひ喜びみちたり

「先輩」と呼べる人に出会えた

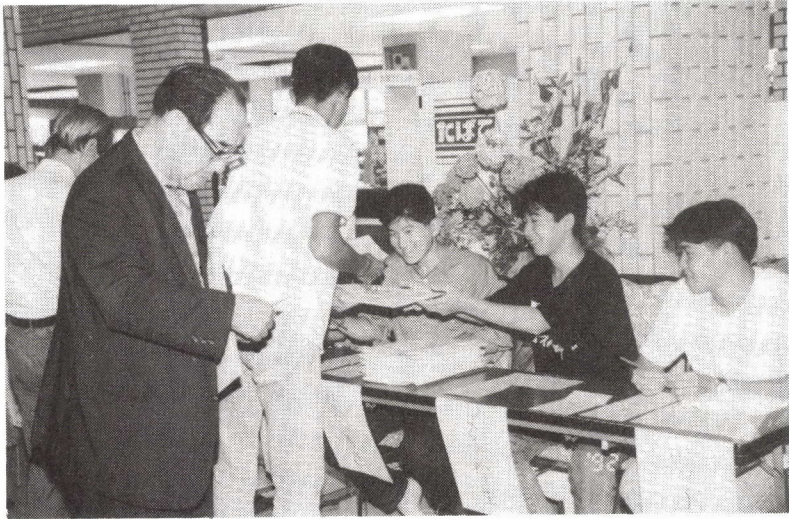
(大阪教育大学 教 一年 阿久根健)

参加の動機は真剣に話せる友達を見つけることでした。この目標は達成されたと思います。まだ人生観や恋愛、日本国について深刻に話したわけではないですが、この人となら話せそうだという雰囲気が出て来ているので満足しています。また、学問についてはそれ程期待を込めて参加したのではなかったのですが、自分の心に潜在していた「積極的に学ばねば」という気持ちが現実化してきたということがとても大きな収穫になったと思います。本を読まない今までの習慣を捨て、興味を持って読書を試みよう、してみたいと思ひました。「先輩」と呼べる人に出会えたのが大変嬉しかったです。

学問にとりくむ姿勢手土産に心に残る阿蘇を後にす

未熟にて生まれ出でこしものなれど立派にしたし我がつくる歌

カメラ・レポート1



全国各地より続々と参加者が到着する。受付けで名札と資料袋を受取ってから、各自の班室へと向かふ。

自分は何にもわかかっていないことに気付いた

(明治大学 法 一年 吉野裕介)

私は、「幼な心」に帰って感動することや、安易に人を信じてることなどは大人気ない行動であり、格好悪いと考えていた。そして、世の中に絶対的真理など存在せず、個人個人それぞれの真理のみがあると信じていた。そう割り切ることがうまく生きることにつながる、と信じていたが、それはこの合宿の長内先生の熱いお話や八木先生の導入講義によって事に崩壊した。正直なところ衝撃は大きかった。その衝撃を班友へ素直に話すことができなかったことは大きな心残りである。「自分は何にもわかかってはいない」ということに気付いたことはこの合宿の最大の収穫だった。本当の学問を行い、真実の歴史を知るためには上っ面の知識など役に立たない。本当に素直な心を持ち人の言うことに耳を傾け、思いやりの気持ちを持つてはじめてできるのだ。

むせび泣く友の姿に吾思ふまことの心そこにもるを

感激する心、感謝する心を大切に

(防衛大学校 理工 四年 野口泰志)

学生としての最後の夏休みに何か思い出に残ることがしてみたくて参加しました。始めはこの会の主旨が理解できずにとまどう事がありました。そして参加したことが無意味だったのではないかと後悔もしました。しかし、一日一日経るご

とに自分がずっと悩んできたことの解決の糸口がこの合宿にあるのではないかと考える事ができました。それは、国や家族や祖先を愛すること、伝統を曲げることなく受け継ぎ、我が子、未来へと伝えていきたいということ、です。その為に感激・感謝する心を忘れずに大切にしていきたいと思えます。みなさんの素直な気持ちに出会えて本当に感謝しております。自由発表で素直にマイクを手にすることができず残念に思っております。

うれしきはわれが悩みて思ふことをみなはやさしき解決せしこと

班員に対するきびしさに感銘を受ける

(早稲田大学 理工 三年 臼井秀之)

今まで複数の合宿に参加してきたが、どうしても受け身的な参加であった。だけど今回は台風で電車が止まってしまい、友達の家では明日行った方がいいよと言われたが、それでも僕は第一日目の午後七時前に着くことができた。そのおかげで村松先生のご講義が聴けてとても嬉しかった。自分が積極的に参加できたと思う。次に第四日目の班別研修や短歌相互批評の際に、班長の岡山さんが、どうも真剣に取り組んでいなかった人をしかりつけたことに非常な感銘を受けた。

僕はどうしても人に対し甘くなり、ついつい波風立てぬような態度をとってしまう。これは相手のことを、ひいては自分のことを真剣に考えて対処していないための思う。これからは人の話をもっともって耳と心を傾けて聴くこと、そ

して自分に対して真剣に取り組むこと、この二点に気を付けたい。

短歌相互批評で

ともどちの批評聴くほど我が歌のつたなきことを身に沁みて思ふ

第二班 男子学生

己にない心に魅かれた

(東海大学 教養 四年 松本敏浩)

最終日に到り、班長をはじめ班員との生活、交流は期待通りのものであり、途中で引返さずによかったと思います。参加者の涙とともに語る姿を見、己にはない心に魅かれました。また、講師の皆様のお話は興味深くとてもためになりました。特に長内先生のお話には己の欠点を見事に見抜かれた思いがし、改めていこうと強く思いました。

合宿全体を通じて

班友と夜な夜な語る部屋の内日々親しき思ひ増しゆく

来る前の不安も消えて合宿の時の流れも早く感ずる

これからの日々をつとめを果たしつつ休みをとりて再び会はむ

ふるさとの心を感じる日本人になりたい

(日本文理大学 工 一年 鐘築光昭)

吉田松陰先生についての話が一番印象深く残っています。

カメラ・レポート2

37回全国学生青年合宿



主催者を代表して、国民文化研究会理事長・小田村寅二郎先生が「頭を鍛へることは簡単だが、心を鍛へることは難しい。この合宿では、その心を鍛へることを目標として友との付き合い合ひを深めてゆきませう」と挨拶された。

松陰先生の「学問は道を得るに在り」の文を読みながら解説されるのを聞くにつれて、松陰先生の学問に対する考えの深さに感動しました。自分が松下村塾で教えられているような気がして、先生の日本国に対する愛情と弟子達に教える熱意を感じました。また、和歌を通してまだまだ素直に気持ちを表し出すことが出来ていないので、もっとありのままの心を出すことのできる日本人になり、もっと歴史の中で人物をたどることによって、ふるさとと心というものを感ずることのできる日本人になりたい。

学問はいと高きものと思ひつつ道を得るためつとめてゆきたし

世の中や自分の人生に対する見方を変えたい

(長崎県立大学 経 一年 山下真史)

ここに集まった人達は、自分の内に秘めたる思いを偽りなく語っている。そのことに感動を覚えました。私は全くの不勉強で班別研修で意見を出すことも容易にできませんでした。しかし、微々たるものですが、意見を言わせていただけたということ、今後の生活に役立てていきたいと思えます。そして、少しでも世の中や自分の人生に対する見方が変わればと願っています。もし、この合宿に来なかったなら、得ずに終わってしまったものがたくさんあると思います。こうしたすばらしい人々のいることも知らずに過ごしていたことでしょう。

合宿を終へるにあたって

夏の日に熱き心の人達にあひまみえてぞうれしく思ふ

先生方を手本に精進してゆきたい

(帝京大学 法 一年 秋山直之)

この合宿に参加した事と、多くの友人に逢えたことにこの上ない喜びと感動を覚えました。先生方の御講義で、戦前から現在までの日本の歩み、そして今の日本がどうあるべきかが、自分なりに理解出来たと思います。今までは、国旗、君が代を毛嫌いしていました。しかし、今となっては過去の事で、今まで考えたくもなかった「愛国心」というものが、自分の心の中に生まれてきました。

長内先生、小柳先生、奥富先生、八木先生方をお手本にあらゆる事に全力を尽くし、精進してゆきたいと思えます。

人として何ができるか考へる我が人生はその為にあると

感動する心を取り戻してゆきたい

(金沢大学 法 二年 伊丹千雄)

この合宿に参加して、同じ大学生でも自分らとは全くレベルの違った話をしている人がこんなにもいるのかと驚かされた。最初は結構ばかばかしいという感じで来たのだったが、日が経つにつれ、自分の考えていたことは間違っていたのではないかと思つた。そしてなるべく討論に参加できるようにしようと考えが変わってきたことが一番の収穫だったと思う。

自分には、今は未だ感受性は取り戻せていないが、少しずつ感動する心というものを取り戻していきたいと思う。また、この合宿をのりこえた今はすがすがしい気分である。

阿蘇の地の短くつらき日々なれど終はりてみればすがすがしきかな

自分の感情を感じたい

(福井工業大学 工 三年 鈴木康之)

合宿の最初は、班別研修の時間も「自分達とはレベルが違うんだ」と半ば無理矢理に思い込み、ひたすら逃げ回っていました。しかし、工大の自分には受けた事もない人間味溢れる講義や、班別研修でも場違いと思いついていた自分にさえ、しっかりと目線を合わせ、自分でさえもよく分かっている自分の心を真剣に考え理解しようとして下さる占部先生や長内先生、そしてそれを自分の事のように聞いて下さる班長さんはじめ、班員の方々に、いつの間にかもっと分かってもらいたい、それ以上に自分の感情を自分自身で感じたいと思うようになっていました。

全体感想自由発表にて

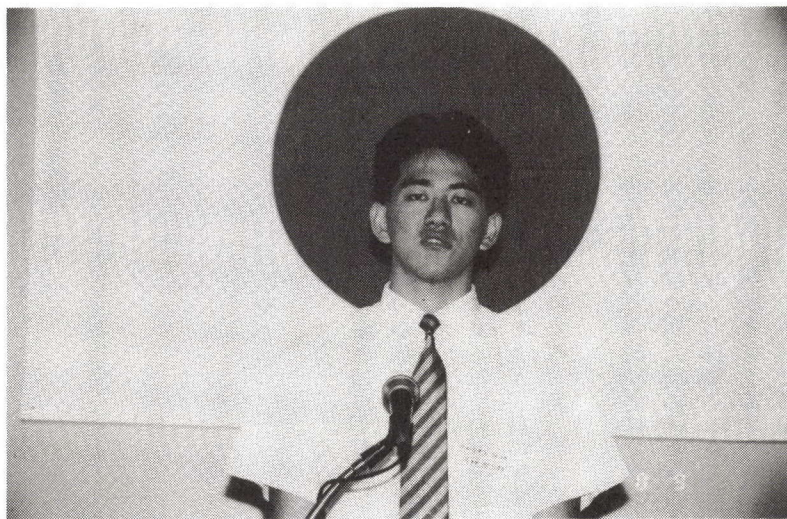
ハンカチを手に握りしめしみじみと語る女生徒に心震へぬ

そのままの心で接してゆく

(九州大学 工 四年 松岡篤志)

長内先生が「聖徳太子についての黒上先生の御本と『明治天皇御集』は戦争にも持っていた。」又「その黒上先生とそ

カメラ・レポート3



参加学生を代表して、京都産業大学三年・濱地賢太郎君が「自分の気持ちを述べるだけでなく、講義の先生や班員の心を知ることが大切にして取り組んでゆきませう」と呼びかけた。

の友人の梅木さんとの「友情」に国文研の原点がある。」とおっしゃったお言葉が印象深かった。

これまで自分は先生方がよくおっしゃる、「友情」とか、「つきあひ」といふことをなかなか感じ汲みとることが出来なかった。しかし、今回のひとつひとつの行事に取り組む中で、あたりまへのことに感動する豊かな心を鍛へ育んでゆくことこそが全てのものになるといふことをしみじみと感じ、又それは、人や自然と「つきあふ」——そのままの心で接しゆくこと——中で感得されてゆくことを感慨深く思った。

長内先生の講話を拝聴して

太子様と明治の帝のみ言葉に心寄せつつ生まれし師は

最後の班別懇談

心から己が思ひを語りゆく友の眼の清らかな

涙がこぼれて仕方なかった

(小諸市役所 中澤榮一 27歳)

学生時代を通して四回目の参加でした。今回は一番充実してゐたやうに思ひます。自分の心が素直に班員の真心の声を聴き、そして御講義をされる先生方や先輩方の溢れんばかりの想ひを感じました。全体感想発表の時には、訥々と或いは、涙に声をつまらせながら話してくれる度に、私の心は一杯となり涙がこぼれて仕方がありませんでした。「おのれの感動を信ぜよ」といふ言葉を大切にしてくれから生きてゆきたいと思ひます。

全体感想発表の折に

心から溢るる思ひ聴きをればおのづと涙の流れおつるも

最後の班別懇談

班友の真心こもる言の葉を聴けば胸内熱くなりて来

第三班 — 男子学生 —

何とも言えない連帯感を感じた

(明治大学 法 一年 秋元 学)

この合宿へはサークルの先輩の勧めで参加したのですが、今合宿を終えるにあたり自分が痛切に感じるのは「本当にこの合宿に参加して良かったなあ」ということです。初めは期待を感じつつも、やはり自分より年上の方達とうまくやっていけるかと不安も感じていましたが、班の先輩達は本当にいい人ばかりで、違和感なくみんな話し合うのにそれ程時間はかかりませんでした。

自分が感じたのは、班友との班別研修で自分が心から話をした内容が他の班員の共感を得た時の何とも言えない連帯感です。自分は今までこのような体験をしたことがありませんでしたが、今回の合宿で幾度となく体験でき、大変嬉しく思いました。来年も是非、この合宿に参加し、素晴らしい仲間を作りたいと思います。

班友と楽しく過ごせし日々はなほ今も残り我が胸内に

素直な気持ちの大切さを語りかけてゆきたい

(鹿児島大学 農 三年 椎原恒介)

今回の合宿は「心を大切にする」といふ御講義が多かった。講義をされる先生も真剣そのもので、其れが僕等学生にも伝はって、皆とてもすなほな気持ちで聞いてゐた。少なくとも僕等の班ではさうであつたと思ふ。

人間はもっと素直になつても良いのではないだらうか。もっと分からないものは分からないとし、本当に心から受け入れられた時はその気持ちをもっと素直に話しても良いのではないだらうか。大学に戻つたら、さういふ事をもつて人に語つて行きたい。

秋元兄に

師の君の熱意あふるる御言葉に君は涙を止めかねつも
すなほなる君が心をたふしと思ひて我は壇上に立つ

班長大島兄に

すなほなる人集まれる三班の班長大島我は忘れじ

大谷兄に

阿蘇に来て君が作れる歌詠めば優しき父母浮かび来る心地す

杉本兄に

サークルに精出しはげむ生活は生きのあかしなりやよはげみませ

兵庫兄に

大学に踏み止まりて立つ君の姿ををしも我もはげまむ

梅崎兄に

カメラ・レポート4



合宿運営委員長の熊本市役所技師・折田豊生氏が、四泊五日間の研修を過ごす上での心得を述べた。

壇上に上りし君の姿見て勇気づけられ我も上りぬ

得るものがあつた

(富山大学 工 二年 大谷利宏)

中田先輩に誘われて、はつきりいいますと訳も分からず来たこの合宿ですが、得るものがあり、よかつたと思つていません。

講義の内容は難しくて分からない所も多々ありましたが、人と話をする姿勢というようなものを教えられた気がしています。また、短歌というものに興味を持つことが出来て、非常に意義あるものとなりました。

子とともに丘の草食む馬みれば故郷にいます父母思はる

班別研修を経験して

座るたび走れる腰の痛みにて学びし事の重さ感ぜり

班友の感動する姿に打たれた

(福岡大学 経 四年 梅崎建吉)

合宿の中で一番感動したことはある班友が長内先生の御講話を聞いてとても感動し、その後の班別研修でもその感動を涙しながら語ってくれた事でした。やはり、その涙する程の感動こそが人生最高の宝であり、生きる力となると思うので、その班友にはその感動を本当に大切にしたいと思ひます。また自分ももっとと心を鍛えて素直にそして涙する程の感動をする事のできる人となつていきたいと思ひま

す。

長内先生の御講話の後に

先生の御言葉聴きて感動し涙ながらに友の語るも

本当に合宿に参加して良かった

(防衛大学校 人文社会 一年 兵庫 剛)

今回初めての合宿参加であり、聞くこと見る事全てが新鮮で大変充実した五日間であつたと思ふ。

講義においては、諸先生方の貴重なお話をうかがふことができた。また班別討論では自分とはほぼ同年代の班友と真剣に話をすることができた。短歌も初めて作つたし、慰霊祭では厳かな雰囲気にも目の覚める思ひがした。夜のつどひのためには班友と企画して演劇の準備も夜遅くまでした。

今まで全く会つたこともない人達とこの合宿で出会い、五日間といふ短い間ではあつたけれども互ひに学び合へたことは自分にとって大変貴重な経験となつた。本当に合宿に参加して良かったと思ふ。

家路へと今就かむとす班友と別れ難しとただ思ふなり

皆さんに「ありがとう」と言いたい

(福井工業大学 工 二年 杉本利幸)

自分はこの合宿教室に初めて参加したわけだけど、正直に言つて皆について行けないと思つた。班別研修の時間でも自分だけが浮いているような気がした。でも班のみんなはやさ

しく、この無知な自分に色々なことを教えてくれた。感謝の気持ちでいっぱいです。最後に講義をしてくださった先生をはじめ、自分とかかわった人すべてに「ありがとう」と言いたいです。

班友の言葉がすっと入って来た

(株)福武書店 大島伸一 24歳

班友の言葉がすっと入って来るやうに感じられたことを嬉しく思ひます。討論のはじめの頃には、どこかまだ人の言葉をすんなりと受け容れられないといった感じもあったのですが、話す友の目をしっかりと見つめてみると、さういふ迷ひのやうなものは消え、友の言葉にこもった思ひを深く感じる事が出来ました。

長内先生とはもう三年のおつき合ひになりますが、昨日お話をうかがってゐるとき、今までで最高にあたたかき心の交流を感じました。嬉しかったです。この体験を大切にします。

秋元学君に

涙こぼし感動語る班友をみるにおのづと涙わきくも

兵庫剛君に

合宿が進むにつれていと優しき君の眼に力こもりゆく

大谷利宏君に

ふるさとの父母思ふすなほなる気持ちに心がすつと伝はる

杉本利幸君に

驚きのことばかりなりとややられて言の葉運び語りゆく君

カメラ・レポート5



指揮班長の福岡市立奈多小学校教諭・是松秀文氏から合宿教室全般についての諸注意が説明された。

椎原恒介君に

「いざといふ時自分は戦ひにゆきます」とふ言の葉重く心に響きぬ

梅崎建吉君に

班友の一言一言しっかりと受け止むる君が心豊けき

第四班—男子学生—

心を打ち開けて話せる友が出来た

(防衛大学校 理工 一年 筒井茂広)

この合宿には、刺激と人との出会いを求めて参加したのですが、今この四泊五日の合宿を振り返ってみて、求めていたものより、もっと大きなものを手に入れた様な気がします。

忘れ去られようとしている日本の心、日本人としての感性、文化、愛国心、そしてなによりうれしかった事は、心を打ち開けて話せる友が沢山出来た事です。中学高校と六年間のうち、この合宿で知り合った様な友には巡り会えませんでした。しかしし大学に入ってこの一年と四ヵ月で一人の親友、一生の友と言える友が出来ました。しかし、この合宿ではたった三、四日のうちでその親友としか話せないような事も話せ、相談出来たことは、今、大きな悩みをかかえている私にはとてもありがたかった。

感動する心、そして感動して素直に泣ける事、幼な心など、人としての根本的な一番大事な感情がよみがえりました。

日は過ぎて別れの時が来たれども「また会はうよ」と約束交はしぬ

来年も必ず参加したい、

(宮崎産業経営大学 経 一年 岡田英輔)

初めてこの合宿に参加しましたが、その動機はあまりにも不真面目であったと深く反省しました。それは、合宿を通して班の人達や御講義をしてくださった先生方の熱い情熱や心素直な言葉などに強く胸をうたれ感動し、自分の無学さ、小ささをまざまざと知らされたからです。私は今まで友達と自分の思っていること、感じていることについて正直にまた本気で語ったことが無く、いつも心のどこかで何か物足りないと感じていました。ですが、今回その機会ができ、班友の人達と四泊五日という短い間でしたが、自分が素直に感じ思った事を語ることができ、本当の意味での友ができたように思え、この縁を大切にしていきたいと思えます。

来年また合宿に参加できれば……いや必ず参加したい。

時忘れ情熱ぶつけ班友と語り合へるはうれしくもある

みじかくも終へにし夏の合宿でかけがへもなき時を過ごせり

どうもひっかかるものがある。でも………。

(富山大学 理 二年 長 和俊)

参加前にこの合宿及び団体に対して思っていたイメージはいくらかうすれました。でもこの合宿でいくつも見られた日の丸、君が代、天皇の歌などに強い抵抗を感じます。

講義の内容はともかく、その講義を聞いた後の議論がとてもよかったです。日頃突っこんだ話のない生活の中で、この合宿では意見をたたかわせることが出来ました。日頃そういうことがないだけに多少の独りよがりがあったかもしれないが、しっかりうけとめてくれた班の方々に感謝しています。

しかし、最後の自由感想発表で、軍帽のおじいさんに涙流した女の子の気持ちと、長内先生の講義をみんな「良い、良い」と言うのがよくわからない。たしかに良い講義なんですよけど、どうもひっかかるものがありました。

これも自分の独りよがりなのかもしれません。でも、そういう多様性を認めてくれるところなら、もう一度来てても良いと思います。

阿蘇の地に共に学びし五日間すばらしき友を得たる思ひす

国のいのちの連なりを感じた

(早稲田大学 教 三年 鈴木由充)

この合宿では国のいのちの連なりというものを感じました。それは山内先生の御講義の「私達は死者にも、そしてこれから生まれて来る者にも責任を負う」という内容に簡潔にあらわされていると思います。その縮図がこの合宿にあるように私は思いました。講師の方々の真剣さ、先生方の熱心さに、先生方がどれだけ私達に願いをかけておられるかということを感じます。そういう先生方の御姿に接し、

カメラ・レポート6



二日目の午前、「国際情勢と日本」と題されて、筑波大学名誉教授・村松剛先生による御講義がなされた。先生は、今、日本は自由主義世界の一員として生きるか、全体主義的独裁体制の側につくか、重大な岐路に立ってゐる」と指摘された。

私はその期待に答えねばならないと思いました。こう思ったのは恐らく私だけではないでしょう。歴史とは、国のいのちの連なりとは、そういうことではないでしょうか。真に心から後世に己れの持っているものを伝えようとする人がいる。そして、それを真剣に受け止め、答えようとする人がいる。

そのくり返しが歴史ではないでしょうか。そして、その構図とはなんとこの合宿の様子に似ていることでしょうか。

老齡なれど未だあふるる思い止まぬ白井氏とその御姿に涙する女学生。その美しき様子が印象に残りました。

全体感想自由発表にて

国の為死を覚悟せる翁見て涙す乙女の姿美しも

松陰を読みみたい

(中央大学 文 三年 草野直樹)

松陰を読みみたい。中大読書尚友会にさそって下さったのは三林さんだった。正大寮に招いて下さったのも、夏合宿にさそって下さったのも三林さんだ。三林さんの在学中には、そのお気持ちをごとく裏切っていた自分に気付いた。入寮など考えもせず、寮での勉強会にもほとんど行かなかった。

夏合宿にも参加しなかった。今やっと、三林さんが自分に伝えたかったものが見えてきたような気がする。その三林さんが、自分に勧めて下さっていたのが松陰だ。班付の奥富先生の御講義の題も松陰だった。その奥富先生と班友達とわずかな時間ではあるが松陰の輪読をすることができた。感ずるも

のがあった。松陰を読みみたい。

二年前「合宿に来よ」とさそはれし先輩(とも)の言葉をいま思ひだす

「足りない部分」に気付いた

(法政大学 経営 四年 永岡昭人)

初め、私はこの合宿に参加することに抵抗がありました。パンフレットを見ると、「話し合える友達」とか「大学時代なにをするのか」などと書いてありましたが、私にとってそのセリフは無意味なものでした。体育会である私にはそんな友達も、やるべきことも山ほどあります。しかし、違った面から自分を見直すことをしていなかったのでは、と思いはじめたのは合宿三日目程からです。自分のやってきたことは足りないとは全く思っていないませんが、「足りない部分」「忘れていた部分」に気付かされた時には、今まで胸を張っていた自分が恥ずかしくなってきました。そのことに気付いただけでも私にとっては大きな意義がありました。私なりに、そのことを考えながら生きて行きたいと思います。

短歌には驚きました。自分の思ったことを班員のみんなに手を加えてもらい、完成後の歌を読んだら、部活の時の感動とは違った深いものがありました。その後一時間くらいずっと感動しつづけるほどでした。

窓辺にてくゆらす紫煙ながれゆく先に見えるは阿蘇の山々

“班”という同信生活

(佐賀大学 理工 四年 白木 潤)

今回の合宿で最も良かった事は、班員すべてが本心に心を開きあって語る事が出来たという事です。一人一人が、いま自分が持っている問題意識や、自分が今の大学で学んでいる意味を自問し、発表する場を持ったので、おのおのの人物像を初めから把握する事が出来、非常に面白く、興味をひかれながら班の中にとけ込む事が出来ました。僕は大学で一つのサークルを運営しているのですが、こうした営みは、サークルの中でもまれな事で、大変貴重な体験をさせて頂きました。僕は今回、国文研の“班”とは、正に同信生活の場であったのだという事を思われ、これもまた国文研の、いや日本人の伝統の一つである事に気付かされました。

しかし、その中で班員からなぜ天皇を学ぶのかといった根本的な疑問を発せられ、僕はその問いに十分な解答を与える事が出来ず、今まで自分が如何にいいかげんに学んでいたかという事が痛感させられました。

五日間同じ部屋にて過ごしたる同信の友を吾忘れめや

様々な人の姿に様々な生き様を見て心をどりぬ

登壇し無垢の思ひを述べ給ふ一人一人を貴くおもふ

言の葉にならぬ思ひを述べにける佐賀の御友の姿嬉しも



ロビーで歓談される村松先生

感動したことを信ずること

(甘木公共職業安定所 古川広治 26歳)

合宿は四回目で、初めて班長をしました。四回もきているのでやれないことはないだらうと思ひましたが、不安もありました。班長を経験してきた友がたくさんゐます。合宿を終へようとしてゐる今、その友らの気持ちがよくわかりました。

感動したことを信ずること、それを素直に伝えることができるやうに努力したいと思ひます。

思ふことをこめてかたりくる友らの姿に胸をうたれる

第五班 男子学生一

心の満足が得られれば、自分が生きていく証になる

(福岡大学 経 一年 辛島英生)

この合宿を通して、心が通じあえる友達をつくれたことを大変嬉しく思いました。初めは恥ずかしさを隠しきれずに、はっきりとものが言えないもどかしい立場にいました。でも最後の日には誰もが積極的に自分の意見を押し進める姿に感銘を受けました。

第三日目の御講義の中で加納祐五先生が言っておられた

「心の満足が得られれば、自分が生きていくという証になる」という箇所に胸が痛む思ひがしました。確かにそうです。ふだん大学生活を送っている中で何か心が充たされぬまま過ごしてきたわけで、その空間を少しでも埋めるためにこの阿蘇の合宿を過ごしてきたわけです。そのためには和歌を創るということでした。自分の心と自然の心を見ることによって自然の命を見ることが出来る。そこから和歌が生まれてくるそうです。和歌はありのまま自分の素直な感動を詠むことができた時にその楽しさ、すばらしさがあるのだと思ひます。それだけでなく和歌は感動の響きをいつまでもとどめておくことができるものだと思われます。

とても短い日の間に大変勉強になることばかりでした。

果てしなく広がる緑の草原に心あらはれ飽かず眺むる

日本とは自分自身だ

(福井工業大学 工 三年 竹内崇人)

自分は進んでこの合宿に来た訳ではなかったが、来て学んだことは一杯あった。気づいたこととして自分の学校でするような話をする友達はまず班のなかにはいなかった。ここへ来て一日終わった後「自分とは何か住んでいる世界が違う」、こう真剣に思った。

学んだことは意外と一杯あり、後悔は全然していない。今何か言えと言われたら「日本とは自分自身だ」と言われたことがすぐに出てくる。これは難しいことだと思ひますが、すぐく

いい言葉だと思った。他にもいろいろと大切な事を学んだがこれらが本当に自分自身で分かるように努力していきたいと思っただ。

最後に、この合宿に出会えた事を嬉しく思った。

つらかりし夏の合宿終はりしが友との別れに心残るも

学問を熱く語る事の出来る人達

(グリーン・マウンテン大学中退 武原満明)

日頃締めまらない生活の中、この合宿に参加しないかと父に言われました。この合宿の講義などは外に置いて、様々な人に出会う事が目的でこの合宿に参加しました。しかし、阿蘇に来る途中で国文研の先輩方にお会いし、この自分の緩んだ気持ちでは合宿に参加して来る方々の迷惑になると考え、半ば緊張した気持ちでこの合宿に参加しました。

始まってみると想像していた以上で、全てが予想を上回っていて本当に嬉しかったです。講義の内容、班友達、班長の熱心さ、どれをとっても自分の今迄、たまりにたまった欲求を満たしてくれるものばかりでした。だらしのなかった自分を叱ってくれる人、励ましてくれる人ばかりでした。

自分はこの合宿で本当の学問、又それを熱く語る事の出来る人達に逢えたように思います。

最後に、この合宿を紹介して下さった上村先生に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

合宿を終へて



「合宿導入講義」。東京理科大学講師・八木秀次氏は「人生と学問—価値相対主義的人生観からの脱却—」と題して、「学問を僕らの人生に直結させる営みがこの合宿教室です」と語られた。

時過ぎて終はりてみれば一瞬のことにも感ずこの夏の阿蘇

素晴らしいと思つた短歌相互批評

(産能短期大学 通信教育 一年 西島 司)

私はこの合宿教室はどのやうな学問を行ふのか全然知らず
にただ単に誘はれて来た次第であります。

全く幸運な事に最近になって興味を持ち出した日本の文化
関係の事でありましたので、本当に嬉しく思ひました。最初
の村松先生は現代の国際問題について述べられ、私にとって
いや日本国民全体にとって重要な事でありました。その後の
班別研修では今までマス・コミュニケーションによって誤つ
て理解してゐた事を東中野先生に教へられ非常にありがたく
思ひました。

そして特に素晴らしいと思つたのは、短歌相互批評の時に
自分がかういふ感じを出したいのに出せず苦勞していたら、
いとも簡単に小田村四郎先生は自分が出したかつた気持ちを
詠んでくれ誠に驚嘆させられました。

自分もこれくらいまでとはいかなくても普通以上のポキヤ
ブラリイを身につけたいとつくづく思ひました。

頂きゆ白き煙の湧き出でて絶ゆる間もなく立ち上がりゆく

みんなの気持ちが一つに共有できた

(鹿児島大学 農 二年 葉棚幸輝)

今回、この合宿へは初めての参加であったが、参加するに

当たつて、相手の心を大切にしよう、そして人を信じる力を
養おうと思つていました。班別研修や和歌創作を通じて、相
手の話をよく聴き、自分の気持ちを素直に表現しようと思つ
てきました。特に短歌相互批評では、その人の歌を皆と真剣
に話し合ふことによつて、みんなの気持ちが一つに共有でき
たやうで本当に嬉しかったです。この合宿に寄せる先生方の
思ひや友らの思ひをいつまでも大切に守りつづけたと思ひ
ます。

朝の集ひにて

緑深き阿蘇の山々眺めつつ友らと迎ふすがすがしき朝

充実していたこの合宿

(北九州大学 法 四年 倉光正明)

この合宿は、四泊五日という修学旅行ほどの日程で、普段
の生活では耳に出来ないような話を聞けたり、これまでの友
人とは一味違う友を持てた点で新鮮さがあり充実していた。
講義内容は自分の知識を超えているものや考えてもみなかつ
たことが多く、班別研修ではそれだけ真剣にならざるを得な
かつた。

二年連続で北九大からの参加者は私だけだったが、北九大
の流れを残すためにも就職を前にして後輩を連れて来なかつ
たことが悔やまれる。

また、全体感想発表を聞いていて、これほど素晴らしい女
性が何故身近にいないのか不思議でならない。そう感じたの

は私だけではなからう。

最後の班別研修

机かこみ皆それぞれに話ゆく口ぶりすこし淋しげなるも

地に足をつけて

(津田学園中学 三林浩行 26歳)

合宿を終へて今、素直な心が大切なのだといふことをつくづく思ふ。

また、これまで私は、地の感触を足に感じながら生きてはこなかったのではないか。加納先生の大地と足が切り離された所に腐敗が始まるといふ言葉が思ひだされる。明治天皇の御製に「国のためうせにしひとを思ふかなくれゆく秋の空をながめて」といふ御歌がある。私はここで、くれゆく秋の空をじっとながめた事もなかった自分に気がつく。

これからさらに私は、一つ一つの言葉を味はひながら生きていきたい。

八木先輩の御講義

緊張で身を震はせてなつかしき先輩(とも)は話を始められるも



カメラ・レポート9

班別研修では、講義のポイントをしっかり確かめつつ、感想や意見を率直に語りあってゆく。

第六班—男子学生—

心が通い合って嬉しい

(防衛大学 理工 一年 半田弘希)

この合宿教室に参加するに当り、何か一つでも学びとるものがあればと思い阿蘇まで来ました。この四泊五日の短い期間を振り返ってみると、多くの先生方のお話を聞き、それぞれの講義について班別で意見を交わすなど充実した五日間でした。何度も胸が熱くなるのを感じました。講師の方々が思いをこめて熱っぽく話して下さったこともありましたし、班別研修の際、班員一人一人が一所懸命に自分の気持ちをみんなに伝えようとしている姿にも感動を覚えました、また夜の集いで肩を組み合い明るく元気に歌っている人達の姿を見て大変嬉しく思いました。会ってから二、三日しかたないのに、みんなの心が通い合った感じがして嬉しかったです。こんなにも心が通い合うのは、それぞれ自分の思っていること感じたことを述べ、聞く側は話し手の気持ちをはかろうとしたことにあると思います。思っていることを本気になって語り合うことの大切さを学びました。ここで体験し学んだことを生かし、今後の生活を充実したものにしていきたいと思いません。

学び舎に集ひ来たりし友みな心の通ひて嬉しく思ふ

先人の熱き思ひを知ることにはわが道の先に光差しけり

自国を見つめ直したい

(拓殖大学 外 一年 成島一之)

八木先生の話で大学の現状を知り、反省し、そして長内先生の話で自国の文化を知ることの大切さを知りました。

灯台もと暗しという訳ではありませんが、自分の国についての知識が軽薄であったことにこのセミナーではっとさせられました。自分は大学で英語学を専攻している次第ですが、アメリカをはじめとする諸外国へ留学する機会がある時に、もし今のままで行ったら、自分の国、日本を語ることもできず恥をかくことになっていたと思います。これからはイギリス文学・アメリカ文学を勉強する前に自国を見つめ直したいと思えます。

はるばると阿蘇の大地に降り立ちて班友と語りふあに忘れめや

友人に積極的に話してゆこう

(明治大学 政経 一年 永井大裕)

来る前はこの合宿に参加するのは怖かったです。こういう合宿に参加するのは、すぐまじめな人ばかりだろうと思っていたからです。今、この怖さはありません。まじめな人はいましたが、それでもごく普通の人と同じ一面があることを(当り前ですが)知ったからです。講義中居眠りしたりとか、夜の集いの時の様子を見ていて……。まあ、いくらまじめな

人でもそういう一面があるということなんでしょうが、これを逆に考えると、いくら遊んでばかりいる(ような)人でも、心のどこかにまじめな部分、真剣に物事を考える部分があるということになるでしょう。そう考えた僕は、これから学校で自分が学んだ事を友人に話し、興味をもってもらいたいと思いました。今まではサークルでやっている内容を話したりする事にいくぶん「てれ」や「恥ずかしさ」を感じていたのですが、今後は積極的に話していけると思っています。素晴らしい合宿に参加し、自分のやっている事は誰にとってもいいことだという事を確信したのですから……。

四泊の短き合宿今日終はる胸には熱き何かを残し

合宿で知りあひし友と居らるるも悲しきことにあとわづかなり

知ることよりも感じたままを素直に表すこと

(福岡大学 経 二年 別府正寛)

今回、台風の為開会式が二日目に移動し、運営の先生方におかれては大変骨が折れたのではと思ふが、皆それぞれ苦労して集まって来たことよってお互ひの心が一層深く結び付いていった様に思へる。

最も心動かされたのは長内先生の仰有った、例へば外国人に日本について何か教へてくれと質問されたときには、自分を見てくれと言ふしかないぢやないかとの言葉でした。国文研の合宿では知ることよりも、心働かせ感じたままを素直に表していくことが求められてゐるが、長内先生の言葉は正に



合宿教室の一日は朝の集ひから始まる。阿蘇の朝の爽やかな空気を胸一杯に吸ってラジオ体操。

それを言ひ尽くしてゐると思ひました。近代と戦後で覆はれてしまつた僕等の心には、どれだけ日本のことを知るかで無く既に染み着いてゐる日本なるものを如何に引き出して表していくかといふ営為の方が必要であると思はずにゐられなかつた。

また、山内先生が国民の祝日の意味をひとつひとつ懇切丁寧に説明されるのを聞き、改めて日本人は昔から両親への感謝、天皇との一体感、自然との結びつき等を生活の中に意味付けてきた民族なのだと感じ、そのことをもつともつと深く感じられるやうになりたいと思つた。

日の本のあまたのいのち染みこめる己が心を磨きゆきなむ

生きた学問の出発点に立てた

(大阪外国語大学 外 三年 福田仁)

講義、討論などを通じて生きた学問といふものを発見し、その出発点に立てたと確信している。

今まで様々な知識は積み重ねてきたが、それらは、大抵断片的なものに過ぎなかつた。私が一生を通してすべき学問とは一体何なのか、果してそれは存在するのか悩んできただけに、ここで生きた学問を発見できたことは嬉しく、非常に勇気づけられた。また、あらゆる学問、思想の根底には純粋な情熱が不可欠であることも痛感した。

阿蘇の地に語らひてあればわが立てる大地の底に熱きものあり

心の姿勢が問われた合宿だった

(金沢大学 工 四年 松岡重憲)

村松先生の講義は多少難しかったのですが、意外にも聞き入っていました。最初の印象ではこの合宿に対して、現在の日本の政治とか国際関係とかを中心に話がされるのかと思つていましたが、班内でもよく話題になったのは、非常にメンタルな部門で、心とか気持ち、精神、はたまた学問に対する態度とかの話が多くされていたのには驚きました。メンタルな部分というのはとかく日常生活では周りの喧騒に打ち消され、目をむけようとはしないものですが、この合宿に参加することによって、そういった物事を考えることの大切さを教へてもらつたような気がします。これは班長さんにも言われたことなのですが、この気持ちも家に帰ってしまったって元の生活へ逆もどりするのではなく、ここで感じた事を普段から心を持っていきたいと思います。

阿蘇の地に多くの若者群れ来り交す言葉に意気を感じぬ

声無き声に耳を澄ませる

(福岡県立春日高校 與島誠央 31歳)

今回学生班の班長をさせて頂き、とても楽しく過ごすことができた。班友の素朴な感想を聞きながら、心あたたまる思ひを幾度した事か。有り難う、松岡、福田、永井、別府、半田、成島。

山内先生が「死者に負かず」と言はれ、「黙々と働く古参兵」の件を話された。合宿中しきりに思はれたのは、声無き声に耳を澄ませるといふ事だった。私の父は出征して命ながらへ七十歳を越える。八月十五日のテレビを一緒に見ながら、私はたまらず、「何を言ふか。こんな報道は戦死された方々に申し訳ない。父ちゃん、これはひどいよ。」と言ふ。父はぼつりと「百八十度変はってしまった。」と言ふ。私は口数の少ない父の胸中を思ふ。先の大戦を批判して言挙げする風潮を、歴史に対する傲慢を払はねばならぬ。

長内先生の御話をお聞きして

ブータンに三十とせ土を耕せる日本人あり今にして知る

外国（とづくに）に身をささげますすらすらをのころざしはもただにかしこし

ふたたびも命うけなばブータンに生（あ）れてしがなと語りますとふ

第七班—男子学生—

自分の意見を言える勇氣

（宮崎産業経営大 経 一年 岩切保憲）

班別研修の時は、自分の意見を言うのに困った。皆は自分の意見をしっかりもち、正確に口に出している様に思えたが自分は心の中で考えていることが、正確に伝わらなかつたと思う。それでも皆が理解しようとしてくれていた事が嬉しか



カメラ・レポート11

「青年体験発表」。タマポリ株式会社員の吉川理夫氏（写真右）は、学生時代の、自分はどうか生きればいいのかといふ問ひから出発して、「歴史上の人物や、職場や友人とのぶつかり合ひから自分の本当の姿も見えてくる」と体験を語った。

福岡県立太宰府高校教諭・黒岩真一氏（写真左）は、授業で歴史上の人物や昭和天皇の御製を取り上げた時の生徒たちとの体験を紹介して、「過去の人々の心に直に触れる授業をやりたい」と語った。

った。

また短歌批評の時、自分の歌を班員皆が真剣に直してくれ
たことが大変嬉しく、一人一人に親しみが湧いた。こんなこ
とは初めての経験だった。講義の中で特に印象に残ったのは
長内先生の講義で、先生の暖かさが感じられ、目頭が熱くな
った。合宿全体で感じたことは、自分の素直な表現力と何よ
りも自分の意見を言える勇氣が必要だと分かった。

様々に学びし事を携へて親しさ湧いた阿蘇の地を去る

日本を知ることから出発する

(熊本商科大学 経 一年 福本信重)

参加する前は、自分の意見は正しいのか、班員とうまくや
っていきけるだろうか不安でした。ところが班別討論の時間等
では自分の意見を皆がしっかり聞いてくれましたし、その意
見が正しいか正しくないかが問題ではなく、自分の素直な気
持ちを述べれば皆も各々率直な考えを述べてくれることが大
切だと気づきました。

さて講義については、長内先生のご講義を最も興味深く聞
かせて頂きました。外国人から日本人はどんな人かとたづね
られたら「私をみて下さい」とおっしゃるようですが、今の
私にはとても言えません。私は、日本という国、日本人、日
本の歴史、祖先をあまりにも知らなさすぎるからです。まず
は日本というものを知ることから、私は出発しなければなり
ません。

更くるまで語り合ひける班友と別る、寂しさ募りくるかな

勉強しました合宿に来たい

(日本大学 文理 一年 田代吉弘)

私は、班別討論などではあまり自分の考えを言わなかった
が、自分からもっと積極的に参加していればもっと自分にと
って素晴らしいものになったのではないかと思う。また、自
分の勉強不足を痛感した。

先生方のご講義の内容をこのままにしたままでは、自分の
ものとならないだろう。今、とにかく勉強したいという気持
ちが湧いてくる。この気持ちを忘れないで、来年以降の合宿
に、友人と参加したい。

和歌嫌ひと語りし友は今我によき歌できたとさし出しにけり

日本を愛するといふこと

(明治大学 政経 二年 岡井佐久磨)

長内先生の言はれた、当たりまへだと思ってる事に感動
する事の大切さ、これは合宿を通して我々一人一人に知らず
知らずに培はれてきた事ではないのか。確かに直接的に感動
を覚えるご講義や体験が幾つもありました。自分を見つめる
機会に恵まれたため、日頃なら何とも思はない様な事に心動
かされ、心が踊り、満たされることがあったのではと思ひま
す。あたりまへの事、物に感動する事と愛する事は表裏一体
であると思へてなりません。

日本を愛する事は、如何に日本に生まれたことに對し喜びを感じる事ができるかといふ事と同じであると思ふのです。そこに先人の人々の思ひや尊い行ひを感じ惚ぶ事ができればなほさらだと思ふのです。

友どちと心尽くして語り合ふ阿蘇の夕への短かりけり

素直に感動する大切さ

(防衛大学校 国際関係 二年 一宮充史)

合宿に参加して、人の生き方や物事に対して素直に感動する大切さを感じました。素直に感動できるからこそ、心のこもった話をする事ができ、愛情や危機感を持って、真剣に祖国や世情を見つめることができると思います。私はまだ頭の中だけで考えている面が多いのですが、この合宿をきっかけに素直な心になれるよう心がけたいと思います。

また、全体意見発表の時、年をとられてもお軍服を大切にされ、一朝有事には命をなげうって戦おうという決意とその純粋な祖国愛に触れたとき、士官候補生としての自分が、日頃どれくらい真剣に純粋な気持ちで行動しているかを反省し、目頭が熱くなりました。

全体意見発表の折り

年老ひし心やさしさ防人の国への思ひに涙こらへぬ



各班毎に食卓を囲む、食事の時間。和やかに語らひながらとる料理に、食も進む。

多くの人に出会えた

(福井工業大学 工三年 吉川 浩)

今回初めて合宿に参加しましたが、楽しく過ごせたと思っております。次回も時間に余裕があればまた参加したいと思っております。勉強不足の為、講義の内容は余り分かりませんでした。夜の集いはもっと長い時間をとって戴ければと思います。次回も参加したいと思っております。

八月の熱き一時熊本で友と語りふ短すぎるや

日本の歴史、文化の大切さ

(法政大学 経四年 明珍儀隆)

合宿には、様々な考えを持った同じ学生との理解を図ろうと思いましたが、感じたことは、どんな人でも必ず良い面はある。容姿で判断せず、その良い面を理解することこそ、その人にふみ入るきっかけとなるのではないかということです。そして心から語り合える友人となっていくことができれば、これほど良いことはありません。四日間という短い間ではありますが、班員全員との意思の疎通をはかることができましたと思っております。特に一人一人の短歌に対して全員で批評したことは良かったと思います。今まで忘れていた日本の歴史、文化の大切さを実感させられました。高校までの歴史や古文の授業では得られなかった充実感を得ることができたことは、貴重な経験となりました。

合宿を終はりし友らは散りてゆき心に寂しさ浮かび来るなり

日本の歴史の中に自分がある

(タマホリ(柳) 吉川理夫 32歳)

遠き祖先より、私の生きる現在まで、日本の歴史の中に自分があることを考へさせられた合宿でした。平和であることに何かものたりないものを感じる。それは祖先の多くの先輩には経験しえなかった時代に自分がゐるのである。現在を生きる自分自身に与へられた、また乗り越えなければならない試練である。

ひと班に集ひ学びし合宿も別れ惜しみつ今日で終りぬ

第八班—男子学生—

自分を飾らず素直な気持ちを持ちたい

(九州大学 法一年 石橋功次)

最初は遠慮から自分から進んで意見を言うことが出来なかったけれど、普通の大学生のように表面的な話を語るだけでなく、真面目な話を真剣に語り合うからこそ、四泊五日の短い間でも心を開いて語れる友になれたのだと思います。一方、講義を聞きたびに自分の勉強不足を感じた。また、講義のなかでも、当たり前なことを当たり前ととらえ感激することを失っていることを本当に感じ、自分を飾らず素直な気持ち

ちを持てるようになりたいと思いました。

最後に、村松剛先生が「自分の話を聞いてもらえる人がいるのならどんなことをしても行きたい」と言われた様に、たくさんの情熱を持った先生に囲まれた本当に充実した合宿教室であったと思います。

長かると思ひて来たる合宿も終はりてみれば短く思はん

和歌の世界にひたることができた

(防衛大学校 理工 一年 園田和久)

この合宿では、和歌を非常に重要視していたが、理系の私にとっては、短歌をよみとるといった事とは無縁であった。

というのも助詞、助動詞、縁語、掛詞など一文字一文字に目がゆき、大切な「心をよみとる」ことをわすれていたからである。しかし班友達と和歌一首一首を二、三十分かけてじっくり、未知な和歌への世界にひたることができ非常に感激した。さらに、他大学生との交流ができたこともこの合宿に参加してよかったことである。特に、草千里での九十分は班友達と楽しい一時を過ごすことができた。この五日間の講義で一番印象に残ったのは長内俊平先生の「日本人とはどんな人物かと説明を求められた時、恥ずかしながらこの私をご覧下さい」の言葉に本当に感動させられた。さらにご講義を下さる先生方のお一人お一人の御熱意がひしひしと感ぜられ我々のために本当に必死になって教えていただいたことは心のページにしまってゆきたい。

カメラ・レポート13



二日目夜の「古典講義」。東急建設(株)課長・奥富修一氏は吉田松陰の文章を辿りつつ、そこに浮かび上がってくる松下村塾での松陰と弟子たちの学問交流についてを語られた。

師の君の講話に聞き入る大学生感極まりて涙流せり

班友と知り合えてうれしかった

(拓殖大学 外 一年 宇栄原 滋)

この合宿教室ではいろいろな事について考えさせられました。今まで自分の中にあつた「日本」、「天皇」、「大東亜戦争」、「心」などについての考えが揺らいでいます。自分の思っていた別の視点から見ると、自分がそれらの事について知らなかった部分が多かつたという事に気づきました。一方、たつた四泊五日の合宿でめぐり合えた班友たちと知り合えてとても嬉しかったです。初め班友たちに会つた時、こんな人たちと話せないと思つていましたけれど、心配はいりませんでした。また合宿での短歌創作には苦勞しましたが、自分自身で歌が作れたのには感激しました。

合宿の終はりに近き時なれば過こせし班友と別れがたしも

真剣に考えた

(富山大学 経 二年 加治丈彦)

自分は今まで日本のことについて、真剣に考えたことがなかつたのでご講義や班別研修ではややついていけない所があり、自分の無学さ無知さが恥ずかしく思えた。又それと同時に、その無学さ無知さを講義や班別研修を通して少しでも埋めることができたのは嬉しく思われた。

合宿の緊張ほぐる、一時よ「夜の集ひ」の楽しや楽しや

一生懸命に事にあたれば人はわかつてくれる

(海上保安大学校 二年 吉田淳一)

ああ、やはり大変な所にきてしまった、というのが第一の印象でした。しかし輪読の中での黒岩真一先生や長内俊平先生の「君ね、この会は人と意見を闘わすものではなく、自分自身を見つめるものなんだよ。人にどうあるべきなんて押しつけるものではないんだ」という言葉を聞いて「この会はこういうものなんだ」と安心しました。自分は海上保安大学校初の参加者でしたが、自分を見つめなおすために人と討論するという事に新鮮さを感じました。

最後に、この合宿では一生懸命に事にあたれば、人はわかつてくれるという事を感じました。今まで打ちとけるのに時間がかかる自分でしたがこれからは自信を持って初対面の人と接する事ができそうです。

言の葉につまりて友の顔みれば相分かる思ひ瞳感ずるも

心豊かに生きたい

(亜細亜大学 経 四年 佐々木栄幸)

合宿に参加してきた人々と話し合う中で、もっと生活を楽しんでほうがいいと感じた。楽しむためには、心が豊かにならなくてはならないと思う。御講義の中で「心を養うには『詩心』と『英雄』について学びなさい」というのがあった。心を豊かにするとは、さらに、感動するという心の働きを大

切にしたい。また、感動は素直に感じる心より出来るのだと思う。日々の生活の中では、どうしても理屈で考える事が多いように思われる。

また日々の生活が始まるが、合宿中に感じたことを大切に
してゆきたい。

友達と様々な事話せしも尽くせぬ思ひいまだ語れず

阿蘇の地で風邪にかかりて一人寝るされどうれしき夜中の看護

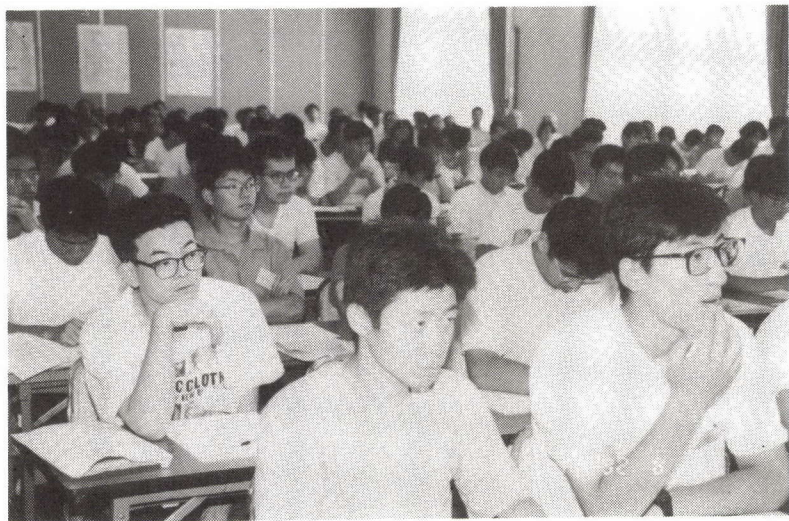
合宿で何もかも得られた訳でない

(日本油脂株) 上村栄章 34歳

台風の中、遠路、合宿教室の地、阿蘇に集ひし班友は学生生活に満たされぬ思ひがあった。しかし、わづか四泊五日間に友の姿が刻まれる程であったのは、友を得た思ひと友の中に何かを得たといふ姿によるものであった。合宿教室を終はりて講師の一言一言に友の言葉に触れゆく中に自づと心が統一されてゆくものがあり、心が満つる思ひであった。しかし、何もかも得られた訳ではない。小柳陽太郎先生が語られた「合宿が終はった後に本当の合宿は始まる」の如く実生活の裡にためしてみて、初めて得られるものが多いと思ふ。最後に班員の皆に一緒に学ばせて戴き有り難く思ふ。

なかなか別れがたかる友々を見送ることの寂しかりける

カメラ・レポート14



御講義を聞く学生の真剣なまなざし。

第九班—男子学生—

自分にとっての大きな進歩

(宮崎産業経営大学 経営 一年 矢田研人)

不安な気持ち一杯のまま参加した自分でしたが、講義、班別研修等が続けていく内に不安や緊張もなくなり、自分の言いたいことが言えるようになりました。この事は今まで緊張すると何も言えなくなっていた自分にとって大きな進歩でありました。そして班別研修の中で自分の解釈や思い込みを皆に真剣に訂正して貰ったことが本当に有り難く思えました。初日の班別研修の時、長内先生に誤りを指摘して戴いたことを初め、講義の聞き漏らしや間違った解釈、或いはおかしな思い込みなどを皆に次々と訂正して貰った事は、これからの僕の人生に大きなプラスになったと思います。わずか四泊五日でしたが、この合宿は本当に意義深い、良い体験でした。

五日間の合宿を共に過ごしたる班友に言ひたしありがたうと

自分は明らかに変わった

(九州国際大学 法経 二年 佐藤公治)

僕がこの合宿に参加したのは雑誌広告を見てである。真剣に楽しく語らえる友をつくらうというスローガンにひかれて参加した。最初は台風の影響もあって少々疲れ気味であった

が、八木先生の講義が自分にとって大変身近なものであり、それ以後の日程に意欲的に取り組む姿勢を与えてくれた様な気がした。

村松先生の講義では正に国際情勢を精通している方だと思つた。開会式で印象に残つたのは君が代斉唱であり、心にじんとくる重みのある歌声が素晴らしく感じられた。平川先生の講義では有名な先生に質問する事ができ、しかも「同じ考えを持っております」と言われた事が大変嬉しかった。また初めて短歌を作った事も印象に残る。皆から受けた批評は納得のいくものだった。班別研修では不十分ではあるが言わんとする事は述べた様に思う。と同時に人の話に真剣に耳を傾ける事の大切さを知った。班長が「佐藤君は大きく変わったと思うんだ」と言われたとき、自分自身でも「自分は明らかに変わった」と実感した。

合宿最終日

よみがへる班の皆とのふれあひを切に思ひてこれから学ばん

ありのまゝに我が思いを語っていききたい

(佐賀大学 教 二年 大葉勢清英)

初日の長内先生の言われた「自分自身を本当に知っている人など誰もいない。意識せずに現れた何気ない言葉や行動が人の心を打つものなのだ」という言葉がずっと心に残っています。私はこれまでもっと勉強し知識を得たい、もっと論理立てて堂々と意見を言えるようにならねばとあくせくしてき

た様に思います。そしていつのまにかありのままの自分を押し殺してしまい、自然に他人と接することが出来ずにいました。そんな自分に歯がゆさを感じていた時に右の言葉を聞いて、優しく労って頂いた様な気がしました。何も力まずとも人が感動してくれる自分自身は既にある、そう思った時、もっと学びたい、多くの人と語っていききたいと感じました。雄弁でもなく、ありのままに生き生きと我が思いを語られる長内先生の姿に感動し、涙した事はなによりの宝です。これからも感動する心を大切に暖めていきたいと思えます。

長内先生に御講義を聞きて

師の君の言の葉聞けば自づから幼き頃を思ひ出づるも

すずやかな心をもちて学びてそ学びの道は生かされにけり

全体感想発表にて

なめらかに言へずもよしや思ふまゝ思ふまゝ語れ飾る事なく

心を開き真剣に聞く事を教えられた

(明治大学 法 二年 加藤敦章)

一番心に残ったご講義は長内先生のご講義だった。殆どメモもとらず、ひきつけられる様にただ先生の目をじっと見て話に聞き入っていた。そこには、自分に或いは現代の日本人に欠けている何かが存在したと思う。メモにとった言葉をつなぎ合わせて、先生はこういう事を言われたと「解釈」するのは簡単である。しかしそれでは本質を知る事にはならないと思う。自分の拙い言葉に先生のお話を置き換えてしまうの

カメラ・レポート15



三日目の午前、「『ピルマの堅琴』再考」と題する、福岡女学院大学教授・平川祐弘先生による御講義がなされた。先生は「世界に通用する物の見方を養ふためには、あらゆる面から物事を見つめる態度が必要」と御指摘になった。

はもったいないという気がした。私は今までこのような話を聞いたことがなかった。或いは聞こうとしなかったのかもしれない。この合宿は、私に心を開いて真剣に聞くということを教えてくれたと思う。

国が為命さぐと宣ひし老翁の言葉尊かりけり

感動する心を取り戻せた

(福井工業大学 工 二年 大久保貴光)

最も印象深いのは長内先生のご講義です。先生は私たちに感動することのすばらしさを教えて下さいました。先生が涙された時、自分の中の感動する心が薄れてきている様な気がしてなりませんでした。しかし講話が進むにつれ、それを取り戻す事ができた気がしてとても感謝しております。

また村松先生のご講義にはとても驚かされました。資料も何も見ずにあの様に詳しくお話されたからです。私も少しでも良いから先生のようになれたらと思います。

最後に、この合宿で普段したことのない討論、輪読等貴重な経験をさせて戴き大変嬉しく思います。そしてこの合宿に参加された全ての方々に厚く御礼申し上げます。どうも有り難うございました。

何事の起くるやも知れぬと痛感す国際情勢の激動を聞きて

自分の歌が詠めたことは大きな喜び

(東北大学 理 三年 古閑信彦)

この合宿では様々な事を学ばせて戴きました。講義の中には難しくよく分からないものもありましたが、村松先生のご講義などは、その緻密な論理構成は勿論、それを越えて先生の平和への願いが伝わってくる様で、非常に深い感銘を受けました。

また自分の歌が詠めたことは、僕にとって大きな喜びでした。以前から興味があり様々な歌人の歌に親しんできたものの、自分で作る事は最初から諦めていた様なところがありました。でも実際に作ってみると稚拙ながらも何とか形になりました。短歌というものが非常に身近な所にある様な気がしました。それと同時に、なにか古人の姿、形が甦ってくる様な自分のふるさとに帰った様な、そんな気持ちがありました。数々の貴重な体験をさせて下さったこの合宿に心から感謝します。

湧き出づる熱き思ひを語る師のまなざし見れば心うたれり

学んだことが自分自身の財産となる

(防衛大学校 理工 四年 濱口和久)

三回目の合宿参加となりますが、来るたびに自分の勉強不足が思われ、知らない事が多過ぎて自分自身が恥ずかしくなります。この合宿は学ぶ喜び、感動する喜びを私に教えて下さいました。毎年夏になるとこの合宿に行かねばという気持ち

ちになるのは、暖かく私たちを迎えて下さる諸先輩、先生方に会いたい、また本当の学問を学びたいという思いがあるからだと思います。この合宿で学んだことが、どれだけ消化不良を起こさずに自分の中に生きているかは分かりませんが、必ず心の奥底に残り、自分自身の財産となってこれからの人生でのバックボーンとなってくれると思います。大学生活最後の夏の貴重な思い出となりました。今後できる限り、この素晴らしい合宿を後輩達に紹介してゆきたいと思います。

長内先生の御講義を聞きて

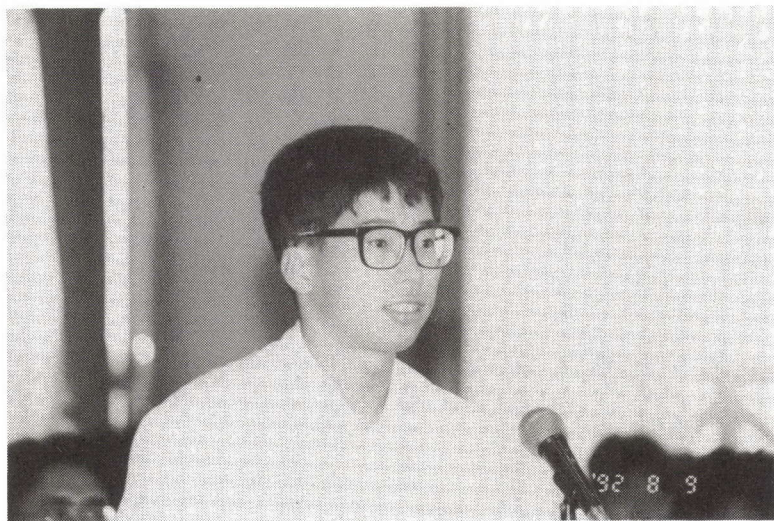
繰り返し情熱持ちて語りたる師のみ姿に涙流しぬ

若き友等の自ら求むる心に驚く

(日産自動車㈱ 奈良崎修二 37歳)

十年振りの全日程参加で、班長を勤めさせて頂いたが、心の中の「深い泉」を甦らせて頂いた様な何とも言ひ様のない気持ちで一杯である。特に十歳以上も年若い七名の班友が、一つ一つのご講義や班別研修に、私以上に真剣に取り組んでくれた事に本当に感謝したい。みな各々に問題の理解の深淺はあるものゝ、心の奥底から何かを求める純粋な思ひと、少しづつではあるが集中して物事にふれ味はってゆく、若く瑞々しい情感に、幾度とならず驚かされた。初めて参加された友も今後の学びの端緒となり糧となるものをしつかりと掴まれたと思ふ。私自身、若き友等に恥ぢぬ様、共に学びの道を進みゆき、再会を期したいと思ふ。

カメラ・レポート 16



真剣なまなざしで平川先生に質問する学生。

このようにとても価値ある日々を送れたのも講義、講話をして下った先生方、班員の皆さん、その他の方々のおかげであつたと思います。有り難うございました。

阿蘇の地に集ひて学びし己々に纏みしものを抱きて帰らむ

来年も多くの友を誘つて参加したい

(早稲田大学 社会科学 二年 高橋秀和)

この五日間に、班友とお互ひ心を聞き合つて思つたままの言葉をぶつけ合ふことが出来、大変な喜びがありました。これからもずっと共に学んで行きたい思ひで一杯です。又、この合宿が多くの人達の切なる思ひによつて支へられてゐるのだといふことを実感させて頂きました。そしてそれを本当に有り難いと感じられることは、私にとって新鮮であり、とても嬉しく思ひました。長内先生のご講話の中の「民謡一つ歌へなくて何で日本文化が分かつたと言へるのか」とのお言葉に、自分は観念的な物の見方をしたと気づき、恥づかしく思ふと同時に、かういふことを親身になつて言つて下さる方がいらつしやるのは有り難いことであると思ひました。

来年もきつと参加したい、それも多くの友を誘つて参加したいと思ひます。

班友との五日間を振り返って

お互ひに心開きて言の葉を思ひのままにぶつけ合ひけり

言の葉を思ひのままにぶつけ合ひわかりありたるこの喜びよ



ロビーで歓談される平川先生。

本音で語り合い友を得た

(金沢大学 教 三年 山口有一)

参加の目的が勉強よりも、いろんな人に会って分り合うという事だったので、一人でも分り合える友に出会えればと思つて過ごして来ました。そして、最終の日になると「遊びに来いや」と言う声を聞け、まだ分り合えてはいないけれど、分り合おうと思つている人にも会うことができ大変よかったです。また本音で語れば相手もその気持ちを汲み取ってくれる。そんな人が多かったのも印象的でした。自分はそういった大切な部分に気付かず、失敗してみても初めて分りました。多々学ぶことのあった合宿でありました。

我が殻をぬきざり友と語らへば自づと出づる「遊びに来いや」と

心を鍛えていきたい

(大正大学 文 四年 堀岡秀清)

私は大学で哲学を専攻しており、その故か理性や概念的思考を重んじる傾向があります。この合宿に参加した現在も、それには変わりはないのですが、少し「心」の大切さを感じられるようになりました。ですから、この芽生えた「心」を養い育て、ゆこうと思ひます。そして、それには短歌を詠むことが役立つということもわかりかけています。私は、これを機会に短歌を好きになれそうです。そして「心」を鍛えてゆけば、それがまた哲学を学んでゆく上での糧ともなるような

気がします。終わりに御多忙のところ、御講義において下さった講師の方々、また班長、班付きの方々、楽しくこの日々を共に過ごした班友の皆様、この合宿に御尽力下さった方々に御礼を申し上げます。有り難うございました。

荷づくりし楽しき家路思へども友と別るゝさびしき残りぬ

くにのいのちを絶やしてならぬ

(福岡県立太宰府高校 黒岩真一 38歳)

久しぶりの合宿参加の為か、或いは、自らの昨今の心境の変化の故か、今回の合宿では目を洗はるゝ様な思ひを幾度も味はひました。村松先生、山内先生の御講義、長内先生のご講話が特にさうでした。それにしても、現在の日本人の日常生活が如何に先人の思ひを断ち切つた所に営まれてゐるか、如何に国際社会の常識から隔てられた所にあるかを痛感せずにはゐられませんでした。私は、一田舎教師に過ぎませんが己の地で勝負するしか術がない以上、接する子供達に私の感ずる所を精一杯に伝えてゆくほかありません。己の身に課される責任を思ふとき、これからの半生に於いて日々己の心を磨いてゆく修業の大切さを改めて思ひました。有り難うございました。

長内先生の御講話を聴きて

ものにあひ本質見抜く慧眼をば失ひたるが禍のもとなり

我が国の栄ゆも滅ぶも慧眼もつ若者現はる多寡にあるてふ乳呑み児の母に抱かる心地こそ慧眼を養うもとゐなりてふ

幼き日逢ふうごとく感じつゝ泣きみ笑ひみ過ごせし思ひぬ
幼子のすなほな心を失はずものいのちを感じて生きたし

第十一班 | 男子学生 |

歴史に学んだことを生活に生かしたい

(福岡大学 法 一年 牧 拓実)

大学のサークルで歴史を学んでいるが、何か理解できぬものがあつた。しかしこの合宿で、歴史を学ぶとは過去の事実だけを挙げ、この戦争は正しかったとか、こうすれば勝てたといった評論家の様にとらえ方をするのではなく、先人の言葉、思いに触れていく中で、現在の自分のあり方を考えていくことではないかと気付いたのである。重要なことは、学んだことを自分の今後の生活にいかにか生かしていくのか、どの様に実践していくのか、ここまで考えなければ月日と共にすぐに忘れてしまうだろう。今回は不安の中での参加だったが来年は紹介者としてここで得た感動を語れるように、今後はまた少しづつ勉強していきたいと思う。

阿蘇のもと集ひし友と研鑽し我が志ひきしまる心地す

感動を涙ながらに語る友は国の行く末思ひたるらむ

カメラ・レポート 18



三日目の午後、短歌創作の前の「短歌創作導入講義」において、短歌創作の意義、作り方の基本などを具体例を挙げながら分かりやすく話される、福岡県立須恵高校教諭・那須三元氏。

全体感想発表が涙が出てくるほどよかった

(福井工業大学 工 一年 赤井寛章)

この合宿に来たきっかけは中田さんの紹介で、空手道部から二名選んでほしいと言われて来ることになった訳です。先生の講義、班別研修の時、自分自身ここにいるのは場違いだと思えました。しかし日が過ぎ行くにつれ、合宿教室の雰囲気慣れてきました。そして沢山の人と話し、友達になることができました。講義では長内先生の話が一番心に残りました。他に心に残ったのは全体感想自由発表が、涙が出てくるほどよかったです。合宿教室の日程が終わった今、自分自身得たものはとても大きいと思えました。そして合宿教室がいやだと思っていた自分が恥ずかしく思われてきました。また来年もこの合宿教室に参加しようと思っています。

仲間らは別れを迎えて笑顔なれど心の中は雨ふりたるらむ

こんなにも日本のことを思う人たちがいた

(西南学院大学 法 二年 吉蘭淳一)

今回初めて合宿教室に参加し、最初は少々不安でした。しかし班別研修でお互いに語り合っていく間にこの合宿にうちとけていき、日頃は話せない硬い話も夜遅くまで話せるようになりました。そして講師の方々の話も、講師の方が熱心に話されたので、こちらもその熱意に引きこまれていくように感じました。書物などで読むよりもずっと心の中に残った気

がします。また、ここに来て最も驚いたのは、自分と同じ年代に、こんなにも日本のことを考え、日本のことを思う人がいることです。このようなことを考えているのは自分だけではないということが分かって嬉しかったです。最後に、今回この合宿に参加して、意義深い日々を送れたことを嬉しく思います。

合宿に一人初めて参加して不安と期待入り交りけり

師や友と夜遅くまで議論して時のたつのも忘るゝ心地す

国思ふあまたの若人集ひたるこのこと知りて嬉しかりけり

周囲の感動を呼ぶものに気付いてゐなかった

(九州大学 法 二年 笹川明道)

素直に感動することのよさ、その感動を短歌といふ形で卒直な言葉に表すことの楽しさを知ることができました。私は日常生活でなんとも言へない不満や不安感に襲はれてゐましたが、これは周りに感動を呼ぶものがいくらでもあるのに、それに気付いてゐなかつた為だと思ひ知らされました。繊細な感じる心こそが日本人の受け継いできた最も大切なものだと知識としては知ってゐましたが、今回のこの合宿ではその思ひを一層強めることができました。私の大学には日本の伝統文化や天皇陛下を軽んじたり否定する人もをり、私の考へはしばしば攻撃や冷笑を受けてきました。しかし私はこれからも私の信念を貫き、日本の文化や心を守るために実践していきたいと思ひます、五日間有り難うございました。

さはがしくせみの鳴く中かすかにぞ秋の虫なるこゑの聞こゆる

人のためにつくすまごころを忘れていた

(亜細亜大学 経 三年 濱田雄一)

私は準備合宿から参加しましたが、その時思ったのが、表から見えない所で先生、先輩方が自分のためにつくしてきて下さったのだということでした。長内先生の御講義を聞いて、今まで自分は何を目的にして活動してきたのだろう、先輩方のご好意を無にしてきたのではなからうかと思いました。人のためにつくすということとは、自分をよく見せたいというようなことではなく、その人に対してまごころを持っているかどうかにかかっているのだという、ごく当たり前のことを忘れていたような気がします。これほど涙をこらえきれぬ感動を私に与えて下さった長内先生、並びに諸先生、先輩方に感謝申し上げます。本当にどうもありがとうございます。

長内先生の御講義をお聴きして

師の君の故郷の民謡歌はる師の御心のつたはりてくる

おむすびの内にこもりたるまごころは科学によりては量りえぬとふ

我もまた日本のことを聞かれなば我こそ日本と答へむとおもひぬ

学生生活で出会えない感動が得られた

(金沢経済大学 経 四年 高嶋 晃)

今回で二回目の参加ですが、なぜ又来たのか分かりません

カメラ・レポート19



短歌を兼ねてのレクリエーション。草千里でのスナップショット。

でした。合宿の内容も二回目でそれ程抵抗もないだろうし、旅行気分だったのです。でも今日、それだけではないことが分かりました。この合宿では私はすぐ素直なのです。すぐ感動してしまいます。よいものはよいと素直に感じとれるのです。ですから私の心も素直になれるのだと思います。普段の学生生活ではなかなか出会えない感動が得られるから今回も参加したのだと分かりました。最後の学生生活の年に私に感動を与えられた七名の皆さん、今回も誘ってくれた中田さんに感謝しています。

全体感想自由発表にて感じたこと

体よりわき出る言葉は生き生きと聞きし者らの胸熱くする

若者ら胸にわきくる感動を聞いてほしいと勇気出しける

中国の世界戦略に危惧を抱く

(大阪府立交野高校 絹田洋一 37歳)

今回楽しみにしてゐた村松剛先生のお話は、やはり示唆に富む興味深いものであった。東西冷戦の終結によりソ連の脅威は後退した。北朝鮮の核の問題はあるにしても、多くの日本人と同様、私も安堵感を覚えてゐると思ふ。しかし中国のパキスタン、イラン等への核技術供与は、過激派諸国との連合戦線を作り、自由世界に対抗しようといふ戦略に基づくといはれるのである。二大国のくびきが消失して「自由に」戦争や民族紛争を起こしはじめた国々に核兵器を伸ばさうとしてゐる中国が、旧ソ連より安全とは到底思へない。合宿中に

天皇御訪中が決定した。かつて全体主義国家と提携した事が日本にもたらした運命を考へる時、危惧の念を抱かざるをえない。

第十二班 男子学生一

国のいのちに連なりて生かされている

(九州大学 文 一年 別府秀俊)

初めてこの合宿に参加させて戴きまして大変感銘を受けることが多々ありました。

山内先生の憲法に関するお話を聴き、観念で物事を見るのではなく、そのものの真実の姿を見、思考していかねばならぬことを感じましたし、柳田國男や吉田松陰の言葉の中に、この国に現在いる我々だけが生きているのではなく、祖先の方々を通して我々や子孫が国のいのちに連なりて生かされているのだなあと思いました。それ故、先人の方々の行き様にひたすらに迫っていこうと思います。

又、短歌相互批評で、自らの感動をそのままのことに表現することの難しさを感じました。

夜の更けて眠気さすともまどゝあして友のみ歌に心くたくも
ひとときの心動くをとこしへに残しゆるけるはしきしまの道

「心」の大切さを切に感じた

(日本大学 国際関係 二年 沖田 光)

合宿最終日を迎えるにしたがって自分の得たものの大きさに気付かされた。特に、日本伝統を大切にし、過去について見つめ直すということだった。開会式の時の「戦時平時を問わず」という言葉や、慰霊祭において日本を築きあげられてこられた祖先の霊を慰める行為、その他いろいろ日本の素晴らしい伝統を守り伝えていこうとする合宿参加者全員、国文研の方々の姿勢に今までにない新鮮な気持ちに包まれた。そして、これから自分が誇りとすべきものが分かり、やっていかねばならないことが分かってきたように思える。又、班友との語り合いや御講義から「心」の大切さを切に感じた。ここで得たものを合宿後の生活に生かし、ここで決意したことをやりとげるよう努力していきたいと思う。

ふりむけば千里ヶ浜の草の辺に見るとはなしに我を見る牛

日本の将来を真剣に考へていきたい

(亜細亜大学 法 二年 松田裕幸)

講義での「日本の危機感を自覚して欲しい」といふ先生のお言葉や班別討論などで国のことについて議論してみても、自分もつと日本のことを考へなければならぬと感じた。これから日本人として国に対してどのやうに接していくか、更に、日本の将来について真剣に考へていきたい。



観光バスの中でのひとこま。皆で歌をうたって阿蘇登山。

また、班員の方々から「君の言ってることが心に響いてこない」と言はれ、自分を変に飾らうとして素直にもが言へないことに気づき、大変恥づかしく思はれた。更に、自分がまだまだ勉強不足であるといふことも実感できた。勉強に対して自分自身ひどく自負するところがあった。「初心忘るべからず」といふ言葉を忘れずに、一生懸命勉強していきなさいと思ふ。

すなほなる心もちて語らるゝ友の言の葉うるはしきかな
我もまたすなほなりたる言の葉を心つくして友に伝へん

“ありのままに見つめる”心

(東京大学 理 三年 村上純一)

合宿二日目迄は自分の思いつきを主張して満足していた。三日目班員から「それが君の本当に考えていることなの？」と聞かれ、答えに窮してしまった。本当の自分の気持ちがあるのか思慮していなかった。本当に“学ぶ”“わかる”“考える”という姿勢を体得するのは大変なことだと思ふが、この問題を心にとめて折りにふれて考えていきたい。そして、他人の意見に自分の意見のような真剣さをもって聞くようになりたい。合宿で学んだ事は、“言葉の説明を排して物事”をありのままに見つめる“心の必要性”についてである。

最終日は、言葉に出すと自分の心をつわりそうな怖さがあり、班別懇談で一言も発言できなかった。本当に人間的に成長していきなさい。国文研の方々がとうございました。

我が心つかみたりしと思へれどまだ飾れるを気づかされたり
五日間の熱き集ひの終はりきて阿蘇の暑さは和らぎてゆく
言の葉に出だせば心いつはらんと恐れ惑ひて黙しをりたり

できるかぎり参加し続けていきたい合宿だ

(防衛大学校 管理 四年 森安宏徳)

今回は昨年につき二回目の参加であるが、何度来ても感動や得るものが大きい合宿であると思う。

素直になること、ありのままに受け入れること、国を愛することなど大切なことを改めて気づかされた五日間だった。又、人と真剣に討論し、感じたことを伝え合うといったことは普段の生活ではめったに経験できない貴重なものだった。又、昨年の合宿で知り合った友と一年ぶりに再会して無事を喜び合ったり、今年会った新たな友らと再会を約束し合う事は、“また楽しからずや”の情景そのままではなからうか。来年は社会人となるが、できるかぎり参加し続けていきたい。そう思わせる合宿である。

ふきあぐる白きけぶりもをしけり阿蘇の五山の峰ながむれば
ますぐにぞ立ちのぼりゆく大阿蘇の白きけぶりは空に向かひて

「日本人としての私」を見いだし得た

(鹿児島大学 農 六年 原 一文)

今年は大學生生活最後の年であり、来年より社会に出る者として、今一度自分をしっかりと見つめ直したく参加させて戴き

ました。四年前、初めて参加し導かれましたが、この学問の道を来年よりのやうに展開してゆけばよいのかといふ疑問を抱きての参加でありました。

そのやうな中で、先生方の御講義が非常に新鮮に感じられ私の中に入ってきました。いつしか見失つてゐた「日本人としての私」を再び見いだし得たやうな気がしました。本当に心が洗はれるやうな気が致しました。

明日からの普段の生活の中で、長内先生の言はれた「最も当たり前のことに感動する」心を失はないやうに心を鍛へてゆきたいと思つてをります。本当に有り難うございました。

長内先生の御講義をききて

吾泣けり「心のふるさと」思はへば父母浮かびて涙あふれき
せきあぐる涙こらへて眼閉づれどあふる、涙頬をつたへり

私達は同信の友であり同学の友だ

(日産自動車㈱ 内海勝彦 38歳)

約十年ぶりの合宿参加であつたが、昔と変はらぬ感動を今回も得ることができた。まさに、「嘉言林の如く、躍々として人に迫る」の吉田松陰の言葉さながらに、合宿中に続々と登場し、紹介される素晴らしい文章、お話に接し、心が洗はれる思ひがした。有り難い気持ちで一杯だ。

又、今回は、社会人だつたが学生班の班長を仰せつかり、当初不安もあつた。しかし、一生懸命に、自分の心を見つめ御講義や文章に迫つていかうとする班員の姿に心うたれた。



白煙を背に友と語らふ友らの顔、顔。

自分の勉強不足を知り決意を述べる者。日本の文化にふれた喜びを語る者。その事はそのまゝ私にとつても、課題であり喜びなのだ。道を求めるのに年の差はない。私達は全て、同信の友であり、同学の友である。それを実感できて嬉しかった。

最後の班別懇談の折

己が身の足らはぬ空気づきしとふ友の言葉のありがたきかな
我が感動言葉にできぬと黙しをる友の姿のたふとかりけり
かくまでも思ひをりしか友どちの姿し見れば涙ながるゝ
この集ひかりそめならず今日よりは己が学びに励まなん友ら

第十三班——男子学生——

合宿に参加できる幸せ

(奈良県立商科大学 商 一年 岩瀬幸広)

台風のため途中で長時間止まった列車の中で、私は熊本に帰郷する方と話しました。その方は最近の景気後退の影響のため解雇され、やむをえず実家に帰り、また新しい職をさがすのだと言っていました。私は合宿の間、彼が今どうしておられるのだろうかと考えると共に、この合宿に参加できるほど恵まれた私は何と幸せかと思いました。

今回の合宿のテーマの中に、将来の日本を考える、というのがありましたが、私は今回の合宿で聞き、理解し、考えた

多くのことを土台とし、熊本への車中で知り合った彼のためにも、より深くこのテーマについて考えたいと強く感じました。

演壇の上に立ちたる学生の涙を見つゝ心震えぬ

生きることと死ぬこと

(防衛大学校 理工 一年 中村隆洋)

沢山の講義を聞き、「人間の価値」とか「どうして自分は生きていくのか」ということについて深く考えさせられました。また、生きることばかりでなく、「死ぬ」ということについても考えさせられました。私は、いつ死んでもいいと思っていたのですが、「心の糧」とか「精神」「感動」ということを聞いて、簡単には死ねないなあと思いました。

草原にあふむけになり見あぐれば空にとけこむ思ひするなり

自分を見つめ直した

(福岡大学 人文 一年 岡田 聡)

この合宿で、自分は自分についてより深く知ることができたと思います。一番ショックを受けたのが、自分には物に感ずる心というものが希薄であるということです。短歌創作の時、如何に自分が対象を覚めた目で見ているかが歌に表れたのです。また、長内先生の講義の後、班の人たちは皆そのお説に感動した旨を述べるのに、自分だけ先生のおっしゃったことを単に繰り返すだけなのです。自分の思う所を素直に表

現できない。そういったことを厳しく追求されると、自分は胸が張り裂けるような重苦しい、悲しい気持ちになりました。

自分を見つめ直すことに成功したと言えなくはないと思いますが、今後どうすべきなのか、まだ分かりません。

ひとりして行きゆく道の悲しさを胸に秘めつゝ、△宿を去る

もっと勉強したい

(東和大学 経営工 二年 善本隆之)

高校の時の担任の先生の紹介で参加したのですが、違う世界にきたという感じでした。

私は気軽な会話しか普段していないので、いざ自分の考えとなると何もいえませんでした。

大学生活も何か物足りなくなってきたので、とてもよい体験ができました。と同時に本をもっと読んで勉強しなければという思いがわきました。

今まではばかなことをやって人の人気を得るといった感じだったので、これからは物を浅く見るといふのをやめて、本質を見抜く訓練をしてゆきたいと思います。

歌をよむこと難しく様々の言葉をもっと知りたいと思ふ

学ぶことの目的

(早稲田大学 政経 二年 田中裕一)

初日、台風十号の影響で五十名しか来られなかった時、急

カメラ・レポート 22



草千里の草原にあそぶ。

遽、昨年度の小野吉宣先生の体験談の輪読に切り替わった。文中に聖徳太子の御言葉「一人出家すれば魔宮皆動ず」「若し自他の二境を存して修業せば、即ち修する所廣からずして物とその苦樂を同じうすること能はず」が載せられていたが、長内先生の心あふれる解説とあいまって学ぶことの目的が知を求めることではなく、実生活の中で如何に己が心を高め、豊かにしていくかにあるということを感じた。以後私は、衆に抜き出するよりは、まっとうな天下に恥じぬ国民となることを心がけた。

いかに多く物をするともあだならむあはれを感じる心なくんば

素直な自分にもどった

(海上保安大学校 二年 岩永 洋)

今まで友達との会話といえ、うすっぺらいミーハーの様な話ばかりでした。その理由は多分国際情勢の話などを真剣にすると思いの違いが出てきて、その人との仲が悪くなるのを恐れているということでしょう。これでは本当の友情だとは思えません。私も幼い頃はもつと素直に自分の考えを口に出していたと思います。この合宿では、できるだけ自分の考えを口に出すように心がけて五日間班の人たちと過ごしてきました。おかげで班の人たちとはすぐうちとけあうことができましたし、心がたいへん充実していました。さらに自分自身、すこしだけ昔の素直な自分にもどったような気がします。それは、今までよりも物事により感動しやすくなったこと

とから分かります。

合宿で心を開いて語り合って新しき友を得たるはうれし

友達が出来た

(金沢工業大学 工 四年 平野 賢)

去年に続き二度目の参加であったが、やはり政治や天皇の講義はよく分からなかったが、心に訴える話には感動することができた。

また、友達もたくさんつくることが出来た。今回は他の班の人と知り合う機会を多く持つ事ができ、いろんな人と話をする事が出来て良かったです。

語り終へし友ら大きく背のびして笑顔に変はるを見るは楽しき

班長をしてみたこと

(京都産業大学 理 三年 濱地賢太郎)

今年の合宿では、私は班長をやらせていただきました。あの夜、私の班が騒がしくて隣の班に遊びに行きましたが、彼らは輪読中でその邪魔をして怒られました。「君は自分の仕事を放棄しただけじゃないか」と言われ、はっとしました。私は都合の悪いこと、面倒なことを投げだしてしまっただけです。この合宿の大きな目標は自分自身と対することだと思っていたのに無意識のうちにそれをやめてしまっている自分に気付きました。自分の弱さを改めて感じた上で、勇をふるい起こしていこうと思えました。思いがけない自分の内面を見

せられた思いがして、反省すると共にさらに強くなれるような気がしました。

先輩の口より発するいましめになえたる勇気わき出できたる

第二十一班—女子学生—

一度に六人の友ができた

(尚綱短期大学 家政 二年 蓑田恵利香)

日をますごとに班友との友情が深まるのが、とても快感でした。私には難しかった経験のない慰霊祭も、この班友となら恐れることもないと思え、自信が湧いてきました。私は何よりも素直に心を開ける友人を一度に六人も得る事ができた事に感激しています。それは班別研修で互いの意見を述べ、コミュニケーションを図ることができたからだと思います。わずか三泊四日でしたけれども、この短期間でこれだけ仲良くなれるというパワーにも感動しています。同世代の女性とじっくりと深く語り合う時間が持てた事でこれからの私は少し変わっていくと思います。

ここで出会ったすべての人々に感謝し、班友との再会を心から願っています。草千里を友と歩いた時の満ち足りた気持ちを忘れないでいたいと思います。

友と語り時過ぎゆきてなごり惜し再会の日を胸に秘めつつ



三日目夜の、加納祐五先生御講話。先生は「お手本となる人の姿を辿ったり、いのちあるものに畏敬の心を持つ事が、自分の心を育てる養分となる」と語られた。

真剣に語り合った

(九州造形短期大学 デザイン 一年 木村祥子)

今までの考え方は、真面目な話になったら、黙っていれば自分にはとぼっちりはこないくらいに考えていました。しかし、人間は自分で疑問を持ち、それに向かって学び考えていく事が大切なのだと気づかされました。それを一番感じたのお互い意見を述べ合う時です。私は同じ年齢の子とこんなに真剣に語り合ったのは生まれて初めてでした。本当に素晴らしい事で、彼女らとは心から理解しあえたと思います。

先生方の御講義はとても難しかったけれど、いろんな意味で私達の忘れていた大切なものを呼び戻してくれたような気がします。愛国心、先人達の勇氣、人間愛など。合宿に参加させていただいた事を心から感謝します。

友達と別れを忍び語り合ふ大自然の夜は更けにけるかも

「真の勉強」とは何であったか

(武蔵野女子大学 文 一年 今林容子)

班別討論の時、私にも意見が求められ動揺しましたが、少し口を開いてみました。すると意見にもならない私の言葉を班友たちは真剣に受け止めてくれ、意見を述べてくれたり、共感してくれたりし、こんな喜びであるのかなあと思いました。

四月に大学に入り、バイトとサークルと勿論学校と、とて

も忙しく充実した生活を送り、友達もたくさんできたと思っていました。そんな中、この合宿に参加して、今までの生活は実は空っぽで、私の友達って誰だろう、そう思うと、とても恐ろしくなりました。両親がずっと私に言い続けてきた「真の勉強をせよ」という意味が少し理解でき、また、それがどのような学習であるかということはこの合宿で知ることができました。

そして、毎朝掲げられる国旗を見、国歌を歌い、初めて「私は日本人なんだ。これが私の国の旗でこれが私の国の歌なんだ」と思えたことも大変嬉しく思いました。

阿蘇の地に学びし多くを忘れじと強く誓へり真の班友らと

班友の向上心、素直さ、暖かさ

(上智大学 比較文化 一年 東中野顕子)

この夏合宿で色々な事を考えましたが、一番感激したことには班友の向上心、正直さ、素直さ、暖かさ、明るさを身をもって感じたことです。これは私達班員全員が感じ感動したように思います。

私は一年間の留学後、日本国内の事、世の中の出来事に極めて疎くなり、この合宿に来て改めて現状を両眼で見つめるべきだと頭を揺さぶられました。また年が一、二才しか違わないのに、数段高いレベルで物事を知り発言する友達を見て刺激を受け合い心から自分で勉強しなければならないと思いました。

班別研修の回を重ね夜更しを重ねて仲良くなり、これが数日間で強く結ばれたことは、驚くばかりのことで、とても嬉しいです。

「もう寝よう」さういふなれど話尽きぬ寝所の天井白くなりゆく

まごころの合宿

(明治大学 政経 二年 片山明子)

我が班には初参加の方が多く、初日は「場違いな所に来た」と家に電話した人も帰る前日には「本当に来て良かった」と電話したそうで、その話を聞いて本当に嬉しく思いました。中でも夜の班別討論や就床前の話で、天皇陛下の話になり、真剣に話し合いをしたのが印象に残っています。私は昨年皇居奉仕の体験がありましたので、その話をすると皆で盛り上がり、それぞれの持つ陛下への思いを語ってくれました。御講話の後の班別討論も一人一人の心を開いた言葉をわかちあえたので、時には涙して語ってくれたりしました。真の友を得たことが、とても嬉しかったです。

村松先生が何としても自分の話を聞く人のためにと、嵐の中を御出講されたこと、長内先生の魂にぶつかるような言葉の数々、素晴らしい先生方の御陰で心震える体験をしました。

国文研はまごころの合宿です。そのまごころが、祖先より受け継いできたものであり、私が入として生きていく道だと思っています。素直な心で日本の国を愛し、学び続けていきたい



夜のしじまの中、おごそかに慰霊祭がとり行われた。

と思いました。

美しき人の心のかよひあふこの夏の日を我は忘れし

心よりうちとけゆきて言の葉を交はず友どち有り難きかな
幼児の心を持ってと教へらるる道を守りて日々生くるべし

見も知らぬ人と語り合う感動

(早稲田大学 政経 二年 伊藤華恵)

今回の合宿には「他の人の話を心を開いて聞くようにしよう」という目標を持って参加しました。真心をもって人の心をつかみたいと思えました。それが満足に出来たとは思えないけれど、それでも去年の合宿よりは進歩があるような気がします。そして、今回班長という役目を与えていただいて、とてもいい経験になりました。班長らしいことは殆ど出来なかったけれど、班別研修などの時間での姿勢の持ち方に、とてもいい助けになったように思います。

合宿に参加する度に、どうして見も知らぬ人と短い間に心を素直に語り合えるようになるのか、ということに感動します。今はまだ自分が感じていることを言葉にできないけれどこれからゆっくりと考えていきたいと思えます。本当にありがとうございます。

友どちと時を忘れて語り合ふ最後の夜は白く明けゆく

新しい一步を

(福岡女学院大学 人文 一年 宮崎静江)

私はこの合宿に友達に誘われて参加し、大変軽い気持ちでした。講義の内容や班員の皆の話に、かなり戸惑ってしまいました。正直言って私が来る所じゃなかったのかもと思いました。しかし、班友達の親切で明るい人柄、そして、自分の意見を率直に言う姿を見て、すごく感激してしまいました。でも、やはり、「天皇制、国歌、自衛隊」などに関する今までの自分の持っていた価値感を捨てきれずにいたので心の中で葛藤が起こっていました。そして、三日目の班別討論の時にその事を皆の前で言い、いつのまにかぼろ／＼泣いてしまいました。この涙は、たぶん大学生活の前期を終え、いつもなにか満たされないで、つらかった気持ちも含めて全部が表に出た気がしました。この時を境に、はっきりと何か変わったような気がします。

私は自分の気持ちを言い表すのがとても苦手で、たぶん班員の皆が話してくれたように、自分をさらけ出すことができなかったように思います。でも、毎晩、特に最後の夜皆とたくさん話をし、本当に皆が大好きだと思いました。一人一人から大変強い影響を受けました。また私の短歌を添削する時に皆が一生懸命考えてくれて大変嬉しかったです。

私はこの夏の合宿のことを生かして、新しく一步を踏みだそうと思えます。

第二十二班―女子学生―

「人を信じることを学んだ」

（熊本大学 文 三年 延塚恭子）

今回の合宿に参加して学んだのは、人を信じることです。班長という貴重な経験をさせて戴き、今では本当にありがたく思っています。これまでの私は、周囲の人から気を配ってもらわうことが多くて、ここまで心を尽くしたことがなかったように思います。

合宿期間中、私の心は班と一体でした。台風で皆の到着が遅れ、班員がなかなか来なくて不安だったけど、全員揃った時にはとても嬉しい思いがしました。班友は日本のことについて学ぶのは滅多にない経験で、ひとつひとつの講義で出て来た問題を自分の心に問い、素直に語り合いながら討論を進めていきました。和歌相互批評の折に、各自の思いを詠んだ和歌を見て皆で考えていく、そうした時間にも班友の心を知ることが出来て嬉しく思いました。

思ふこと心ゆくまで語りひし班友との別れ名残をしきかな



「夜の集ひ」。共に研鑽を積んできた友らとの楽しい演出に歓声上がる。班別、また大学・地区別に思ひ思ひの出し物が披露され、集ひの場を盛り上げる。

合宿は求めていたものに十分答えてくれた

(福岡女学院大学 人文 三年 守谷明香)

生きていることを実感したくて参加したのですが、この合宿はそれに十分答えてくれたような気がします。今までの小さな世界から飛び出して、沢山の人々と出会い、心の中を打ち明けたことは私の人生において大きな転機となったと思います。キリスト教の精神に基づく大学生活の中で私がこれまで得たものと違う意見もありましたが、それがどうというよりも、こういう意見を言い合える機会を持つことがこの合宿の大きなねらいなのだと思います。

物質的には豊かな今、自由な今、だからこそ、私達はその中で何を信じて生きていくべきなのか……。何かにすがりたくて宗教や思想に走る人もいますが、私はその前に歴史を確実に見極め、真実を追求する学問を身につけなければと思います。

色々な考え方のあることを改めて知った

(拓殖大学 外 二年 小谷典子)

全体感想発表の際に発言させて頂いたとおり、軽い気持ちで参加しましたが、のほほんとしていたのでは班別研修で間が持たないので、睡魔に犯されながらも頑張っって聞くことができました。大学に入学して一年半、全くよく遊んだ分まとめて勉強させてもらった。また班の人にはとてもおとなしい人が

多く、自分の今の学生生活では、あまり近づくことのないようなタイプの人と友達になることができ、そういう人たちの意見も本音で聞けたのが良かった。自分でも納得のいかない思想も多々あったが、色々な考え方のあることを改めて知ることができた。この合宿を熱心、かつ、親切な方法で勧めてくださった松本先生には大変感謝している。

夏の日々に阿蘇に集ひて我が友と語りし日々は今過ぎにけり

心から信頼しあえる友人ができた

(中村学園大学 家政 二年 原田里香)

この合宿に参加して一番良かったのは、心から信頼しあえる友人ができたことです。部屋に入った時、初めて会った友達と仲良くやっていけるのだろうかと不安でしたが、最初の班別研修の時に涙を流して意見を述べている班員の姿を見てそうだ、私も自分の殻に閉じこもらないで素直な気持ちで心から語り合わなければ本当の友人は出来ないと感じました。それからの班別研修では自分の意見を言えるようになり、自分でも驚くほど変わり、感想自由発表では班員の発表する姿に班員全員が涙を流し、絆が深まったことを感じました。

小柳先生にも、講義で理解できなかったことを丁寧に教えて頂き、そして新しい問題を投げかけられ、私にとって勉強にもなり、楽しいひとときでした。合宿に参加して本当に良かったと思います。

壇上に立ちたりしわが班員の流す涙に心うたるる

合宿四日目で何かが自分のものになったと実感した

(尚綱大学 文 二年 鈴木美和)

私は始めのうちは、先生方の日本を愛する心の持ち方もよく分からなかったし、慰霊祭にしても、それが自分とどう関係しているのか、何の為になるのか分からなかった。班別討論にしても、先生や班友の意見に合致するものを見つけないことが出来なかった。だが山内先生と長内先生の御講義を聞いた後の班別討論で、初めて自分なりに納得のいく意見を言うことが出来た。それが非常に嬉しかった。合宿四日目にしてやっと何か自分のものになったと実感した。

四泊五日の間、疲れてしまっただけで投げやりな状態になってしまったかもしれないけども、そんな時は班友に励まされ、励ましながら過ごしてきた。友人あつての合宿だった。今回合宿で学んだことを今後さらに奥深く追求してみたい。

夏の陽を背に浴びつつみ友らと阿蘇路に集ひ学びたりけり

これまでとは違った生活が始まりそうだ

(大谷大学短期大学部 国文 二年 橋本美枝)

この合宿に参加させていただいて本当に嬉しく思っております。合宿が終わってからの生活が、今までの生活と違うものになるのではと何か感じるものがあります。そして八木先生の「自分が心で感じたものを信じるのが大切だ」、加納



「班別短歌相互批評」。自分の感動を正確に詠まうと班員が心を合はせて互ひの和歌を直してゆく。歌を通じて班員相互の心が通ひ合ふ。

先生の「心を養うことは容易なことではない」、長内先生の「答えは自分で見つけるものだけれど、ただ一つだけ言えることは、心や幸せは頭で考えてできるものではない」と言うお言葉が心に刻まれています。こういうお言葉は一寸聞けば簡単なようですが、奥が深いなあと思いました。これらのお言葉をこれからの私の課題としていきたいと思えます。又今回の合宿で小柳先生と班に出会えたことを感謝し、来年も参加したいと思っています。

五日間の合宿終わりはほっとするされど友との別れつらさか

改めて「言葉の重み」を実感した

(西南学院大学 文 一年 石松祐子)

この合宿を通じて痛感したことは自分の未熟さでした。さまざまな講義の中でも教えられることばかりでした。班別研修の時も圧倒されてばかりで、自分の思っていることがうまく言葉にできなくてもどかしく思っていました。

長内先生が「幼な心」について話された時、私ははっとさせられました。今までの自分はいったい何だったのだろうかと思いました。私はどうしても人によく見られたいと思いつい自分を飾ってしまいます。そんなこともあって私は人と話すのが苦手です。でも自分の気持ちを伝えるには、「言葉」が必要なのですね。改めて言葉の重み、大切さというのが実感できました。この合宿のこと、さまざまな人と出会ったことをバネにしてこれからの自分を磨いていくつもりです。

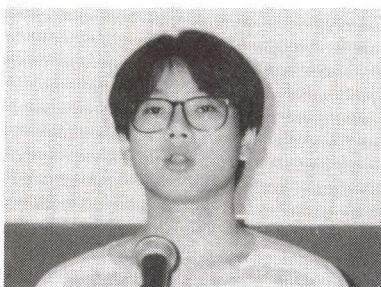
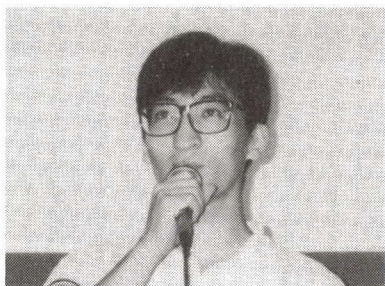
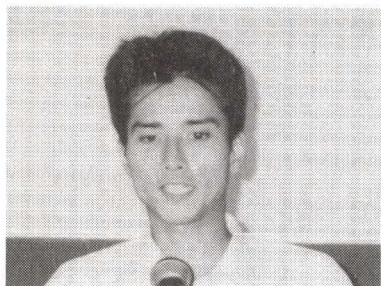
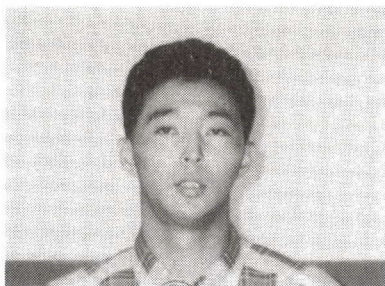
夏の阿蘇友と過ごせしこの時間はよき思ひ出となりて残り

これまでの自分が恥ずかしかった

(尚綱短期大学 家政 一年 新蘭美佳)

出発する時、台風が来たので阿蘇まで着けるだろうかと不安な気持ちで家を出ました。ようやく到着し部屋に入った時置いてあった荷物を見てまた心配になりました。しかも班員は二、三年の方が殆どだったため、緊張してしまいました。すぐとけこめることが出来ました。講義は全部を理解することはできませんでしたが、どれも素晴らしい、滅多に聞けない内容であることは分かりました。班別研修では各自がそれぞれ自分の意見をしっかりと持っていることを感じ、私自身これまで自分の国のことをどれだけ真剣に考えていたのだろうかと恥ずかしい気持ちがありました。また初めて短歌を作り、批評してもらい、短歌の奥の深さを知りました。沢山の貴重な体験をさせていただきました。班員の人達と別れるのが寂しいです。

合宿で学んだことの大きさは替へられがたきものと思ふも



「全体感想自由発表」。友らは次々と登壇し、この合宿教室で何を学び、何を感じたか、各々こみあげてくる思ひを率直に語ってくれた。

第二十三班 女子学生

日本人である自分自身を確認できて嬉しい

(尚綱大学 文 四年 臼杵直子)

自己確認、自己認識、まさにそれが私のこの合宿での目的でした。合宿参加二度目、学生にして班長ということで、緊張しながら阿蘇へと向かいました。

私以外皆初参加の班友が、戸惑いながらも、日々何かを発見し、喜びを共にし、輝き溢れる瞳を見ると、それだけで班長をして頑張ったと心より思います。

先生方の御講義を聞き、班付の先生方のお話を聞き、日本人である自分自身を再確認できたことが何よりも嬉しく、そして、日本人として生きているこの自分が、とても尊く思えたりなりません。大学を卒業し、来年社会へと踏み出そうとする今、少しでも後世に伝えてゆけるものが、私の中にできたことを嬉しく思います。

いのちのうちに包まれて生きている自分、真心を忘れずに持ち続けていたい。今だけでなく、過去、そしてこれから命を受け継ぎ生きてゆく人達、未来のために、私にできることを一杯行ってゆきたい。

最後に、班付の諸先生に心より厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。

師を囲み友と語りふひとときに私の心もいつしか和む
班友と心ひとつに語りあふこのひとときのなんと尊し

日本の事を勉強し自分が日本そのものになりたい

(熊本短期大学 社会 一年 馬締由希子)

高校の時の担任の先生に誘われて内容も良く分からないままこの合宿に参加しました。初め講義は難しく、班別研修は何をどのように言えばよいか分からず、きついででした。日程が進んで行くうちに、少しずつ自分が変わっていくのが分かるような気がしました。いやだった班別研修も少しは話せるようになり、人の話も聞けるようになりました。特に班付の諸先生方の心温まるお話は、班員皆で感動しました。帰ってからも色々なこと、特に日本の事を勉強してみたいと思うようになりました。そして自分が日本そのものになりましたと思います。

御世話になった班長さんを始め、班員の皆と仲良くなった事は、大きな収穫でとても心に残る思い出です。

先生の教へたまひしまごころに心打たれて皆感動す

良い先生に会えた事が嬉しい

(拓殖大学 外 二年 荻田亜紀子)

私はいよいよで合宿に来ました。日程の初めのうちと変わらず、半分が過ぎてても気が重かったです。班別研修の時は、いつもはおしゃべりな私が小さくなっていました。でも何回も

たっぶりの時間討論した事が、班友に心を開くカギになった
と思いました。私にとってはむりやりの班別研修だったけれど
ども、合宿が終わった今、それはなくてはならないものと思
いました。

一番良かったことは、どんな疑問にも答えてくださる先生
に巡り合えたことです。班付の先生が話して下さることを
聞くたびにジーンとききました。私の目を見て話して下さると
必ず涙が出ました。あんなに合宿が嫌だった私が班の中で一
番泣いたのでは？と自分が不思議でした。心から先生を尊敬
しています。これほど多くの感動を与えてくれた先生はいま
せんでした。

合宿で共に学びし友がきの出会ひ嬉しき我が心より

日本という国の素晴らしさを実感した

(日本経済短期大学 経営 一年 稲津里美)

父に二カ月前前に合宿の事を聞かされ、何をするのか分
らないけれど、小さい頃に可愛がって頂いた人達に会いた
くて参加しました。班の人達と班付の先生との班別研修、始め
は緊張して自分の意見もまともに言えず、私にとって場違
いだと思います。しかし多くの先生方の御講義を聞くに連れ
て、日本という国はどれほど素晴らしいのかを実感し、素直
な気持ちになれました。

慰霊祭、短歌創作と私には初めての経験で、毎日がとても
新鮮でした。あっとい間この四泊五日でしたが、素晴らしい



「合宿を顧りみて」。国民文化研究会副理事長・宝辺正久先生は「心から思ふことを言ふ、そして心から出た言葉に耳を傾けて聞くと言ふことを、この合宿で学んできたのではなからうか」と述べられた。

人達と出會え、多くの事を學べて、少し大人になつたような気がしました。この合宿を勧めてくれた父に心から感謝します。

我が友と心打ち語り合ふ時こそ我が宝なりける

素直に感動する純粋な気持ちを忘れずに生きていきたい
きたい

(目白女子短期大学 國語国文 一年 村松美紀)

今回の合宿の中で一番印象的だったのは、自分が先人達の願いや思いの上に、今日本に生きているということを感じたことでした。日本の現在の繁栄も全て先人の方々の血と汗の上に成り立っている。そんなことが次々と思われきてなりませんでした。私は先人の方々の思いを少しでも聞くことができ、自分も過去に、そして未来に責任の持てる人間になりたいと思ひました。

先生方の痛切な思い、この時代の私達に日本の脈々と続く歴史の素晴らしさを経験を交えながら少しでも伝えたいと思つてくださる先生の気持ちがとても嬉しかった。一生懸命話される姿が、これほど人の心を動かすものであるかと、初め思ひました。

忙しいいつもの生活に戻つても、何かに素直に感動する純粋な気持ちを忘れずに生きていきたいと思ひます。国民文化研究会の先生方本当にありがとうございます。

長内先生の話を聞いて

懸命にお話し下さる師の姿こらへきれずに涙こぼるる

合宿を終えて

先人の熱き願ひをつぎてこそ日の本の国栄えゆきなむ

短くも心通ひし友どちと過ぎにし時ぞ忘れざらなむ

感動する心を持ちたい

(中村学園大学 児童 二年 松隈香代子)

私は今回初めて国民文化研究会の合宿に参加したのですが各先生方からとても貴重なお話を聞かせて頂いたと思ひます。

特に班付の先生の戦争体験が心に残っています。本当に先生方がお国のことを真剣に考え、日本という国を愛していらしゃることがとても伝わって来て、今までの自分をつくづくと反省させられました。

感動・感謝・まごころに対しても見つけ返す機会を持つことが出来ました。自分には「感動する」ということが不足している部分があり、もっと身近かな事に注意し、和歌を詠むことで心を豊かにせねばならないと思ひました。

本当に今回の合宿に参加することで、自分自身何かしら成長したんではないかと思ひます。

朝の集ひにて

各人の思ひをこめて君が代を歌ひし我等の声は一つに

良き友を得た事がとても嬉しい

(福岡女学院大学 人文 一年 青木与志子)

今思えばこんなに内容の濃い合宿に参加したのは生まれて初めてです。最初計画表を見た時、涙が出そうになり、帰りたい気持ちで一杯でした。しかし、班別研修では内容の濃い話を班友と話すことが出来たことには、たまらなく感動し、また班友が涙を流しながら語ってくれた時、普通の友とこんなにしてまで話したことないと考えさせられました。本当に前からずっと友達だった様な気持ちで、今すごく大切なことを学びとっているのだなと思いました。

確かに講義内容は難しいところがありました。が、班の皆で話し合うことにより理解を深め、自分の考えを持ち、これを確かめることができ、新たな知識を数多く得る事ができました。助言して下さった班付の先生のお話しは私に強い影響を与えて下さいました。

班別研修を振り返って

師の話忘るることは決してなく我が心根の糧となりぬる

第二十四班—女子学生—

心の中の今まで使っていなかった部分を使った

(福岡女学院大学 人文 一年 庄司 愛)

今回、この合宿に参加した動機は、高校の時の先生にすすめられたからです。合宿の内容もほとんど知らず、いきなり班別研修の行われている部屋へ入ってからは緊張が続きどうなることかと思いました。しかし日がたつにつれ、自分の意見をみんなの前で発表することにも慣れてきて、自分の意思でこの合宿に参加しているという実感が持てました。この短い時間での気持ちの変化というものは、初対面の班員の人々がどんな小さな意見も真剣に聞いて考えてくださったことと、たった三日ほど前に会った私のことを友達と認めてくださったおかげだと思えます。又、周りの人が創作した短歌のなかに「友達」として、「教え子」としての自分を発見したときの感激は忘れられませんでした。この合宿に参加して、私は私の心のなかの今まで使っていなかった部分を使ったような気がします。

長内先生の御講義をききて

先生のはなしを聞きてくやまるるけんかしてこし母の思ひを

黒岩先生へ

教へらる短歌づくりも黙想も合宿の学びがもとと知らさる

討論の中で生まるる緊張と友を忘れず故郷へもどらん

今まで学べなかつた心を得た

(拓殖大学 外 二年 田中藍子)

この合宿に参加することを決意した際、たった五日間だと気楽な気持ちを持っていました。しかしこの長くて短かつた五日間で今まで学べなかつたものを得た気がしました。その一つは「心」です。班付で来ていただいた加納先生は「人間と人間をつなぐものは心であり、人間としての心を持っていれば生命を実感できる」と。私にとっては具体的な国際情勢や日本、天皇陛下についての難しい話も自分のためになる大切なものですが、「心」についてならこの未熟な私にズシンとくるものがありました。おかげで班員の方たちとも「心」から話し合うことができました。この合宿に参加した人たちは絶対に何か自分なりに得ることができたと思います。私のいたらない話を真剣に聞いてくれた班員の方々に心から感謝いたします。ありがとうございます。

阿蘇の地と己が体は離れしもの感動は心にとどめん

心の垣根を取り払うことができた

(九州大学 法 二年 有馬陽子)

合宿に来る前自分を見つめ直す余裕もなく、物事を真剣に考える機会もなく、もの足りない気分でしたが、合宿を待ちわびる気持ちはかなり強くありました。長内先生が「人

はパンのみで生きるんじゃないんですよ」といわれたとき、そうだ、そのとおりだと思つたのはそういうこともあつたらだと思ひます。期待通り合宿では、先生方のお心こもつたお話が胸に迫ってきて、考えさせられることや、感じるものが多い充実した毎日でした。様々な講義があつたのですが、どのお話も、先生方の真心、熱い思いから生まれて来たものだとしみじみ感じます。私は心を開いて話すことと、素直な気持ちで人の話を聞くことがけました、飾らぬ「幼な心」になるのは難しいと思います。けれどもこの合宿で、少し心の垣根を取り払うことができたように思います。

全体感想自由発表

泣きつつも壇上に立つ友どちの思ひをききて深くうなづく

つながってこそいのち

(福岡大学 人文 三年 進藤裕子)

今年には是非友達と一緒に参加したいと思ひ、いろ／＼な友達にパンフレットを配り思ひを語ってきましたが、直前になつて参加できないと断られ、すっかり気落ちしてしまいました。でも、参加してみると私が誘つた人が来てくれていました。バイト先でたま／＼声をかけたのがきっかけでしたが、友達と一緒に参加してくれていました。それを知って、やはり心はつながっているんだと、本当に嬉しさがこみあげてきました。また、初対面の人同志が少しづつ心を開いて語り合う中で、信じることの大切さや、心が通い合う喜びを感じ、

国文研の先生方の私たちに対する情熱は、世代を越えてつながると感じ、加納先生のおっしゃったように、つながってこそいのちなのだと思いました。

言の葉を尽くして思ひを語りゆく友の姿にまぶたあつくす

西本さんと守谷さんへ

電話にて参加せらるること聞きて胸高鳴りて阿蘇に向かふも
久々に顔を合はせて喜びぬ共に学びを深めてしがな

長いようで短く感じる合宿だった

(明治学院大学 文 三年 石川句里子)

この合宿には兄に勧められて来たのですが、途中台風に加い、大変疲れました。合宿とはどういうものかと期待して参加し、阿蘇に着いたときは田舎の広い景色に、緑色の景色にほっとしました。多少疲れた気持ちで合宿に行かねばならなかったのは残念でしたが、何もかもが初めての体験で新鮮な気持ちで貴重な経験をしました。短い期間に多くのことを友人と語り合い、中身の濃い合宿でしたが、そんな中で皆の意見を聞くばかりで考えをまとめて言えない自分にもどかしさを感じました。

長いようで短く感じる四泊五日の合宿でした。

台風の前は始まりし合宿は終はればまたも雨の降るなり

和気あいあいとした五日間

(拓殖大学 外 四年 岩野恭子)

私が想像していた以上に、とても充実した五日間でした。自宅にいれば何気なく過ぎてしまう五日間がとても長く感じられました。こんなに多くのすばらしい人々にめぐり合う事が出来た事を思うと、参加して本当に良かったと思います。班の人は皆、気さくで、すぐに仲良くなれ、私の緊張がほぐれたと同時に、始め気が重かった班別研修も、班長さんや、自分の思うことを素直にそして真剣に話す班友の姿を見て、私も一緒に述べ合うことが出来ました。和気あいあいと時には皆で大笑いをしたりして楽しく過ごせました。

阿蘇合宿楽しき日々は終はれども胸に残りし九州の友

「聞く」ということを学ぶ

(淑徳大学 社会福祉 四年 西島千尋)

最初は、講義も難しく、班員はみんな自分の意見をちゃんと言え、私は場違いな所に来たと思いました。だけど班長さんはじめ班員全員が私のしどろもどろの話もちゃんと聞いてくれて日がたつにつれて自分でも話せるようになりました。会って間もないのに年の差に関係なく友達ができて本当に良かったです。私は人の話を聞くという事がどんなに大事か分かりました。私は人に自分の意見をおしつける傾向にありますが、それは人の言うことを聞かないからだと思えます。こ

第二十五班—女子学生—

の合宿に参加して「聞く」ということを学びました。その「聞く」ことに注意すると講義も聞けました。講義内容も普段関心のないことが多かったけれど、先生方の熱い思いが伝わってきて、まだまだ私にも考えるべきことがたくさんあることがわかりました。

新しき友の名前のアドレスに増えゆくみれば楽しかりけり
阿蘇の地で学びしことを忘れずし優しき真心育てゆきたし

去年よりののびのびと

(日本青年協議会 清水久仁子 25歳)

この合宿では一カ月くらい前から班長ということを知らされていたので、どうすれば班員が、また来年も来たい!と語ってくれるほどの素晴らしい体験を持てるかと考えていました。私は去年、良い班ができたと思っていたのですが、今年去年の班員を誘ってみるとだれも参加できずがっかりしてました。それで今年は、要らない力を抜いてのびのびとした本心に心のかよった班作りをめざして頑張ってみようと臨みました。まだまだ未熟な班長でしたが、加納先生や稲津さんに助けて戴き、去年より心が通い合える班になったのではないかと満足しています。

あたたかき人の心に交はれば心の底より力湧くなり

広く、大きく、温かな心の持ち主になりたい

(早稲田大学 社会科学 二年 中島淳子)

昨年は、疑問を抱きながら合宿に参加して、なかなか班にとけこめませんでした。それが長内先生の話をお聞きして、何と自分は思い上がっていたのだろうと気づかされ、涙がとまりませんでした。今年は講義の際も、先生が言わんとしていること、伝えたいと思っていることを聞き取るように努めました。そのためか以前とは比べものにならない程、素直に話が聞けました。先生が語られる言葉、班友が一所懸命に語る言葉に心が動かされました。

出会って間もないながら胸の内をつつみかくさず語って行くことの嬉しさ、自分の思いを口に出すことの大切さ、そして国文研の先生方の御姿勢に本当の意味での謙遜を知ったような気がします。これからも研鑽を積み重ね、広く大きく温かな心の持ち主になりたいです。

閉会式の後、班友との別れを惜しみて

ありがたうの他に言葉なくお互ひにしかと両手を握りあひたり
握りあひし手のぬくもりよ込められし友の心を我は忘れじ

語ろうとする心を忘れまい

(佐賀女子短期大学 初等教育 二年 大岩幸子)

合宿が近まるにつれて行きたくない、めんどうだと思っていた。家でのおんびりしていた方が楽、台風で中止にならないかなあ、いくまいか……参加者らしい人を阿蘇に来るまでに見かけても顔をそらす。自分から話そうとせず、話せない自分がいや、自分の班に入る時もありたくない……人へのおそれ……

講義の後、先生が、何を言いたかったのかがつかめない。

講話よりみんなの意見がおもしろかった。この人たちすごいな。みんなの意見を聞くと講話が心から聞きたくなった。どんな事なのか知りたくなる。話せる友をもつ幸せ。人と話したくなる。自分の気持ち、意見、人に伝えるようになりたい。友と心から語ろうとする心を忘れないなら毎日楽しいだろうな。天皇、政治、日本史、世界史、和歌に興味がもてた。合宿が終って今までの自分のおろかさ気づきました。今から少しづつでもなおしていきたいです。

よき友にめぐり合ひたる喜びを心にいだき生きてゆきたい

素直な心はすばらしい

(立正大学 仏教 一年 村山智子)

開会式で国旗が掲げられ、胸を張り大きな声で国歌を歌ったことに感動しました。私の出た高校は入学式も卒業式も国

旗掲揚、国歌斉唱はなくて、校長先生が行おうとするものなら、もう先生、生徒の抗議、ピラ配りと学校中が反対の雰囲気、何もできない自分に腹が立ちました。三年ぶりくらいの日の丸と君が代に胸がつまり、目頭があつくなりました。

全体感想発表で班友の大岩さんの発表に感動しました。さっちゃんとは別研修の時あまり意見を言わないで、他の人の意見を聞いていました。それが全体感想発表で大勢の人の前で、泣きながら「お国を大切にすることってすばらしいと思いました」と話しました。私はすぐく大事なものを教えてもらいました。自分を飾らず、おごらず、素直な心を感じました。本当にすばらしいと思いました。

班友の涙まじりの発表に心うつつものわれは感じぬ

日本人として誇りをもって生きていきたい

(九州女子大学 文 一年 松尾尚美)

この合宿で一番感動した事は、皆『日本』の国に誇りを持つているということです。私は今まで『日本』に自信をもつ事ができませんでした。これまでの学校教育で日本の国の良さを学ばず、「日の丸」「君が代」に対しても悪い印象ばかり残っていたからです。友人と話す時自分の国を否定してしまつて悲しい思いがしていました。この合宿で日本の良さを教えられ、ああ、私はこんなすばらしい国に生まれていたんだと思ひ、幸せな気持ちになりました。これから、日本人として誇りを持って生きていきたいと改めて思いました。

次に感動したことは話しを聞く姿勢です。どんな事でも真剣に聞き、共に涙を流して語ってくれました。私は話しはよくしていましたが、人の話しを真剣に聞く事ができていませんでした。先生方、班員の皆さん、ありがとうございました。来年もできたら参加したいと思います。

いつまでも変はらぬ心持ちつづけいきいきと生きたし夢に向かひて

あたたかい心を、ありがとう

(鹿児島大学 農 三年 古川小百里)

二回目の合宿に、何も分からないまま班長になってしまいました。班長らしい言葉もかけられず、行動もできず、すぐもどかしく思います。ただ班友に申し訳なくて。

私自身にとっては、反省することばかりだったので、勉強させてはいただきましたが、はずかしく思います。班友がいればかりだったので、班付の先生に支えてもらいつつ何とか一つ、つ終えることができました。皆それぞれに、何か求める気持ちがあったようで、常にいきいきとしていて尊敬できる人ばかりでした。私の至らなかつたところでも、班友が「私もつこうしていこう」というようにかながえてくださればいいと思います。

班友の皆さん、やさしい思ひを、あたたかい心を、ありがとうございました。

全体感想自由発表にて

壇上上がりし友の眼より涙あふれて吾もまた泣かゆ

あふれる涙とともに吾が友は対馬の大人のことを語れり

自分が今感じている気持ちを表現する

(京都外国語大学 外 四年 新谷幸恵)

合宿をふり返って私は何を待たのだろうと考えた時、最初に浮かんたのは「結局自分をさらけ出すことが完全にはできなかった」ということです。しかし感想発表の時、三回目になる方が「自分をさらけ出すことは、いまだに難しい」と言われてハツとした。完全に自分をさらけ出す……。完全にばかり目がいつて、自分の感じている思いを否定している自分に気がつきました。完全に完璧にはなくともいいんだ。一瞬でも、自分と相手の心が通いあった、こんな素晴らしい、新たな世界があったんだ、ということを見つけた喜びと、安心感と、感動。そして気づいたのは、参加にあたって先輩が「自分の今感じている気持ちを否定してはいけない」と言われた言葉でした。その気持ちを相手に伝えることで、相手との一体感が深まっていくんだ、と。大きな発見でした。

全体感想自由発表を聞きて

かねてより思ひをりしこと飾らずに語るを聞けば吾もうれしき
感ずるがままに述べよと教へられし先輩の心ありがたきかな

この研修を手がかりに、目指すものを見つきたい

(福岡女学院大学 人文 三年 西本亮子)

やむをえず途中で帰りましたが、先生方の講義、班友との

触れ合いで多くのことを得ました。講義のあとの質疑応答の時間は私たちに考える余地を与えていただきました。班別での研修は、班員一人一人の意見に耳をかして、納得でき、自然と自分の意見もまとまったことが、私にとって大きな収穫だったと思っております。

合宿の日程は、はじめは「きついな」と思いましたが、日がたつにつれ、私たちが理解しやすいうように、心をくばられていることに気がつきました。短い間でしたが、ありがとうございました。この研修をうけたことを、これからの手がかりとして、自分の目指すものを見つけれたいと思います。

噴煙の雲となりては漂々と空のかたに流れゆきたり

第二十六班—女子学生—

熱のこもった講義に感動した

(拓殖大学 外 一年 小島真美)

講義ではどの先生方も熱がこもっていて、それだけで感動しました。特に加納先生の「いのちは自分の周りに、たくさんあるのです。自分が気付かないだけなのです」という言葉に一番感動して涙がポロポロできました。そして多くの講義を聴くたびに自分のもっといろいろな勉強をしなくてはいけないなと思いました。

合宿に参加して一番よかったことは、いい親友に恵まれた

ことです。たった四泊五日の生活で一生の友達を多く得られたのは国文研の方々やこの合宿に携わった方々のおかげだと思います。

師や友と共に学びて語り合ひ不思議なまでに心やすらぐ

自分の感動を信じて生きてゆきたい

(九州女子大学 文 一年 林 麗子)

自分はずっと自分の中の虚無感に悩んでいました。何の為に、誰の為に生きているのかわかりませんでした。目標をつくりながら、それに向かって努力し歩いて行こうとしなかった今までの自分がぐちゃぐちゃしてしまいました。なぜならこの合宿で私は「志」というものを学んだからです。自分の感動を信じなさい、自分の心の扉を開きなさい、先生方の助言や長内先生の講義を思い出す度、胸がぐつときて涙が出そうになります。自分も無心に頑張れば何か出来ると思うと嬉しくてしようがありません。積極的に生きてみよう、そういう気持ちで胸が一杯です。学校や日常生活に無気力だったけど明日からの自分は人間らしく変わっていると思います。

心ひらく勇気を学びし合宿で己の道に光見えたり

心を働かせて

(熊本大学 文 三年 有田ゆき)

この合宿で学んだこと一番大きなものは、人の話をわかろうとする際に、頭を働かせるよりも心を働かせるというこ

とです。逆に自分は話をする際もそうすべきだし、そうして話したことを聞いてもらう時には自分だって相手に心を働かせて聞いてもらいたいのです。大学でよく友人に話していて相手は私の思いを理解したと勝手に納得してしまうのですが、何も伝えることができなかったという不満でいっぱいになることがよくあります。皆が心を働かせている場での討論をこの合宿で体験したことを、これから大学でも生かしてゆきたいと思います。

和歌相互批評にて

友どちの思ひに心働かせ言の葉さぐる一つ思ひに

互いに心を通わせ合えること

(湘北短期大学 生活科学 二年 出野晶子)

今回は二度目の参加でした。感動は昨年参加した時の方が強く、最終日には涙を流したことを覚えています。しかし昨年度は、合宿が終わってから日が経つごとに、感動や素直さを忘れ、また嫌な自分が見せ始めました。結局、日々の生活ではまわりの人たちや、安易で楽しい方に流され、合宿の時の感動もただの自己満足に終わってしまいました。全体感想自由発表でみんなの意見を聞いていて思ったのですが、新しい知識や思想に出会うことよりも、互いに心を通わせ合えることの方が、人間に幸福感を与えてくれるものなのだと思います。合宿中はみんなで同じ行動をし、何かをつかんで帰りたいというほぼ同じ目的のもとで行動をするので一体

感を感じるし、感動を共有し、心の交流もあります。でも普段の生活に戻ればそれぞれ違う目的を持ち、信念をゆるがすような情報、人・物に囲まれています。そんな中で心に壁を作り、孤独を感じるのではないかという不安があります。勉強し続けたい、頑張りたいと口ではいくらでも言えるけど、正直な所、不安でいっぱいです。でもどんなことがあっても卑屈になったり、悲観的になることなく、努力を惜しまず生きていきます。

合宿で得し感動を忘れずに努めてゆきたし思ひ新たに

自分の中の尊いものを生かしていきたい

(佐賀女子短期大学 児童教育 二年 田苗安希子)

初めて会った人たちに、自分の打ち明け話をし、友の打ち明け話を聞き、どうしてここまで自分も含めて、みんな心がやほらくて暖かくて、居心地が良くて、合宿を終へてそれからの自分は、この気持ちのままやっていけるのだらうかと、今、少し不安に思っています。世の中にこんな心の暖かい人がいらっしやるんだな、その人たちのおかげで自分も暖かくなれるんだなと思ひました。自分の中に尊いものを得ることができました。これからその尊いものを生かしていくには、勇気や忍耐力が必要とされますが、一つ一つ自分のものにしていかうと思ひます。

合宿で心はなちて語り合ふ友に会ひたるなんとうれしき

知識より大切なもの

(熊本商科大学 経営 一年 前中紀子)

初めてこの合宿に参加して、しょっぱなから帰りたい気持ちになった。私とは少し何かが違う人達の集まりに思えたからだ。第一回目の講義、講師の先生が何をおっしゃっているのかほとんど分からない。班別討論で何をしゃべっているのか分からず沈黙……。そんな私は、何か溶け込めなかった。しかし小さな事にもやさしい気持ちで接してくれ、私の拙い発言を熱心に聞いてくれた班友にうちとけることは、決して難しいことではなかった。知識なんてどうでもいい、自分の思ったままのことを述べるとみんなは聞いてくれた。それが私の心の原因不明の空白を埋めてくれたような気がする。

最後まで先生方の講義を理解することはできなかった。でも、それでも満足している。なぜなら、私には今年の合宿ではその他にも得ることは多かったから。講義を理解するといふのは、来年の課題にしたいと思う。それまでに私は、清く広い心を持てる人間、また女性として周囲の人に愛される人間を心がけて努力していきたい。

我が心迷ひつつあるその時に出会ひし友を玉と思ふ

しっかりととした考えを持ちたい

(福岡大学 薬 三年 坂本貴子)

班別研修で班友たちが自分の意見を述べているのをみて、

自分は今まで人の話はよく聞く方だけれど、自己主張するところはあまりなく、人の意見ばかりを尊重する自主性のないところがありました。他人から見ると、遠慮しているとみられるかもしれないけれど、私の場合は、結局、何も考えてない、考え方が浅すぎて、自分の意見がもてないということに原因があるのだと思いました。とにかく、いろ／＼なことに関心をもち、自分独自の考えをもてるようになりたいというのがこれからの課題です。

真剣に語らふ友と過こしつつ心はなごむ何とはなしに

自分が問はれた合宿

(ヤマハ音楽教室システム講師 橋本加枝 25歳)

今回の合宿は様々な面に亙って、自分が問はれました。班員には、ちょっと見た目では知ることの出来ない深い思ひがあり、願ひがあり、宝があり、悲しみがあることを知りました。また、それぞれに置かれてゐる環境のなかで一生懸命生きようとしてゐることも知りました。一人一人独立してゐて相容れない個の集まりのやうな班が、合宿を受けるなかで、寝食を共にし、感ずる心を見つめていくうちに、いつのまにか、一つになれる……。一つであるやうな気がしました。これから班員達がそれぞれの環境に戻っていくことを思ふと、無事で、感じた心を忘れずに頑張つてほしいとの願ひのやうな祈りで一杯です。

“来年もまた来ます”と言つてくれた班員に、また逢へる日

を楽しみにしながら、加納先生のおっしゃられた「信じる」とは心が通じ合ふといふことを心に繰り返して問うてゆきたい。

相共に語り過し思ひ出のこもるこの部屋整へかたす

合宿の記念に残る版文を持ちて別るる友らしはし

第三十一班——社会人——

素直な心であるがままに受け入れる

（日本植生樹 貞森 健 34歳）

今回の合宿において、最も自分で分かったことは、「感動の心」を日常いかに忘れていくかということでした。少年の頃素直に感動したものに對し、今は素直な心で感動できていない。素直に、あるがままに受け入れることができているということとです。偏狭な知識で物事を判断しているということとです。今後は物事に對し、素直な心であるがままに受け入れる心を養っていききたい。また、仕事が忙しいと行って学問の心を忘れてしまっている自分に気がつききました。読書の基本を忘れてしまっている。著者の心を自分に映すように読書に努めたいと思いました。

報恩感謝という言葉がありますが、家の伝統・国の伝統・精神の伝統に對して、常に感謝し、そのおかげで生かされているという気持ちで今後も生きたいと思います。

大阿蘇の自然に抱かれし夏合宿新しき友と学びあひたり

慰霊祭の時の「海ゆかば」に涙がこぼれた

（厚木市役所 清水春敏 44歳）

四泊五日は長いかなと思っていた合宿も、日一日と短く感じられるようになり、もつともつと時間がほしいと思うようになりました。合宿での先生方のお話や班友との夜遅くまでの語らい、慰霊祭やレクレーション、短歌創作など初めての事が多く、とまどいながらも、できるだけ多くの人の話を聞こうと耳を傾けました。私が特に感動したのは、慰霊祭の時に全員で「海ゆかば」を歌いはじめた時、なぜか胸が熱くなり、自然と涙がこぼれてきました。このような自然の感動を持ちつづけ、機会があれば是非次回も参加したいと思いました。

研修を終はりてみればなつかしき深夜にわたる友との語らい

学生と感動を分かちあった

（無職 小馬谷秀吉 66歳）

台風の直撃で、開会式が翌日ということになりましたが、その間の主催者の方々のご苦勞を目の当たりに見ている、そして参加者の少ない中での班別輪読を始めながら、その間に参加者が次第に多くなっていくことに、何か自分の心までゆさぶられる思いでした。翌日の開会式に二百余の参加者が揃ったことは、涙の出るような感動でした。

また、長内講師の話は、始終心をつきあげるような感動で、涙を流し続けながら、一言一言を心に刻みつけました。参加者の全体感想発表でも多くの若者が同じように感動の涙を流したというのを聞いて、そのことにも感動しました。

若きらと感動ともにわかちあひ阿蘇の合宿やまなみすがし

感動している自分を認めることができる

(亜細亜大学 小川晃弘 24歳)

私はこの合宿への参加は自分自身を見つめなおすよい機会であったと思います。

私の中には「無神論者」的な信念があります。この合宿教室で話された方々のお話の奥に、精神論を越えた思想があったものがあるのではないかと感じたこともありました。しかし一方で、短歌の創作や長内先生のご講話の心のふるさとに楽しみを感じたり、誘われるように聞き入っている自分を発見することもありました。戦争も知らない、ましてや物流でうるおった社会の中で生まれ育った私に天皇陛下の有り難みを感じることができなくても、一つのこと感動する、また、感動している自分の存在を認めることはできるはずだと今まで思っておりましたが、あらためてこの合宿で深く考えることができたと思っています。

おやさしき七十七の師の顔に昭和の歴史かいま見るかな
遠ざかる阿蘇の山々かへり見てこの感動を忘れじと思ふ

この感動を大切に一層精進したい

(航空自衛隊航空教育隊生徒隊 村山寿彦 55歳)

台風で日程が大幅に変更された合宿ではありましたが、落ち着きのある充実した合宿になった気がします。今年には社会人班でも班長が班員と起居を共にしたことにより、緊密な交わりを持つことができた様に思います。

班付に松吉基順先生、フリーの班付として白井 傳先生に御助言を戴き、大変に恵まれた状況の中で充実した班別研修が出来ました。日がたつにつれて班員の心が次第に開かれてゆく様子が感じられ、有り難く思いました。

今年も又、新たな多くの胸の熱くなる様な思いを体験致しました。この感動を大切に、今後一層の精進に努めたいと思います。

第三十二班―社会人―

文化伝統の継続を

(山口県玖珂郡周東町立周北小学校 橋本明英 23歳)

皇室伝統を戴く日本は、歴代の天皇陛下や聖徳太子さまといった方々や、無数の有志により是を御護りして来た。その文化伝統を受け継ぐといふことほど、むづかしく、勇気のいる事はないと思つた。

合宿中発熱

思はざる病となりしを気づかひて見舞ふ友ありうれしく思ひぬ

熱く語れる人になりたい

(日本植生園 瀧口善樹 27歳)

今回の合宿に参加して一番よかったことは、班友と仕事や日常生活、更には今の日本に関して様々な話ができ、又話が聞けたということです。

私は、今回お話して下った人々のように、熱く語れる人になりたい。そのためには、しっかりとした腹づもりをして、たとえ知識は足りなくても、その事に対する情熱だけは誰にも負けないという気持ちを持ちたいと思います。また、今感じていることを心にとどめておくだけでなく、必ず、行動に移し、実践してゆきたいと思います。

火の国で班友とくさぐさ語り合ひ心充たされ今帰らんとす

国のいのちにつながるっている実感

(熊本県教育委員会 丸山伸治 30歳)

七年ぶりの合宿参加でした。その間様々な本を読みましたが、心を充たしてくれるものは実に少なく、最後は「国文研叢書」を取り出して読み返すことがしばしばでした。

さて、この合宿で改めて実感されたのは、自分が知らないところで祖先の作りあげてきた「日本の国のいのち」につながっているということです。普段、職場でもフワフワして確

信の持てない生活を送っている自分ではありますが、恩師や友の導きでこの合宿に参加して、「国のいのち」につながる機縁を得て、そこから大きな勇気を与えられたような気がします。自分が「根なし草」にならない為にも今後の研鑽を積んで行きたいと思えます。

長内先生の御講話をお聞きして

師の君は声高らかに故郷のなつかしき歌うたひたまへり

諭すこと叱らるること語らるる師の御言葉の胸に迫り来

すずやかな眼を持つことぞ肝要とのらせ給へる御言葉美し

声なき声で「師道」を示された

(熊本県葦北郡芦北町立丸米小学校 黄田誠一 30歳)

田舎の小学校教員として、次代を担うべき子供達に真に教育すべき事は何かを求めて、昨年は七年ぶりに厚木合宿に参加したが、今年はそれを確認する為に参加した。問いがあるから、答えとなるものは容易にくみとれ、反省すべき点もはっきりした合宿となった。即ち、「真に感動できる心を持つ人」「友、家族、ふるさとを真に愛し、日本人であることに素直な喜びを感じる人」に、これが子どもたちに見えるテーマである。裏を返せば、これらを身につけた人間になるように、自身が研鑽し努力しなければならないということだ。

長内先生が子どもたちの心を本当に大事にしてくださるお姿にただただ頭が下がり、それは声なき声で「師道」を私に

示されているように感じられた。その先生にお会いできるだけで胸いっぱいになった。

長内先生

教へ子に授け下さる御歌に聞き入る生徒らの瞳輝く

「先生に届けて下さい」と頼まれし二週の間持て我は来にけり

御講話の中で生徒らの文読まる師の御姿に頭たれたり

村松先生の講演に感銘を受けた

(尚絅高校 山辺尚幸 40歳)

今回の合宿は二十一年振りの参加でした。前回の時も村松先生の講演を聞きました。先生の時流を直視された講演には感銘を受けるとともに物事を洞察される態度に学ぶ所が多かったと思います。

また違った職場で活躍されています講師、班員のお話を聞まして、まだまだやらねばならないことが多いように思いました。

一人一人が本物になろう

(新日本製鐵(株) 今林賢郁 49歳)

雑念を払って話を聞き、語った数日間でした。毎年参加しながら、毎年新しい事を学びます。これは有り難く、感動でもあります。国の乱れを正すのは思想ではない。一人一人が自信ある日本人となること、あるいは、その事を自覚することではないでせうか。一人一人が本物になることです。今年も

又、その事を強く感じさせられたことでした。

全体感想発表

若きらが心そのままに語りゆく言葉よしもうちつけにして
若きらのこの言葉素直なる心を信じて営み続けむ

第三十三班 | 社会人 |

全体感想発表での思いを大切にしたい

(日植緑地(株) 山本典生 24歳)

最初は、気の重い何とも言いがたい気持ちで一杯でした。しかし、講師の熱のこもった講演と、班別での研修を重ねるたびに、次第に、自分に足りない物が見えてきて、何とかしなければと、焦りの気持ちに変わってきました。

足りない物とは、知識の不足と、討論の場で、自分の素直な思いを出せないという事でした。素直な気持ちで思いを述べるには、ある程度の知識も必要となり、それが今からでも勉強するには遅くないとのアドバイスも頂きました。そして、最終日に行われた感想発表の場で、発表した人に共感したあの思いを、いつまでも大切にし、これからの人生において、苦しい場面に出くわした時にも思い出し、乗り越えていきたいと思えます。本当に有り難うございました。

目標が見えぬ自分にあせり出し答えを出せしは最後になりて
答へ出しこれから始まる我が試練先を目指して前進あるのみ

夕べの集ひにて

学生の熱のこもった歌声は聞きいる者の心打つかな

新しい価値観を探し出さねばならない

(熊本県立第二高校 今村武人 29歳)

今回初めて参加させていただいたわけだが、今までに出席したセミナーの中で最も我が意を得るものがあった様に思われる。私は高校の教師をしているが、教科書をみていると、西欧の近代における一部の勢力によって意義づけられた精神(所謂「近代精神」)が、人類が目指していた最高の思想であるかのごとくとられ、ほかのものの見方、考え方には一切触れようとはしない。従って生徒たちは、日本のあり方について、何の疑問も関心も示さなくなってきたりして、ひいては自分自身の生き方について考えようとはしなくなってきたり。世の中には、「絶対」という考え方はなく、色々な考え方を検討してみても、これが真理だというものを信じて、生きていくものなのである。しかし残念ながら、戦後の教育は一つの定義を「正義」として行われてきたのである。しかもそこには人の魂は何もない。我々は新しい価値観を探し出さねばならない。

自分を見つめる時間を得た

(日本植生園 八幡 徹 32歳)

今回、合宿に参加させて頂き感謝しています。普通では話

できない職業の方々と、心を開いて語り合うことができたことは、大変有意義でした。毎日仕事に追われて、自分を見つめる時間があまりなく、この規則正しい集団生活で得たものは、私のこれからの人生にとって大切なものになると思います。

また来たいっらき思ひせし夏合宿この思ひ出を忘るべからず

もっと素直に心が開けるようになりたい

(福岡県立福岡中央高校 末松徳昭 34歳)

私はこの合宿に、今の学校で生徒たちに何を教えたよいかを見つめる為に参加しました。しかし、それは私の『思い上がり』でしかありませんでした。班別討論で、私のこのような『傲慢』な姿勢を見抜かれ、又、学生たちの純粹な発言を聞き、更に加納先生、長内先生の講義を聞いて行く中で、私にとって最も欠けるものが何であったかに気付いた様に思います。

班別研修で、班長から「生徒は教師の心の鏡だ」と言われましたが、正しくその通りで、先生の心が物事を素直にとらえることが出来、感激することが出来れば、必ずそれは生徒に伝わると思います。全体感想発表では学生達の心のこもった話に、うなずき、涙も湧いてきました。が、終わった後は、本当にさわやかな気持ちになりました。ただ、私も登壇したかったのですが、恥ずかしさがありできなかったのが残念です。もっと素直に心が開けるようになりたいと思います。

最終日の朝の集ひにて

前に立ち体操指揮する青年の号令の声に自信みなぎる

「全体感想自由発表」聞きながら

素直なる学生達の発表に吾もうなづき心なごまん

我が思ひ次第に大きくなりぬれど気迫に押され二の足をふむ
前に出て感涙にむせぶ女学生にがんばれがなれと声援送る

二十年振りの体験

(懶電通 石原知夫 43歳)

台風の為、ホテルに着いたのが、日曜日の午前一時半頃であつた。出足からして心に残つた。講義を聞いたり、討論したり、二十数年振りの体験であつた。印象に残る貴重な体験をさせて頂き感謝しています。

台風にそむきて宿に来てみれば阿蘇の山並静かに眠れり

中岳の煙の如くふつと仕事の意欲わきあがれかし

学生の真摯な意見の発表に二十歳の頃の我との差を知る

素直な心に、こころうたれた

(日産自動車懶 古川 修 48歳)

『全体感想発表』を聞きながら、涙をためて語る学生諸兄弟の、素直な心に、こころうたれました。

若い人達は、実に素直な、のびやかな心を持っていることに改めて気付かされました。私自身も、心洗われる思いで、合宿の最後を迎えました。

名古屋から台風の中、深夜にかけつけてくれた石原さんの

熱意をはじめ、班のメンバーの熱心な取組に、心から感謝しております。

この合宿で得た、「さわやかな心」を大切にして、明日から又、頑張っていきたい。

合宿のくさぐさのこと思ひ出され四泊五日のなつかしきかな

静かなる阿蘇の山々美しく終はりの式を迎へんとす

新たなる力湧き出で明日よりは進みてゆかん友らと共に

第三十四班—社会人—

日本人の心を教えられた

(亜細亜学園 中村正和 23歳)

班別研修では講義の印象に残つた事を中心に国際情勢などいろ／＼と討論をしました。私自身、班員の話を書くことすべてが勉強になると同時に、自分の無知を改めて実感しました。また今回初めて短歌を創作し、歌を作る喜びと、相互批評をすることによって短歌を味わう楽しさを得ることができました。

最後に私自身この合宿で一番感じたことは、二十三年間生きてきて初めて日本人の心を教えられた気がします。また私を含め今の若者は日本人の心と歴史を知らない過ぎるのではないかと思いました。「日本人の心と歴史を知らずして日本の将来はありえない」得たものは大きいです。

演壇で真心語る若人を我聞きほれて涙おほゆる

先人の意思を引き継ぐ

(日本植生(株) 林正二郎 29歳)

心に残っている事は、伝統とは先人の意思を引き継ぎ、それを将来自分の子らに託す事を感じました。最後の感想発表の時、対馬の白井先生が出てこられて「自分はいっ外国が攻め込んで来てでもいいように、軍服は常に洗って保管しています。事が起きたら一番に駆けつけます」と軍帽を見せて頂いた時、私自身涙が出る思いがしました。そういう祖国日本を守り続けておられる方々がおられてこそ、今の自分が存在しているのだと思います。その気持ち私を引き継いで、今度は自分の子らに託す事が、私の使命であると思いました。

日の本の未来を憂ひてここに立つ先人の意志今こそあらたに

生きることの意味

(出光興産(株) 広島秀明 34歳)

現在の日本人にとって生きることの意味とは何なのか。

毎日おいしい物を食べ、いろいろのことになったりお金を使う。そんなことだろうか。しかし豊かさを実感できない。

今回の合宿教室に参加して私の得た結論は、豊かさが実感できるか否かは、一人一人の心の中にあるということである。その心をみがくことを忘れてるのが現代の日本人である。

私は、自分の心をみがぐためには、一日一日の生活を大切にしていきたい。一日が大切に出来ない人間がどうして自分の人生を大切に出来るようか。そして毎日を大切に生きる事、それが生きることの意味ではないだろうか。

長内先生の御講義をお聞きして

すずやかなまなごをもてとおしへられかざらずに生きむところにかかふ

熊本にて

ひやけたおとめのことはひのくにのおくになまりはやさしくきこゆ

相手の話を聞くこと

(宮崎神宮 原健一郎 35歳)

教室への参加は数年前以来二度目であります。今回の私のテーマは自分が話すことにより相手の話をしっかり聞いて理解するということでした。このことは自己主張の強い私にとって初めは苦痛でもありました。班別討論の折も自分の意見を言い過ぎ、これだから駄目なのだと、風呂の中で考えました。しかし、言いたい気持ちを少しづつでも抑えつつ静かに相手の話を聞いて理解しようとする、今度はその分だけ自分の意見も相手に通じているようでした。また相手の話に心澄まして聞き入ると言うことは、一方では自分を見つめなおすことでもありました。このことは、忘れないようにしたいと思います。

合宿教室へ向かふ

まだやまぬ雨にワイパー早めつつ高森峠ひとり越えゆく

国柄を守りいかむと語りたる友の言葉の胸に響けり

先人の苦勞と殉国の志を偲んだ

(株)幸田瓦店 幸田和男 45歳)

君が代を歌い国旗を仰ぎ見る素晴らしさは戦後生まれの人間にとっては得難いものでした。先人達の御苦勞と殉国の志を偲び、又これからどうしなければならぬかと考えさせられた合宿でした。優秀な講師に恵まれ、もの考え方、処し方に大変参考になった点多大です。しかし情感に訴え壇上で涙を流すような講師は、あまり適切とはいえないのではないのでしょうか。慰霊祭での海ゆかばは山々にこだまし、御国に尊い命を捧げられたすべての人々の霊をなぐさめたことでしょうか。又私も「一旦緩急あれば義勇公に奉じ」のつもりで、対馬の白井様と同様日々を過ごしております。家に居ります二人の息子達も将来是非参加させたいと考えています。

台風に行く手をはばまれ乗り換へて乗り継ぎて来し阿蘇の合宿

日本は大丈夫なり

(株)公正不動産 安東祐範 73歳)

「日本は大丈夫なり。かかる頼もしき若人がいる以上、今後続々と増えるだろうから」と感じた。

大阿蘇の麓に於ける国文研のつどい。村松先生を始め、国家先憂の大先輩諸賢の貴重な諸講話。政治は腐っていても、

かかる国際的先憂の士が居る限り、日本の前途に就いては懸念する必要なしと史料される次第。

日本の大方の大衆の現況は好ましからざるも、前記先憂の士の諸活動は漸時国民覚醒の方向に導くは必然。

咲きそろふもろの花飾りたる宿のあるじの心根ゆかし

国家と人生についてしみじみと考へた

(中島法律事務所 中島繁樹 46歳)

社会人班に所属して毎日の研鑽に専念できて、大変楽しかった。班員は全員率直に意見を述べ合った。互ひに気心も通じ合ふことができた。

自誇でも自虐でもいけないと言はれた平川祐弘先生の言葉には素直に納得できる。しかし中立的客観的な物の見方が究極的に成立し得るとは思へない。国にはその個性があり固有の利益がある。その立場から離れ去る事は不可能であらう。

個人の人生においても同様である。人はその立場を捨て去ることは困難であるし、滅私を強要することは決して正しくない。しかし人は自己の利益を放棄してでも他人に尽くすことがある。そしてそれが崇高であることも疑ひない。

今合宿はこのことをしみじみと考へさせてくれる合宿であった。

うちとけて友らと語り五日をば過ぐし来にけり時を覚えす

第三十五班―社会人―

市長の言葉に励まされて

（厚木教育委員会 飯島一雄 45歳）

厚木市の職員の研修として、初めて参加させていただきました。自分としては、人生いかにすべきかが見つからないので日頃、空しさを感じる事が時折ありました。

今回の研修の推薦を受け、正直戸惑いがありました。足立原市長からの「君達の人生における糧となる研修とするよ」との激励の言葉を聞いて、ここで何か体得できるような感じがし、戸惑いの中、期待半分になりました。

講義内容もよかったが、初対面の班員の方々と素直に討論しながらの四泊五日の宿泊研修は、今までにない有意義な研修でありました。これからの生きる道のキッカケが見つかったので、研修で得たものを振り返り、一つ一つの肉づけをして行きたいと思えます。

研修室にて

師をかみ礼に始まる研修よ気持ち一つで我をみかける

人生いかに生くべきかの指針を得た

（九州日植 阿部達生 37歳）

会社の研修と言うことで、最初国民文化研究会という名を

聞きました、一体どんな合宿になるのだろうかという不安がありました。講義を聞いていくうちに、今までの自分がありながらも、日本に関しての事、また、これからの日本はどのようなにしていかなければならないかというような事を真剣に考えていなかったことがはっきりわかり、反省しています。又、色々な講義を聴き感動することが多く、そして班別研修においては各人意見を出され、その議題について、色々な意見が出て、それを討議して学ぶことが沢山ありました。

この合宿で学んだことは、これからの人生に於いて、ただ単に生活していくのではなく、目的を持ち、いろんな事に関心を持って人生を送って行きたいと思えます。

閉会となりて

山々の緑あざやかに見ゆれども去りゆく今は心さみしき

御製が心の底までしみこんだ

（宗教法人 乃木神社 松吉宣和 53歳）

前回参加してから一年間、国文研での研修成果は、少しでも、実践することができたような気持ちです。

本年乃木將軍ご殉死八十周年を九月十三日に迎えます。明治天皇様の下で色々とお戦績を上げられ、その為に数多くの友を失い、わが子までも戦場で亡くされた。ご夫妻は戦死された家族の心の内を痛切に感じ、共にご殉死をされ、偕老同穴を全うされました。

明治天皇様の御製を日々拝誦させていただいている私です

が、前回あまりそれほど深く感じなかった天皇様の御製が心の底まで深くしみこみ、朝の集いでの全員での国旗掲揚、国歌斉唱ではじまる一日のスタートは、日本人として生まれてよかった。そして、国文研に入会させてもらってよかったと心深く感じました。

草千里にて

山すその草喰む牛の群れ近くゆけばゆるりと顔ふりむくる
赤牛にこわごわふれる幼児は牛ふりむくやおどろきはなる

短歌相互批評で人間関係も深まる

(九州日植(株) 森上潤二 19歳)

四泊五日の合宿研鑽を終えまして、講義はもとより、班別研修など、本当に真剣に取り組まれており、充実した合宿教室を終えることができました。

短歌創作では、四苦八苦しながらも、何とか書いたものの、短歌の形になっておらず、恥ずかしいかぎりでした。それを短歌相互批評の時間に、皆で「こうしたらもっとよくなりませよ」とアドバイスをしたり、その人がどんな思いで短歌を書かれたのかなど、お聞きし、短歌はもとより、人間関係そのものも、深めることができました。ありがとうございます。

曇り空友と別れる寂しさに胸熱くなり心悲しき

泣く虫の声を聞きつつ我が思ひ言葉にできずはがゆき己れ

和歌の修練を積みみたい

(安川情報システム(株) 松田 隆 36歳)

「苦あれば楽有り」というか初日に皆苦労して合宿に参加しただけあって、その結果は予想以上のものがあつたようです。「至誠天に通ず」黒上先生の御意志はみごとに受け継がれています。その根底には和歌の心が有ることを知りました。私にとって、和歌をどのように詠めばよいのかが勉強できたのは非常に幸せでありました。まだまだ頭で理解している程度で、心で詠むにはこれからの修練が必要なのは十分に感じています。この和歌の心こそがこれからの人生の指針となります。

今回は村松先生のお話を聴こうと合宿に参加した次第です。先生のお顔を拝すると、多少お疲れが残っているようにお見受けしましたが、これはお疲れではなく、国を憂うそのお顔だと拝察しました。

早朝に起こされ聞こゆる童謡の音色なつかしき父想ふ
演壇に立ちて語れる若人の姿にうたれ我も語りぬ

来年の再会が楽しみだ

(福岡県立新宮高校 小野吉宣 46歳)

今回は新しい経験として、社会人班長を加藤善之先生の助言を受けつつ、何とか全うすることができた。

短歌を創作し、班別相互批評をしたが、やはり自分はまだ

まだ素直にあるがままに対象と面と向ひあってゐない感じがした。加藤先生の自然を詠まれた作品、単なる情景描写でなく「トオキビ畑のたふれたる」を見れば、農家の人を思ひやられる歌となつてゐる。その心の及び方を学びたいと思つた。

今回は肩を傷めて思ふ様に動けず、元氣も出なかつたが、班員皆の参加意欲に大いに助けられ、班別討論をすすめる上で有り難かつた。縁の不思議さを思ひつつ交流を深めることができた。加藤先生が親身に肩の手当てをして下さつたことにお礼の申しやうもない。あの手当てを受けたからこそ、社会人班長としての責任を何とか果たしたのである。班員の皆さんに恵まれ、班付の先生にめぐまれ、ありがたづくめの合宿であつた。来年の再会が楽しみである。

裏山の木立の中ゆこの夏を惜しむがごとくせみしきりなく

第三十六班——社会人——

心を豊かにできる一つのおにぎり

(中村学園大学 古川紀子 22歳)

台風に見舞われ、途中の電車の中で五時間以上も一人待っている時は心細い思いでしたが、この思わぬ長い待ち時間の中にまだ読んでいなかった「ビルマの豎琴」を読みを始め最後まで読み終え、感動し涙しました。そして合宿への期待が益々高まりました。しかし最初の期待とは裏腹に、難しい

御講義についてゆけず、もどかしい気持ちになりました。しかし長内先生の御講義をお聞きし、心の大切さを学ばせて頂きました。私は現在、大学で食物と栄養に関する仕事に携わっておりますが、食物という物質のみを与えても人は豊かにならないのだなあと思いました。手のこんだお料理よりも、心を豊かにできる一つのおにぎりを作れるようになりたいとおもいました。

涙して声をつまらせ語る友の姿は私の心をうるほす

心に熱い壁をつくっていた

(御所浦中学校 山方富美子 27歳)

煩雑な日々を追われ、物事に興味や感銘を味わっても深く見つめ直すことなく、時間がすぎてゆく中で「考える」時間をつくらねばならないという危機感に迫られ、この合宿に参加しました。

御講義を聞いて、自分が様々な欲に埋もれ、素直さ謙虚さというものを随分失っていることを痛感しました。社会の中で人と接しているうちに、様々な思いが交錯し、自己が傷つけないよう、心に随分厚い壁を作っていたと感じました。また、言葉というものを大切にしなければならぬということも痛感しました。自己の気持ちをはっきりと表現することは、どんなに難しいか、そして、表現する言葉を知らずにいる自分が何とももどかしく感じました。

合宿の思ひを語る人々の言葉迫りつ胸をうつなり

班友の声を聞いて勇氣づけられた

(尚綱短期大学付属幼稚園 森下由美 27歳)

本当に充実した有意義な時間を過ごさせていただいたことに深く感謝します。いくつになっても違う形で悩みはあるもので、班友の声を聞き、勉強になり、勇氣づけられ、元気が出てきました。私自身、理論、理屈は分かっていますが、なかなか行動が伴わないことが多く、反省、後悔するのですが、一度きりの自分の人生、頑張ろう、やろうとする気持ちをおの研修で絶対に、と思いました。先生方のお話は、感慨深く、改めて自問自答させられ、やはりすごいなあ、というのが本音です。実際に体験して本当に良かったと思います。誰にも勧められる研修会だと思いません。

合宿の感想発表聞きをれば自然に涙があふれてくるなり

日本人の心に親近感を持てた

(筒中プラスチック工業㈱ 末永亜矢子 28歳)

私は世の中の事を知らない自分、また日本の国家のあり方に不安を覚え、勉強をしてみようと思ひ読書を始めたのがきっかけで、この会を知りました。歴史、宗教、思想を学んで分かったことは、人類はみな幸福を求め進化してきて、先人たちの意志を受け継ぎ、それを達成させるために自分が存在しているんだということです。また日本は神の国から始まり天皇家が日本国民の代表として日本の中心におられ、天皇陛下

下が日本国民の幸せをいつも願われ続けてきたということを知りました。この合宿で書物や和歌などにふれ、日本人の心を理解し、少しでも親近感を持ったということは非常に大きな収穫だったと思います。

おほきみの心を知りて合宿の歌を詠むべき時近づきぬ

自分を見つめなおすことができた

(尚綱短期大学事務局 下川真理子 21歳)

私は職場の研修として学校の職員としての義務を果たさねばという思いのもと、ここに臨んだわけですが、真剣に御講義して下さる先生方、熱く語り合う班員の方々との討論を重ねる度に合宿に対する気持ちが変わってきました。

今まで、友だちと接する時も何か一つ踏み込めず、肉親や姉妹にしか心を割って話しかけることができませんでした。そして今後、いろ／＼な物事に触れ、感動することができる自分になれたらどんなに素敵だろうと思うと共に、努力していきたいとおもいます。

班友と心開きて語り合ういつしか過ぎし楽しき日々よ

班友が私の考えを一生懸命聞いてくれた

(尚綱短期大学事務局 森本真理 20歳)

今回二回目の参加になります。こんどは、どんなにたない、そして未熟な私の考えでも、班の皆さんが一生懸命聞いてくれて助言をしてくれる。私は、その姿、光景が目と耳に

深く残り感動しました。これが今回の私の大きな感動です。うまく言葉には表現できませんが、ただただ班とは限らず皆さんに感謝の気持ちで一杯です。

夜の集ひにて

阿蘇の地に友らと集ひ語り合ひ忘れられぬはあふれる笑顔

心を尽くしてのお話に心から共感した

(尚綱高校 浅田千春 31歳)

先生方の御講義に関しては、感銘深いものがあり、心を尽くしてお話下さる内容に心から共感を覚えました。村松先生の講義では、国際情勢はもとより、世界における日本の位置、役割等を客観的に考えていく態度を学ばせて戴きました。一つのことを考え、実行していくに当たっては、幅広い視点に立って考えていくことが大切です。間近に国際問題を拝聴することによって改めて「動いている世界」について考えさせられました。

長内先生の御講義も、一生懸命私達に訴えかけておられる姿に心打たれる思いがしました。

慰霊祭祖先の御霊安らかにと頭を垂れて祈りを捧ぐ

班友に出会えたことが嬉しい

(榎千趣会 桐山澄子 28歳)

この合宿に参加して、自分の力で物を考え勉強している人や自分の心を深く見つめている人、人の話を自分の事を気づ

かい考えている人と班友として出会えた事をうれしく思います。

長内先生の「昨日の慰霊祭は十二夜でしたね。昭和天皇様が御不例となられてご覧になった月が九月の十三夜でした。くしくも今日は同じ十三夜だと思うと……」と言葉をつまらせられた時は、思わず涙が出てしまいました。昭和天皇をおしたいされる先生の深い御心が私の心に伝わって、ああそうだった。天皇陛下の大御心に私も生かされているのだ。昭和天皇様！という思いで心が一杯になりました。

昨日の慰霊祭では雲間より月見えたりと師はのたまひぬ

今宵は十三夜といふを曆にて知りてをりしと師はのたまひぬ

十三夜その夜の月は先帝の御床にありて見そなはせし月

合宿中に創作された「短歌詠草」

——しきしまのみち——

短歌創作について

この合宿教室では、例年、主催者を含めて参加者全員が、短歌を作ることにしてをります。これは、この合宿教室の大きな研修課題の一つであり、今年もまた、多くの短歌が創作されました。

短歌は、古来、私たちの祖先が「しきしまの道」と呼び、言葉の修練、延いては心の錬磨の道として、永く守り伝えて来た伝統ある詩歌ですが、現代においては、人々の日常生活には馴染みの薄いものとなり、殊に若い世代には、文学的趣味の一つとしてしか受け容れられなくなってしまうてをります。従って、この合宿に初めて参加する学生青年諸君にとって、短歌創作は全くの疑問であり、一種の負担でさへあるかに見受けられるのですが、合宿の行程を踏むにつれ自らの心の動きを言葉にする難しさ、真心の籠もった言葉の奥深い味はひを多少なりとも体験してゆく中で、次第にその意味が、把握されてくる様に思はれます。それに至る参加者の合宿課題の数々に取り組む努力は並々ならぬものがあるのですが、知識の集積や論理の整合に重きが置かれ、人間にとって最も根源的な心の問題を等閑に附して来た現代教育の束縛を自ら感知し、そこから一步でも二歩でも抜け出さうとする営みが、この短歌創作、そして、その後の参加者同士の相互批評によって集中的になされてゆきます。心の奥底に眠ってゐるまごころを呼び覚まし、人のまごころに鋭敏に感じる、素朴にして溢れる様な人間性を取り戻さうとする試みが細やかながらも実現されてゆくこの貴重な体験は、参加者全員にとって、まさしく、忘れ難い印象として心の奥深く刻み込まれるに違ひありません。

合宿三日目の午後、福岡県立須恵高等学校教諭、那須三元氏（国民文化研究会会員）よって、僅か一時間の短歌創作導入講義によって短歌を作る上での基本的なルールが指導され、その後の散策を経て夕刻には提出するといふ忙しい日程の中で生み出された短歌でありながら、作者の集中された内心の働きは、その言葉の端々に充分に表はされて

をり、強く惹かれるものが籠ってをります。提出時刻間近い夕食前の時間帯は、通路に行き交ふ人影も無く、合宿全体が厳肅な雰囲気に入れ、真実の言葉に真向かふ一人ひとりの張り詰めた心の動きが、肌に触れて感じられるやうでした。

提出された短歌は、その日の内に国民文化研究会の会員によって選歌が行はれ、翌日夕方に歌集となって全員に配布されました。そして、その歌集をもとに、日商岩井鱒、澤部壽孫氏（国民文化研究会理事）によって短歌創作全体に亘る講義が行はれ、短歌批評のポイントについて指導がなされた後、各々の班に別れて、班員同士の濃やかな相互批評が行はれることとなりました。ここでは、技巧の巧拙を論じ合ふのではなく、作者の心を忍びながら、その心に沿って、言葉を正しく客観化して行くといふ作業が、班員全員の知恵を集めて徹底的に行はれます。さうして互ひに友達の上に深く触れ合ふことによって、合宿生活において衣食を共にし、胸中を披瀝し合ってきた友情の結び付きが、ここにおいて一段と深まって行く事が確認されてゆくののです。かうした、短歌創作を通じて展開される日常生活は、誠に稀な精神生活の体験と参加者一人ひとりに、言ひ知れない、ほのぼのとした喜びをもたらすのみか、学問と友情との分かちがたいつながりをも、自づから、想起せしめるに至るのです。

ここに収録された数々の短歌は、その表現形式においては稚拙であるかもしれませんが、参加者各々の切実な情意の率直な表白であり、この合宿教室を通して現出された感応相称の世界の一大交響曲と言ってよいかと思はれます。これらの短歌の中に瑞々しい貴重な魂の輝きをお読み取り下さり、短歌本来の姿が顕現されつつあることの一端をお汲み取り下されば、と心から祈念する次第です。

短歌詠草 (しきしまのみち) 合宿第一回目の創作作品 (参加学生の第二回目の作品は感想文の末尾に収録)

第一班

大阪教育大教一 阿久根 健

恐れつつ大きな馬に近づいてたてがみを撫で
ホッと息つく

拓殖大外一 轟 崇大

台風でダイヤ乱れておほあわていつ着くのや
ら夏の合宿

金沢工業大工二 加藤 勲樹

うまかったきのふの肉を思ひ出し牛を見る目
も馬を見る目も

第一工業大工二 清水 健司

バスの中少し気になる女の子ああしゃべりた
いああしゃべりたい

早稲田大理工三 臼井 秀之

馬、その名は「クラモト」

この場所は私のものよと息荒く人を蹴ちらし
クラモトは行く

防衛大理工四 野口 泰志

それぞれと走る班友せきたててわらひもいつ

かおにのぎやうさう

明治大法一 吉野 裕介

御講義に感ずるところはありぬれどことばに

できぬこのはがゆさよ

大正文大文四 岡山 英一

那須先輩の御講義をお聴して

生徒らに「今日の指揮ぶりはよかった」と言

はれし先輩の嬉しさいかに

第二班

帝京大法一 秋山 直之

草千里にて

横たはる子馬のそばに添ひ寝してもろとも写

真にをさまる楽しも

東海大教養四 松本 敏浩

歩みゆけば草原の上に心地よく横になりたる

子馬見つけり

日本文理大工二 鐘 築 光昭

雲の間ゆ日射し差しきて湖の水面ひときは輝

きて見ゆ

福井工業大工三 鈴木 康之

壮大な阿蘇の山々見てをれば己が心のなんと

小さき

金沢大法二 伊丹 千雄

草千里広がる野原に我立てば曇りし心も開け

ゆくかな

長崎県立大経一 山下 真史

風強く阿蘇のみづうみ波立ちて射し来る陽光

てりはえて見ゆ

九州大工四 松岡 篤志

八月八日午後八時半合宿所到着

いらっしやいといと暖かく迎へます師の御姿

に疲れいやさる

国文研 中澤 榮二

草千里にて

寄り添ひていななきかはすオスメスの馬の姿

のほほゑましかな

第三班

明治大法一 秋元 学

草を食むのどけき牛の群ながめ和みゆきたる
吾が心かな

防衛大人社一 兵 庫 剛

人々が集ひたはむるる草千里再び立ちて懐か
しく思ふ

富山大工二 大 谷 利 宏

親子にて夏の草はむ馬を見て故郷に残した父
母を思ふ

福井工業大工二 杉 本 利 幸

草千里のどかな風に誘はれて歩みはかるやか
心をもどる

鹿児島大農三 椎 原 恒 介

班別討論の時、長内先生が来られて語ら
れるのを聞きて

若きらに伝ふべきこと伝へむとここに來たる
と師は言はれたり

福岡大経四 梅 崎 建 吉

草原のどこからかなく虫の音のやむこととな
く聞こえたりけり

国文研 大 島 伸 一

班友の語る言葉が次々と心の中にすっと入り

来る

呐々と語る友らの言の葉に何度も涙がにじみ
きたれり

第四班

中央大文三 草 野 直 樹

草千里の緑の丘の辺に立てる牛の姿の動くと
もなし

富山大理二 長 和 俊

夕暮れに雲のたなびく阿蘇の山つかれし心に
深くしみいる

宮崎産業経営大経一 岡 田 英 輔

我が思ひ伝ふる友の現はれし今日といふ日は
忘れがたしも

防衛大理工一 筒 井 茂 広

草原に戯れる親子の馬のたのしげに我もうれ
しくスケッチをする

法政大経営四 永 岡 昭 人

試合後の無言の涙忘れられず我が良き友とは
はやも年過ぎ

早稲田大教三 鈴 木 由 充

さざなみの寄する湖辺に栗色の牛の親子の水
にたはむる

佐賀大理工四 白 木 潤

高三の頃の担任の先生にお会ひして
思はずも高三の頃の師の君に声をかけられた
だ驚きぬ

もろともに合宿教室に参加しようと言ひし言
の葉我忘れめや

師の君の御顔仰げば湧き起こる熱き思ひに胸
ふたがるる

国文研 古 川 広 治

合宿導入講義で引用された「冷淡になつ
た字問」を読んで

生の声きくことえずとも活字より先生（小林
秀雄先生）のみ声きこゆる思ひす

第五班

福岡大経一 辛 島 英 生

草千里座りて眺むる光景にただ酔ひしれて何
処を見るか

鹿児島大農二 葉 榎 幸 輝

風そよぐ阿蘇の野原を仲間らとながむる心和
やかになりぬ

友だちと歌を詠まむと黙しけることの一瞬を
忘れまじと思ふ

あたたかき日を浴びながら仲間らと心やすめ

て野辺に佇む

産能短期大通信教育一 西島 司

阿蘇の山やうやうたなびく噴煙を眺めてゐると我を忘るる

グリーンマウンテン大中退 武原 満明

草千里牛馬を見ては思ひ出すニュージャーランドで暮らせし日々を

北九州大法四 倉光 正明

目を閉ぢて指折り数へペンを執る友を横目に我が手動かず

福井工業大工三 竹内 崇人

風求め阿蘇山走るバイク旅心あらはれすばらしき気持ち

国文研 三林 浩行

我が友は歌つくらむとかがみこみ言葉を紙にしるしたるかな

第六班

明治大政経一 永井 大裕

今少し居たしと思へど山を降る馬のぬくもり

まだ手に残し

大阪外国語大外三 福田 仁

阿蘇に今集ひ語らふ若人は胸の内熱し国を思ひて

拓殖大外一 成島 一之

阿蘇の野に広がる緑が都会にも有ればいいなと思ひたりけり

金沢大工四 松岡 重憲

丘に立ち彼方を見れば山々の峰より出づる大地の息吹き

福岡大経二 別府 正寛

緑なす山の陰よりもくと煙静かに湧き出づるなり

防衛大理工一 半田 弘希

高原の風に吹かれてゆったりと寝ころびをれば心安らぐ

国文研 與島 誠央

晴れ戻る夕空のもとひぐらしの鳴く音の聞こゆ遠く近くに

第七班

福井工業大工三 吉川 浩

草千里見わたすかぎり草色の原の続きて牛のほひす

宮崎産業経営大経一 岩切 保憲

緑なる阿蘇の山々ながむれば僕の心はさやかになる

明治大政経二 岡井 佐久磨

見渡せば広き草原行く馬のゆたりにと足を運べり

日本大文理一 田代 吉弘

こどもらはボール追ひかけ草原をせましとばかり走り回れり

熊本商科大経一 福本 信重

阿蘇五岳緑の深き山々を眺むる心のどかなりけり

法政大経四 明珍 儀隆

広大な草原の中に身を置きて自分の小ささを思ひけるかな

防衛大国際関係二 二宮 充史

草千里に寝るおぢさんも飛び起きぬ馬の「クラモト」のしのし歩けば

林よりひぐらしの声きこえて心落ちつけしはし聞き入る

国文研 吉川 理夫

第八班

拓殖大外一 宇栄原 滋

友と丘を登りきたれば阿蘇平野広がる見えて息をのむなり

亜細亜大経四 佐々木 栄幸

明治大法二 加藤 敦章

果てしなく緑の大地続くやうに思へて心愉快なりけり

友がきと丘に登りてながめたりいと美しき山の緑を

第十班

防衛大理工一 園田 和久

防衛大理工四 濱口 和久

防衛大理工一 守井 孝志

緑濃き阿蘇の山にて過ごしゆけば心身ともに清められけり

中岳の火口いづごと見渡せば白き煙りのたちまちのぼる

車降り青芝に立ちて眺むれば阿蘇の雄姿に迷ひも吹き飛ぶ

富山大経一 加治 丈彦

宮崎産業経営大経営一 矢田 研人

九州大法一 白島 亘

車窓から見あげた阿蘇山は雄大で大きな緑のプリンの如し

草原でともに草食む親子馬痛ましいのは焼き印なり

あざやかな山の緑に囲まれて友と語らふ時ぞ楽しき

海上保安大二 吉田 淳一

東北大理三 古閑 信彦

大正文四 堀岡 秀清

目の前に緑広がる草千里我が心にもひとひらの風

風そよぐ丘に登りて眺むれば白き煙の静かにかにがれり

微風の吹き流るるに雲移り我が身心のさはやかになりぬ

班別討論にて

九州大法一 石橋 功次

福井工業大工二 大久保 貴光

熊本商科大商一 喜多村 純

班友達ともと共に語りしひとときにさらに深まりし親しみの情

誘はれて小高き丘へ友たちと行けば涼しき風の吹くなり

大阿蘇の峰より白き雲わきてひぐらしの声聞こえくるなり

国文研 上村 栄章

九州国際大法経二 佐藤 公治

早稲田大社会科学二 高橋 秀和

さはやかなむしの音友と耳をすまししばし聞きつつ心いこふも

山並に己の道を映し出し行く行く先の糧となしたし

嬉しげに体験談を語るゝバスガイドさん見れば嬉しも

第九班

佐賀大教二 大葉勢 清英

バスにて草千里へ向ふ折

高原に立ちて草千里を見下せば空を飛びゆく心地するなり

佐賀大教二 大葉勢 清英

車窓より広ごる景色ながめつゝ友と来しこと思ひ起こしぬ

ゆったりと足を伸ばして湯に入れば西日に映ゆる大阿蘇の見ゆ

のどかなる阿蘇の大地に身をまかせ牛らのむれをよぎる雲影

かの友といくとせか前こゝに立ち夕映えの空をししばし見やりし

ゆったりと足を伸ばして湯に入れば西日に映ゆる大阿蘇の見ゆ

先生の昨夜の話しは良かったと教へ子笑ひ我に語りく

第十一班

亜細亜大経三 濱田雄一

ふと耳をすませば遠き林よりひぐらしの鳴く声のきこゆる

壮大に広がる阿蘇の山々を病で来れぬ友に見せし

金沢経済大経四 高嶋晃

牛たちにやすらぎ与ふる阿蘇山に深くやさしきおやじを思ふ

噴煙を遠く背にして黙々と馬の親子の草を食みたる

台風で列車動かず

光さし蟬さはげどもなほ行かぬ列車を待ちていらだつ我等

風が吹く自然の豊富な阿蘇火山心がやすらぐ雄大さかな

福井工業大工一 赤井寛章

岩肌に煙いでたる大阿蘇に男らしさを感じたりけり

我が思ひ託して短歌詠むことは思つたよりも難しきかな

福岡大法一 牧拓美

馬の子が親に隠れる姿見ておもはず笑みがこぼれることだよ

国文研 絹田洋一

夜、班室で中田先生を囲みて戸をあくれば思ひがけずも上半身裸になられし大人のいましぬ

いかならむといぶかりをりし我に師は笑まひ浮かべて声かけらるゝ

面白き身振り手振りを交へつゝ師はひたすらに語り給ひぬ

とめどなく思ふがまゝに語らるゝ師のお話にひきこまれゆく

討論の折にはかたき表情せし友のいかにも楽しげに見ゆ

何げなき言葉の中にも気づかひを働かせよと友に語らる

次々と他班の友も楽しげに笑顔うかべて集ひ来たりぬ

第十二班

亜細亜大法二 松田裕幸

のどかなる阿蘇の野辺にて見ゆるのは主のごとく歩む牛かな

木の間ゆも朝の日かげのとほり来て下草の上の露に光れり

防衛大管理四 森安宏徳

緑明ゆる大阿蘇山の牧の野の赤牛らつどひて草食みにけり

日本大国際関係一 沖田光

なつかしき故郷のバスで阿蘇案内知らず知らずに出る熊本弁

九州大文一 別府秀俊

とげとげしき葉の茂りたる濃き草ゆキリギリスの音ひそかに聞こゆ

後足なきキリギリスまた鳴けと待ちて居れるに鳴くこともなし

進みきてわが手の甲に乗りたるに身を向きかへて葉の上にもどる

東京大理三 村上純一

岩肌に根張り生ひたるあら草のひたむきな命に心打たるる

林にて汗をぬぐひてひぐらしの輪唱の中に我
身をまかせ

国文研 内海勝彦

風そよぐ駒立山に立ちをればひぐらしの声は
はるかに聞こゆ

ひぐらしの声にまじりて放牧の牛のなく声原
野にわたる

山の上に乙女らすわり睡まじくうたふ歌声き
よらにひびく

乙女らの歌ききをれば我もまた心なごみて口
ずさみけり

第十三班

海上保安大二岩永 洋

雄大な阿蘇の緑にふみこんで言葉も出さずま
はり見わたす

金沢工業大工四平野 賢

台風の為動かない新幹線の中で

いつ出るか分からぬ電車の中でも座席合は
せて友と語らふ

早稲田大政経二田中裕一

佐久間艇長を思ふ

己が努め果して死せし益良雄の心の姿如何に
知るべき

防衛大理工一中村隆洋

青い空大草原に馬走りかすかにはほふ大地の
香

奈良県立商科大商一岩瀬幸広

草千里馬と向ひし我は知る恐れの感のうすれ
てゆくを

東和大経営工二善本隆之

草千里その絶景を見つめると心も広くなりゆ
くごとし

福岡大人文一岡田聡

高台に登りて眺むる草原の牛馬の動きしづか
に見ゆる

京都産業大理三濱地賢太郎

合宿の事前準備に向ひて

合宿へ行く朝心が高まりて我いつもより早く
目覚めし

第二十一班

早稲田大政経二 伊 藤 華 惠

佐久間艦長の遺言を読んで

死を前に務め果たせし先人の姿学びて心ふるへる

武蔵野女子大文一 今 林 容 子

輪になりて思ふ心を語り合ふ友を得たこと嬉しく思ふ

尚綱短期大家政二 藁 田 恵利香

さはやかな草千里から風そよぎ馬の親子は野を駆けめぐる

九州造形短期大デザイン一 木 村 祥 子

母馬の腹にすりよる小さき子馬親子の愛は馬とて同じ

上智大比較文化一 東 中 野 顕 子

草千里に行つて

風ふけば波打つ湖背中にし美しき友と写真写

さん

福岡女学院大文一 宮 崎 静 江

雄大な草千里のまん中でちっばけな自分が風にふかれる

明治大政経二 片 山 明 子

友とはなれ小波打ち寄する湖の岸辺歩けば虫

すだくかも

み友らと今かいまかと待ちをればつひに見えたり白き噴煙

第二十二班

尚綱短期大家政一 新 蘭 美 佳

草千里見渡すかぎり雄大な自然を前に心がなごむ

西南学院大文一 石 松 祐 子

次々と言葉とび交ふ部屋の中楽しく過ごす夜のひととき

草千里夏の光につつまれて一面広がる緑のじゅうたん

中村学園大家政二 原 田 里 香

雄大な阿蘇の高原に耳すませ友と聞きたり自然の声を

もくもくと静かにあがる中岳のかすかに見ゆる赤きけむりの

大谷大短期大学部国文二 橋 本 美 枝

友人と草原の上に腰を下しひぐらしの声じつと聞き入る

拓殖大外二 小 谷 典 子

どきどきと緊張しつつ参加せし合宿の日々に実り多し

新しい良い友人が増えし今長旅のかひありしと感ず

尚綱大文二 鈴 木 美 和

大阿蘇の懐深し我一人これからの夢思ひめぐらす

福岡女学院大文三 守 谷 明 香

幼き日の思ひあらたにピルマの堅琴世界の日本の思はゆ

熊本大文三 延 塚 恭 子

阿蘇の噴煙を目のあたりにして

芝生の^へ上座りて見れば火口より白き煙のもりあがりけり

白煙^{しづむり}やがて大きく広がりがりて山の^へ上の空おほひ尽くせり

白煙ほんのり赤く色づきて火口にもやひていと熱げに見ゆ

第二十三班

福岡女学院大文一 青 木 与 志 子

風吹けば草の香りと涼しさが我がほほすべり青空に舞ふ

拓殖大外二 荻 田 亜 紀 子

優しい目の牛にあれども目が合へば我こはくして心落ちつかず

中村学園大児童二 松隈 香代子
見渡せば大きく広がる山々のやうな心を常に
持ちたし

熊本短期大社会一 馬 締 由希子
湖の淵を一緒に親子馬なんと大きな自然を背
にして

目白女子短期大国語国文一 村松 美 紀
母馬の後追ふ子馬みつめて思はずこぼるる
友のはほゑみ

日本経済短期大経営一 稲津 里 美
黄緑の草千里の中馬や牛の遊ぶしぐさは見て
て楽しい

尚綱大文四 白 杵 直 子
たちのぼる白き噴煙背に映し乙女の心も空へ
と仰ぎぬ

真青なる空に飛びかふひばりらに浮きたつ我
らの聲も澄みけり

第二十四班

拓殖大外二 田 中 藍 子
真青に広がる空に染まりゆくけむりを目にし
て自然を感じる

淑徳大社会福祉四 西 島 千 尋
馬の背をなづる少年たのしげに逃ぐる私のな

さけなきこと

福岡女学院大文一 庄 司 愛
子馬つれ歩く母馬目にうつり張りつめし心し
ばしなぐさむ

九州大法二 有 馬 陽 子
風の吹く草原くさばらの中子供らのはしやぎたる声き
こえくるかも

風の中ボール投げあふ子供らの姿に我の心も
はづむ

福岡大文三 進 藤 裕 子
草千里にて
みどりなる大地踏みしめ友どちと風に吹かれ
し時ののどけき

やはらかに耳に届きしひぐらしの声さはやか
に心なごみぬ

みどり濃き丘に登れば真白なる雲かと見まが
ふ噴煙あがりぬ

明治学院大文三 石 川 旬 里 子
明治学院大文三 石 川 旬 里 子
広々と緑色なる阿蘇岳は初めて来るのになぜ
かなつかしい

国文研 清 水 久 仁 子
空高く緑広がる高原に遊ぶ牛馬うしうま幸せに見ゆ
馬なでてやさしく話しかけたればいつしかこ

はさなくなりけり
友どちと空澄みわたる高原で写真をとるはう

れしかりけり

拓殖大外四 岩 野 恭 子
なだらかな薄黄緑の草千里やさしき様のすが
やかにして

第二十五班

立正大仏教一 村 山 智 子
丘登り周り一面見渡せば広がる野原に心も開
ける

佐賀女子短期大初等教育二 大 岩 幸 子
牛馬も雄大な阿蘇にはぐくまれこんなに大き
く伸びくしてゐる

九州女子大文一 松 尾 尚 美
ありのままの自分をさらし語り合ふわず
にあれこの喜びを

早稲田大社会科学二 中 島 淳 子
切々と涙浮かべつつ語る友にかくる言の葉な
きぞもどかし

京都外国語大外四 新 谷 幸 恵
窓の外をふとながむれば眼前に広がりがたり
山の緑の

福岡女学院大文三 西 本 亮 子
噴煙の雲となりゆき漂々とわれらをまもり流
れゆきたり

鹿兒島大農三 古川 小由里

風の音に耳をすませば立ちむかふ山ゆきこゆるひぐらしの声

胸内に今まで秘めし悲しみを眼うるませ友は語りぬ

第二十六班

国文研 橋本 加枝

新しく出会ひし友と草千里に語りひすごしぬ時を忘れて

福岡大業三 坂本 貴子

たはむるる馬の親子をながめてまはりの人々目にはひらざり

熊本大文三 有田 ゆき

牛も馬も人も景色に溶け込みて眼下によこたふ草千里かな

熊本商科大商一 前 中 典 子

さはやかな風に吹かれて草千里無垢な心に笑みがこぼれる

湘北短期大生活科学一 出野 晶 子

思ふこと包み隠さずありのまま話せることなのなんとうれしき

佐賀女子短期大児童教育一 田 苗 安希子

心から語れる友を見つたり我助けられ我も

助ける

九州女子大文一 林 麗 子

草千里大地の広さに感動す時間が一瞬止まつたやうだ

拓殖大外一 小島 真美

頂点にそよふく風を感じとりしらじら昇る噴煙を見る

第三十一班

小馬谷 秀 吉

今年もまた老騙ひっさげ若きらと阿蘇の麓に学びてうれし

噴煙をむくむくとあぐる火の山のあの勢ひのわれにもほしき

厚木市役所 清水 春敏

いういうと道路を渡る牛馬にあきらめ顔の運転手たち

日本植生働 貞 森 健

のんびりと牛馬たちがすごしゆく緑の草野我も遊ばん

亜細亜大学 小川 晃 弘

風そよぐ阿蘇のふもとに憩ひては緑のにはひなつかしきかな

国文研 村山 寿彦

草千里草原わたりゆく風の汗ばむ肌心地よく吹く

草千里かなたに連なる中岳ゆ白きけむりの湧き上る見ゆ

く吹く

草千里かなたに連なる中岳ゆ白きけむりの湧き上る見ゆ

第三十二班

周東町立周北小学校 橋本 明 英

阿蘇山に朝日と共に蝸ひよこしは今日のおとづれ囁くらしも

日本植生働 瀧 口 善樹

あをおくさに腰をおろして空を見あげる楽しからずや時間を忘れてむ

国文研 蓑 田 誠 一

さやさやと千里が浜の風に乗りに赤とんぼ飛び交へり初秋の気配す

熊本県教育庁 丸山 伸治

延着に留め置かれし班友の長旅の労切に偲ばる

国文研 今 林 賢 郁

いとまなき日々の中にくさぐさの心くだきて努めし友はも

その友の心に応へて呼びかひつ励みし友のことも偲ばゆ

折田、白浜兄へ

やうやうにあまたの友らをちこちゆ阿蘇国原
に集ひきたりぬ
ひたぶるの友らの心甲斐ありて宮む集ひかし
こしと思ふ

第三十三班

日本植生(株) 八幡 徹

草千里風がそよそよ心なごむ台風一過はるか
かなたへ

(株)電通 石原 知夫

中岳の吹き出す蒸気は白々と雲にまぎれて消
えてゆくかも

福岡県立福岡中央高校 末松 徳昭

わきあがる阿蘇の噴煙ながむればそのいきほ
ひにしばしおどろく

日植緑地(株) 山本 典生

雄大な阿蘇の山々を見わたせば緑の多く心落
着く

国文研 古川 修

笑みたたへ声はづませて語りゆくバスのガイ
ドの顔輝きぬ

ギザギザにそびえ立ちたる根子岳は佛の姿に
似たるとぞ言ふ

美しく盛り上りたる米塚の二つに分けたる山

道の見ゆ
カルデラに水をたゝへし草千里あまたの牛の
休み居りたり

熊本県立第二高校 今村 武人

歴史見る人の心のあり方は我身一つのもの
かは知る

第三十四班

亜細亜学園 中村 正和

馬にのる子供の笑顔ながむれば忙しき日々し
ばし忘るる

日本植生(株) 林 正二郎

風呂上がりひぐらしの声聞きながらひねる短
歌のなんとむづかし

(株)公正不動産 安東 裕範

草千里噴煙あがる山脈の緑目に沁む八月の阿
蘇

(株)幸田瓦店 幸田 和男

大阿蘇の緑に抱かれ我しのぶ先の戦さに倒れ
し人を

草千里友と来たりて語らひぬ噴煙のぼる中岳
のもと

宮崎神宮 原 賢二郎

国文研 広島 秀明
草千里高原の風さはやかに夏の暑さをしばし
忘れぬ

国文研 中島 繁樹

広ごれる阿蘇の野原のをちこちに牛は佇み草
を食みをり

第三十五班

安川情報システム(株) 松田 隆

親子馬そろひて水を飲む姿その美しさにまさ
るものなし

九州日植(株) 森上 潤二

湖にとんぼ飛びたるその姿秋漂はすその眺め
かな

厚木市教育委員会 飯島 一雄

父を呼ぶ喜びな子を見るにつけ我が子と共に
阿蘇にと思ふ

国文研 松吉 宣和

山すその草原深き牛の群我よりゆけば顔ふり
むけり

九州日植(株) 阿部 達生

雄大な阿蘇草千里眺めては心ぞなごみ我振り
かへる

国文研 小野 吉 宣

きこと知る

開会式の 小田村理事長の挨拶をききて

尚綱短期大学附属幼稚園 森 下 由 美

師の君の祖国日本に寄せらるるあつき思ひに
導かれ来ぬ

阿蘇の里仲間集ひしピラパーク今宵語りて眠
むる間もなし

いたらざる我が身むち打ちすめぐにを守るま
さみち拓きゆきなむ

合宿で恩師の話聞きながら今亡き祖父の姿浮
かびぬ

第三十六班

中村学園大学 古 川 紀 子

尚綱短期大学事務局 森 本 真 理

草原くさほに子らをのせてゆく馬の雲を眺むる目の
愛らしき

さはやかな草千里の風あびながら班員と歩く
一時楽し

尚綱短期大学事務局 下 川 真 理子

雄大な阿蘇の自然をながめつつ心目覚むる人
のおろかさ

灼熱の戦地の野宮偲びつつビルマの海から故
郷思ふ

御所浦町立御所浦中学校 山 方 富 美子

中岳の白きけむりのもくもくと生きづく姿
雄々しかりけり

国文研 桐 山 澄 子

一面に広がりわたる草原におのが心もはれば
れとなり

筒中プラスチック工業㈱ 末 永 亜 矢子

班友と阿蘇の散策楽しみて合宿の疲れふきと
びにけり

草千里馬の親子をながめつつ親子のきづな深

事務局

山崎高一年 稲津利昭

青々と高く広がる阿蘇の山ふもとにそよぐ涼しげな風

筑紫丘高二年 廣田貴之

「週プロ」を求めて行ったニコニコドーしかし買へない台風の中

※週プロ……「週刊プロレス」

筑紫丘高二年 坂田裕之

牛の群れ馬の群れを見わたして丘の上から一人で帰る

筑紫丘高二年 豊田雄啓

情熱を強めたぎらせはると出現したる若者二百

春日高二年 田島光晴

幾年も変らぬ歩み繰り返す今日も子馬が大地を駆ける

春日高二年 戸渡卓司

阿蘇の空雲一つなく澄み渡り噴煙だけが漂ってぬる

写真班

今泉一彦

噴煙の真白湧く山見^{はる}遙かす老いも若きも面耀ぎて

(二回目的作品)

草の丘登りてまろぶ乙女らの弾けしことば澄みわたるかも

国民文化研究会

国民文化研究会理事長 小田村寅二郎

合宿第一日(八月八日)台風十号に際会して

吹き荒るる嵐の音はすさまじくすべての交通路は遮断せりとふ

さはあれど夜更くるまでに集み来し友らの数の増しゆくがうれし

先き逝きし友らのみたまのみ守りを現^{うつ}しく感じぬこの開会に

(柳宝辺商店代表取締役 寶邊正久

子を連れて馬が草喰む丘の上風を涼しと子ら声あげぬ

幾年をへだててけふを若きらと草千里ゆく風に吹かれつつ

嵐去りていよいよ青き草山に真日照るけふをうれしと思ふ

(二回目的作品)

「閉会式」の前

雀子のとまりて揺るる杉の枝に風もそよぎて涼しかりけり

雨風の吹きやまずして開会を迎へしその日を思ひ返しつ

庭に立つこの大杉の風に焼み枝葉揺れにし夕^{ゆうべ}なりしか

雨風ををかしてその夜次の昼つぎて集みき若き友らは

国のいのちほろびぬしるしと若きらのさやけきふるまひいまわが胸に

九州造形短期大学教授 小柳陽太郎

合宿地に台風襲来
テレビ画面の台風の針路刻々に北上するを息つめて見つ

台風の圏内に今入りつらむ雲低くして矢のごとく行く

雨足はいよいよはげしく天地をとどろかしつつ風吹きすすぐる

台風はすぎ去りぬらむしづけきに遠ひぐらしの声のきこゆる

ひとしほになつかしきかな嵐の中をはろばる

と来し友のおもわは

(二回目)の作品

『VOICE』の広告を見て二十秒で参加を決めしと

いふ阿久根健君(大阪教育大二年)と語る

広告を見るや忽ち合宿参加を決めたりといふ心すがしく

かねてより心の先輩を求めきしといふ若き心のたかぶりやよし

「機」を求めて旅行きし若き松陰をふと思ひ出づ君がことばに

ためらはず来てうれしくも数々の友に会ひえしとよろこび語る

君と今ここに会ひえて語りあふ不可思議のえにし思はざらめや

今の世にたぐひ稀なる青年の躍る心にふれしうれしき

元福岡教育大学教授 山田輝彦

白井傳先生よりみうたをいたく

老いてなほ泉のごとく湧きいづるこのうたごころいづくより来し

潮騒の対馬の島辺ひたごころ持ちて生きます新防人は

うつそ身の生きのいのちのおのづからゆらぎ出でしかこれのみうたは

(二回目的の作品)

川井修治さんの参加を喜ぶ

くさぐさのこののありしがこの十とせ忘れ得

ざりき君が身の上

高らかに七高寮歌うたひゐる君がゑまひを見ればうれしも

「全体感想自由発表」

壇上に泣きつつ己が感動を語るをとめに涙すわれも

国民文化研究会事務局長 長内俊平

ひぐらしの鳴く音と共にしづかにも阿蘇の国原しらみゆくかな

朝日かげ杉の秀むらゆさし出づる朝中岳に煙はくみゆ

八木秀次君の導入講義をききて

いかにぞと待ちゐし君の壇上にいまのぼりゆく姿に見入る

いくばくかたかぶりをるらしきこえくる声はつねよりかん高くして

十二枚の講義資料をつぎつぎに要をつきつつ君は説きゆく

尊きものなほざりにしてかへりみぬ世の風潮をいかにぞと君は

学問とは人の道なりととき給ふ小林先生の言に泣きしと言ふかも

尊きにふれてしうごく感動を信ぜよと説きて

終りき君は

日夜なく忙しきなかかくばかり学びし友を誇と思ふ

君壇上ゆ去りたるのちもしばらくは声のひび

きの耳にのこれり

(二回目的の作品)

かにかくに合宿終りぬ集ひ来しあまたの友に感動残して

いかにならむいかにやならむと危ぶみしその日の思ひもいまははるけし

みたままつりいとなむ庭にすだきぬし虫のな

く音と夕月のかげ

神々のまもりによりてつづきゆくいとなみとしみじみに思ふかしこまざらめや

この宿に来てはやも七日経つ思へばはるけき昔の如し

語り合ひむつみ交せしみ友らとまた手を取りてつとめゆきなむ

いまはとて別れかゆかむ阿蘇嶺のねぼとけの姿したはしきかも

尚綱学園常務理事 徳永正巳

嵐去りて阿蘇の山脈しるけくも姿あらはし美しきかな

杵島岳の麓の宿に集ひ来し若き友等と語らふぞ楽し

八木秀次君の導入講義を聞きて

用意せしレジメを追ひてほとばしる熱き言の
葉胸にせまれり

集まれる若き友等に呼びかくる君の念ひの伝
はらざらめや

(二回目の作品)

集ひきし若人多数悦びて四泊五日を学び居る
かな

年若き指導者の下素晴らしき阿蘇合宿を終る
よろこび

志引き継ぐ友のこゝだにも生れ出づるを嬉し
とぞ思ふ

友等皆かなしき生命積み重ね大和心を護り行
くらくらむ

千代田コンサルタント(株)専務取締役

上村 和男

出張先より合宿地へ向ふ

台風の上陸せむとのニュース聞き合宿いかに
と心みだるる

台風の九州上陸なきことを祈りつつわれ駅に
向ひぬ

(二回目の作品)

合宿の二回目的朝

台風のすぎしあしたの外輪山はみどりにはえ
て美しく見ゆ

日の丸を仰ぐ朝あしたのすがすがしあまた若きら集
ひ来たれば

平川祐弘先生を熊本空港に到来至誠兄と共に出迎ふ

人ごみにまみえしことなき師の君を出迎ひぬ
友人と二人で

なかなか降りて来ませぬ師の君をこまちし
ついまいまかと

師の君は蝶ネクタイに鞆もち友の名呼びつつ
近づき給ふ

日商岩井(株)大阪エネルギー第一部長

澤部 壽孫

台風の荒れし日なれど若きらのつきつき集ひ
来大阿蘇の地に

若きらのこの合宿にひた寄する熱き思ひにこ
たへざらめや

今は亡き大人うしらのみたまのまもりとふ師のみ
言葉に胸のつまり来(故郷土安正大人)加藤敏治大
人

若きらも心放ちて合宿の疲れ癒やすか顔輝き
て

(二回目の作品)

武蔵野ゆ筑紫ゆ厚木ゆ寄せまししみ歌み文を
ありがたくよむ

武蔵野の師に告げまほしなにごとくなくて合
宿終らむとすと

新日本製鉄機械プラント事業部部长代理

今林 賢郁

(二回目の作品)

「全体感想自由発表」

若きらが心のままに語りゆく言の葉よろしも
うちつけにして

若きらのこの言の葉を素直なる心を信じて當
み続けむ

日産自動車(株)財務部次長 古川 修

(二回目の作品)

合宿のくさぐさのこと思ひ出され四泊五日の
なつかしきかな

静かなる阿蘇の五岳は美しく終りのときを迎
へんとす

新たなる力湧き出て明日よりは進みてゆかむ
友らと共に

神奈川県立湘南高校教諭 山内 健生

黒岩真一兄の体験発表を聞きて

笑みをうかべ手ぶりをそへて語りゆく君の面
輪の輝きてみゆ

にちにちの授業のさまのまざまざと浮びくる
かも君の話に

(二回目の作品)

雨風の思ひもかけず襲ひ来て我らの集ひの開
くるが危ふし

ありがたき村松（剛）先生の御言葉を伝へ聞きてぞわが胸高鳴る

師の君の御言葉うれし雨風よとく鎮れよとくとく失せよ

予定せし開会時間の過ぎ去りてやうやう雨風弱まりてゆく

しかれども列車の復旧いかならむと雨風やみて新たな気がかり

参加者の九割までが夜ふけまでに到着の見込みと聞きてはつとす

日程の変更はあれど合宿の開会式を迎へてうれし

亡き友のみたまのふゆをかがふりて開会迎ふと師はのたまへり

（俳竹中工務店国際事業本部情報課長

稲津 利比古

バス中ゆかなた望めば根子岳の峻しき威容は雲にかすみて

烏帽子岳真近に望む草千里馬の親子ののどかにたはむる

（二回目の作品）

「全体感想自由発表」を聞きて

言の葉は拙なかれどもおのがじし思ひを込めて語る若きら

素直にも感動受けしことどもを語る言の葉胸

に迫り来

来年もまた来むといふ若きらの力強き言の葉聞くぞ嬉しき

（東急建設（株）東京支店建築部審査課長

奥 富 修 一

二歳ふたさいの早も経へにしか大阿蘇に友を求めて訪ねし日より

中岳の噴煙けむり遠くに見ゆるかな再び阿蘇を訪ね来れば

み国今ただならぬ時もろともに学びゆきなむこれの友らと

（二回目の作品）

（班別輪談に、相互批評に）

合宿も最後になりぬ文読みて歌を創りきこれの友らと

とつとつと語りてくれる言の葉に班友ともの真心の伝はりて来ぬ

輪になりて班友らの歌を読みゆけばおのづと心の通へる思ひす

（福岡県立新宮高校教諭 小野 吉 宣

（二回目の作品）

裏山の木立の中ゆこの夏を惜しむがごとくせみしきりなく

住友電気工業（株）生産技術部主査 布 瀬 雅 義

朝の集ひにて

せみ鳴きて小鳥さへづる草原に君が代の歌ひびき渡れる

（二回目の作品）

（慰霊祭）にて

はるかなる阿蘇の峯にも届かむか「かなしきいのち」を歌ふみ声は

虫の音とまつり火はじける音のみの静けき中におはらひ受くる

あまたなる人もろともに拍手を打てばそろひて響き渡れり

元・日特金属工業（株）常務取締役 加 納 祐 五

嵐去りはれゆく空に霧らひつつ見えそめし阿蘇の山なつかしも

いくたびか阿蘇にまなびしをりをつね見守らしきわれらがうへを

この夏もとはにかはらぬ山々を仰ぎつつ友とともに学ばむ

（二回目の作品）

台風ををかしたつとひて学びしはふかきおもひとなりて残らむ

おもふことおもふがままに語りあふ友のおもわのすずやかにみゆ

おのづから語らふうちにまごころは生まるるものとかたく信ぜり

なふほかに途なかるべし

（柳中央塩ビ製作所代表取締役 星野 貢

若きらと草千里原眺めつつ語らひ遊ぶ此の日のしき

遠見ゆる馬や小牛の草はむをともしみ眺む草千里原

（二回目の作品B）

あけがたのもやたちこむる広庭に仰ぎ見つむる日の丸美し

しづ／＼と昇る日の丸みつつつ声をかぎりに君が代歌ふ

たゆまずに進みゆかなむみ旗仰ぎ大御歌うたひ友らとともに

（柳不動産コンサルタント代表取締役

松吉基順

草千里ゆうすがすみたる中岳のこごしき山肌あかず眺むる

草千里ゆ中岳のかた眺めをれば白雲かとまがふ噴煙わきくも

草千里の南にそびゆる烏帽子岳裾野ひきたる姿よろしも

縁なす草千里ヶ浜の真中なる池面静けく白ひかるなり

草千里人け少なきかた隅の赤牛の群うごくともし

夏なれど陽ざしの淡き草千里吹きくる風の肌にすがしも

（二回目の作品B）

えにし得て阿蘇に集ひて友らと共み國の正道学び語りぬ

大阿蘇に共に学びしこのえにしみ霊のふゆとかしこみ生きむ

大阿蘇に集ひて学びし正道を日々怠らず生きませ友よ

（舞岡八幡宮・宮司 關 正臣

起き出でて窓を開くれば横様に連なりて見ゆ阿蘇の山脈

眞向ひの空のまほらに絶え間無く立ち登りゆく白き煙は

千五百メートル余りの地の底ゆ湧き來しものか彼の白煙

（二回目の作品B）

この頃

すめろぎを荒野の原に送らんとたばかりのおぞのつかさ痴れ者

すめろぎを畏みまつるつかさ人出でよと祈るこれの日頃は

（宮崎産業経営大学教授 川井修治

十七年ぶりに合宿教室に参加して

若きらのおつき情にほだされて辿りゆくかも

阿蘇合宿に

立野なる駅を過ぐれば外輪の中なる広野緑さやけし

うす霧らふ中空かけてたたなはる五岳の姿なつかしきかな

久々にま見えし友ら口々に給はる言の葉身にしみるなり

一たびは杜絶へたれども人の世の深ききづなを思はざらめや

七十路に入りし身なれば残りたる力尽くさむこの道のため

（二回目の作品B）

「夜の集ひ」にて

四日間の礪りし思ひのほぐるらむ軽き会話と笑ひ声満つ

即興の寸劇よろし女子のさはやかに歌ふ合唱もよし

吾もまた声を張り上げ肩組みて「北辰斜に」歌ひ躍りぬ

九州の学生ごぞり「元寇」を歌ふ諸声部屋内を圧す

真直ぐなる誠心に結ばれし若きらあればゆめ嘆かじな

（私立東福岡高校講師 小林 國男

真夏日の真日照りわたる肥後の国植木のあた

りの緑深しも

黒石の原と名づけし丘陵の街道筋の杉の並木
よ

真夏日の強き日射しに野も山も深き緑にいき
づきてあり

火の国の阿蘇の麓にみ友らははや合宿の営み
するも

尽きせざる祖国のいのちにみ友らとともにふ
れなむ合宿の地に

(二回目の作品)

常若とこわかの国さながらに合宿もいのちつきざる営
みつつくも

台風にめげず集ひて開かれしこの合宿の有難
きかな

佐賀商業高校常勤講師 末次 祐 司

(二回目の作品)

再び白井傳先生の横笛の吹奏をお聞きして

まなこ閉ぢ静かに聞き入る横笛の悲しきしら
べに涙こみあぐ

靖国の神も聞こしめすらん師の君の太前に捧
ぐる桜井の歌

幼き日学びししらべに我知らず声して歌ふ桜
井の歌

元・嶺山陽自動車学校社長 加藤 善之

大観峰遠くのぞみて若きらと登りゆくなり大

阿蘇の原

颱風に倒れたるらしとうきびの畑目に入るバ
スはゆけども

朝夕に手しほにかけしとうきびの畑いたまし
人の知らなく

空晴れて外輪山はうす煙る緑目にしむ烏帽子
岳みゆ

草千里水豊かなる池の辺に牛馬のあまた群れ
て草喰む

数知れぬ観光客の牛馬うまとあそぶ目にみゆ空晴
れ渡り

うるはしき火の國原よことはに豊かならな
む天地ととも

さまざまの想ひよぎりて草原に横たはりをれ
ばそよ風の吹く

(二回目の作品)

合宿のゆくへ如何にと風吹く外を見やればい
よいよはげし

有難き合宿なりと感想を聞けばうれしも続け
ざらめや

人と人のつらなり切れし此の国を支ふるきづ
なつがざらめやも

みどりなす火の國原に思ふかな益良雄の友生
命つぎてな

拓殖大学外国語学部教授 松本 幹 男

草千里馬待つ小屋のテント屋根風に吹かれて

ゆるり波打つ
白煙は山より上りたなびきて空に広がる雲に
まじりゆく

こぞの夏遊び巡りしモンゴルの緑の草原なつ
かしきかな

(二回目の作品)
何ありと押忍おしん一徹を貫きぬうしのみ姿尊く押
す

熊本市役所清掃部技師 折田 豊 生

雨風の荒れにしきのふを思ふにもここの友
を迎へしうれしさ

この集ひ実り多かれもろともに学びつ語りつ
心つくして

(二回目の作品)
閉会の宣言終るや自づから拍手起りて心
満たさる

長かりしこのひととせをかへりみて思ふは友
らの力なりけり

集ひ来し友らがなかにもいつの日か親しく語
らふ友のあるらむ

壇上の国旗を見つつこの集ひ末永かれとひた
祈るかも

熊本市立第一高校教諭 白濱 裕

開会するとき近づくも窓辺打つ風雨いよいよ繁

開会するとき近づくも窓辺打つ風雨いよいよ繁

くなりゆく

つつがなき旅なれかしと念じつつひたすら電
話の連絡を持つ

はからずも数多の友の集ひきて合宿開けりあり
りがたきかな

山口県立高森高校教諭 宝 辺 矢太郎

黒岩真一君の体験発表をきく

生徒らに心にのこる歴史をと練りてあみま
和歌人物史を

実朝も子規もありとふにぎにぎしき和歌中心
の授業惚ばゆ

君の語る熱き思ひを生徒らは心をどらせき
いりたらん

天皇のみうたを語れば生徒らのころにあつ
くきざすものあり

ころこめみころしのびて語ります君が思
ひは伝はりてゆく

(二回目の作品)

わが第八班吉田淳君(海上保安大学校二年)壇上に立
つ(全体感想自由発表)

パンフレットをみてこの合宿に集ひ来し君は
奇特なる人と言はれしと

この世にはパンフレットをみて集ひ来る人を
ちこちに埋もれたるべし

阿蘇駅に降り立ちわがかかげたる案内板に寄

るは君なりき

壇上に立ちて班長も班員もうれしかるらん共
に学びて

研修のときも素直にて力強く述ぶる君の姿忘
れじ

(例)日本インベスターサービス 小 柳 志乃夫

閉めきりし窓の外よりときをりに風吹き荒ぶ
音の聞こえく

到着遅延を告ぐる友らの電話の音の次々鳴り
ぬ運営本部は

テレビニュース始まる毎に台風の状態如何と
友らと見入る

台風の前やも過ぎよと願ひつつ友らと見入る
天気予報に

熊本に博多に広島に友らあまた嵐過ぎよと待
ちわびるらむ

何としても辿り着きたしと師の君は新幹線の
券とりませしとふ

人数はよし少くとも吾が話待つ者あればとの
らせしといふ

若きらを思ひたまへる師の君のあつきみ思ひ
しぬびまつりぬ

(二回目の作品)

「閉会式」での草野直樹君(中大、文三年)の挨拶を
聞きつつ

全国に新しき友得たるとふ君が話を聞けばう
れしも

今までの単なる地名のこれよりは友のゐます
と思へばしたはしと

正大寮に一人し住みて新しき友を求めて努め
き君は

福岡県立筑紫丘高校教諭 酒 村 聰一郎

アルバイトの高校生へ

合宿に連れ立ち来たる教へ子と営み終へて夕
餉迎へぬ

忙しき営み終へて教へ子とジンスカン鍋食
むは楽しき

助け合ひ励まし合ひて合宿のつとめ果しつつ学
びたまへや

(二回目の作品)

はからずも台風到来に始まれる合宿もはや閉
会を迎へぬ

先輩に導かれつつ運営の重きつとめを果しぬ
るかな

大阪府立交野高校教諭 絹 田 洋一

(二回目の作品)

「全体感想自由発表」のをり、壇上近き司会者席で女子
学生の感想を聞きつつ、

こみ上ぐる思ひ余りて言の葉はときれときれ
てさだかならずも

いかばかり胸せまるらむ涙ぬぐひ唇ふるはせ
語りますこは

苦しげに息つまらせつゝなほひたに語り続く
胸の思ひを

言の葉はさだかならずも胸内のあつき思ひの
伝はりてきぬ

福岡県立須恵高校教諭 那 須 三 元

夏空は今し曇りて草千里に風吹き渡り心地よ
きかな

(二回目の作品)

心こもる師のお言葉に涙せしと若人あまた壇
上に語る

福岡県立玄洋高校教諭 矢 永 誠 二

アルバイト学生と草千里にゆきて

丘のぼり学校のこと語り合ひ楽しき時を過
ごしたりけり

あまたある作業も皆で力合はせつとめてくる
るがうれしかりけり

(二回目の作品)

長内俊平先生の「御講話」を聴きて

素直なるをさなごころをもちませとふ師の御
言葉の心にしみぬ

しげきことあれども日々のなりはひにつとめ
てゆかむ御をしへむねに

東京理科大学講師 八 木 秀 次

吾が語る拙き言葉にうなづきてメモ取る姿を
ありがたく見し

語り終へし我に駆け寄りぬぎらひてほほゑみ
給ふ師のありがたし

(二回目の作品)

「全体感想自由発表」を聞きて

吾が語る拙き話に涙すと語る言葉に我も涙す
次々とあふるるごとく出できたる仕事に精出
す友ありがたし

福岡市立奈多小学校教諭 是 松 秀 文

風呂に入らず食事も抜きて一言の文句も言は
ぬ友ありがたし

(二回目の作品)

「閉会式」にて

神州の意味切々と話ささる師の御言葉は強く
なりゆく

神州の不滅を信ずそのうたのしらべしづかに
ひびきわたれり

そのひびきうねりのごとくなりゆきて広がり
わたりて胸にせまりく

宮崎県立日向高校教諭 竹 下 鉄 郎

慰霊祭の準備にて

ひぐらしの鳴きしく中にみともらと夜の祭り
の準備するなり

ひさびさに阿蘇のみ山にま向かへば友とつど
ひし昔偲はる

(二回目の作品B)

「全体感想自由発表」

学生は思ひの丈を語らむといやつぎつぎと壇
に上りぬ

飾りなき思ふがまゝの言の葉は大和男の子の
心意気かな

乙女子の涙ながらにとつとつと語る言の葉胸
に迫り来

福岡県立三池高校教諭 濱 田 清 人

ひさびさにお会ひしえたる師の君は笑まひて
問はれぬ「頑張ってるか」と

十年前の激しきみ声の思はれて身内しまりぬ
かの頃のごと

厳しくも吾を思はるるみ心にそむかざるやう
学びてゆかん

(二回目の作品B)

「夜の集ひ」

合宿のつらさ楽しさそこかしこに散りばめて
あり友らの演じしもの

「君の短歌は誰かが直す」とふ替へ歌にひと
きは笑ひと拍手のおこりぬ

共に学び共に励みし友なれば皆の笑ひも一つ
になりゆく

熊本製粉(株) 吉村 浩 之

(二) 回目的作品(四)

中富仁君へ

十年前始めし集ひのつながりていま君と会ひ語る楽しさ

福岡県立玄海高校教諭 日比生 哲 也

静まりし祭りの庭は虫の音の響き来たりて清められゆく

(二) 回目的作品(五)

「全体感想自由発表」にて

付き合ひの深まりゆきし嬉しさを語る面輪のかがやきて見ゆ

うちつけに語るを聞けば友らとの楽しき生活偲ばれて来ぬ

(株)金文図書出版販売 竹内 昭彦

あをあをと稲葉ひろがる田の面にさざ波たたせそよ風のふく

(二) 回目的作品(六)

長内俊平先生の「御講義」にて、作家・畑正憲氏がネ

パールへ旅をされた折の手記を読まれるのを聞きて

ムクといふ幼き少女はかろがろと重き荷物を背に負ひしとふ

亡くなりし父の天より帰れるとムクは畑氏に思ひ寄せるも

絶壁の小道で畑氏をかばひつゝムクは歩みぬ

重き荷背負ひて

かばひつつ絶壁の道歩みゆくムクの姿に胸打たれしとふ

公務員 木村 俊一郎

合宿に向かふ列車に乗り込みてベルの合図に心をどりぬ

久しくも会はずにみたる友どちの面輪うかびて心はやりぬ

(二) 回目的作品(七)

長内俊平先生の「御講話」に聞いて

をさなごのごとき心にかへりませと師の御言葉をかしこみてきく

いかばかり励みつとむることあらばかくも清らかな心になるるか

師の君の語る御言葉聞くうちにいっしか涙あふれてやまず

すずやかなまなこを持ちて現し世を見とほす力もたまほしきかな

神奈川県立津久井高校教諭 大日方 学

外見れば雨風いよよ吹き荒れて合宿開催案じらるるも

熊本県立天草高校教諭 久保田 真

(二回目的作品)

三林浩行兄と久しぶりに会ふ

襖開く気配に後を振り向けば背の高き君の姿ありけり

学生の時から変はらぬ木訥としたる様子の伝はりて来る

笑みうかべ入りくる友にわれ立ちて「よう」と言ひつつ席をすすむる

頬のこけやせたる姿のわが友は日頃の仕事の忙しと言ふ

マダマンド工業(株) 眞田 博之

加納先生の御講義を聴きて

我々のまはりにいのちは満ちいますと言はれし言の葉心にのこれり

(二回目的作品)

加納裕五先生の「御講話」をお聴きして

我々のまはりにいのちは満ちていますとふ師のみ言葉の忘れがたしも

先生の言はれらしいのちといふものをもとめ生きなん日々くのくらしに

熊本市立楠中学校教諭 坂本 太郎

(二回目的作品)

黒岩真一先輩の「青年体験発表」をお聞きして

念願の自国の歴史教へらるとふ先輩のよろ

こび伝はりて来ぬ

日本史を教ふることになりぬれど授業の有りに疑問を持つとふ

教へむと思ふ心のありし故先輩の疑問の起りくるとふ

生徒らと互ひに学び教へゆかん先輩の思ひ胸に響き来

東急工建(株) 茅野 輝章

松田裕幸君と会ひて

半年の留学を終へてかけつけし友の姿をうれしと思ふ

久々に顔を会せしともどちは前にもましてたのもしく見ゆ

帰国して間もなき友もつかれ見せずこの合宿にはりきりてをり

(二回目的作品)

「台宿指揮班」に属して

裏に立ちはじめてしのばゆ合宿のいとなみ支へし人のいたづき

久留米大学附設中学校・高等学校教諭

名和 長泰

刻々と襲来迫る台風の予想進路の画面見入るも

暴風に枝はげしく揺れ大粒の雨屋根うちてし

ぶきすさまじ

ひんびんと電話かかり来合宿に向ふ途上の友案せらる

(二回目的作品)

長内俊平先生の御講話

握り飯一つを兄弟二人して分かち食べたる子の思ひはも

握り飯一つにこもる思ひこそ心育くむ糧となるべし

鳥栖市役所 西山 八郎

台風にはばまれながらもをちこちゆ友ら集ひぬ夜おそくまで

つかれたるからだ休めて四泊五日の学びの営みにつとめたまへや

あわただしく時すぎゆきてやうやくに参加者の数明らかとなりぬ

(二回目的作品)

幾年ぶり集ひ会ひにし友どちの顔をしみれば

なつかしきかな

若築建設(株) 池松 伸典

台風の通りしあとか畑に生ふたうもろこしの倒れ伏せをり

交通もままならぬ中真夜中に宿に着きたる人もありとふ

(二回目的作品)

長内俊平先生の「御講話」を事務局にて聞きて

高らかに歌ひあげらるる師の君の津軽の歌の
すばらしきかな

船橋市立法典東小学校教諭 竹内孝彦

大阿蘇の外輪山の山かひの青き野原を汽車ひ
た走る

久々に相見し友と語りひつ事務の仕事に取り
かかりにき

行き違ひになりたる友を名簿にて見ればさら
さら口惜しきかも

(二回目の作品)

友どちのなほき心のこもりたる「歌稿」綴れ
ば夜の更けゆく

白井傳先生の歌集

墨の香のかをりさやけき歌ぶみを手にとるこ
とはいくたびなりし

「全体感想自由発表」を事務局にて聴く

友どちの感極まれる声きけば顔は見えねど胸
あつくなりぬ

電源開発㈱ 中富 仁

留学の疲れを押して合宿に参ぜし友の面輪た
のもし

(二回目の作品)

留学から帰りにそのまゝ合宿に集ひし友の面
輪のたのもし

なつかしき友らの寄り来て次々に声をかけく

るるありがたきかな

人生の意味を真剣に問ひかけし先輩の声に力
籠もりぬ

新技術開発事業団業務課長 野間口 行 正

やうやうに着きたる博多で親切に「はやぶ
さ」に乗れと教へ給ふ人あり

奇しきかな同じ座席に白井先生と合宿に向ふ
乙女の坐りをりけり

(二回目の作品)

川井修治先生の御姿を拜見して

久しぶり合宿に参加し給ひし師の君の御姿見
ればうれしかりけり

御自から巻頭言を吟じたまふ師の御姿は昔と
変らず

「おい野間口よ」と昔ながらの口調にて呼び
かけ給ひし御声うれしき

北九州市立八幡病院放射線技師 森田 仁 士

み仏の面輪に似たる根子岳は朝もやの中静も
りてあり

(二回目の作品)

ひぐらしの声しきる中友どちと斎庭作りに今
年もいそしむ

姿良き竹を立つるに太き杭を打たんとすれど
もなかなか入らず

杭の先を鉋で削りこれならばうまくいかんと

先輩は笑みたり

剣道の心得あれば杭打ちもうまくあらんと友
に声かく

夏の陽に汗流るれど心あはせ斎庭づくりの作
業は楽し

安信住宅販売㈱ 松吉 基光

渋滞の車の中にて思ひしは阿蘇の山なみ友達
の顔

無事着きて先輩らの言の葉ありがたし疲れた
るらむ早く休めよとの

あたたかき言の葉うけて我が心清々しさに疲
れも忘るる

(二回目作品)

感動を胸に秘めつつ家路へと向ふ友らの顔晴
れやかに

九州大学循環器内科助教授 小柳 左門

黒石兄の発表をききて

生徒らと史学ふまびゆくよろこびを心かたむけ語
りたまへり

語りつつ声たかまりておのづから手ぶりもい
づる友はほゑまし

思ふことかざらずのぶるわが友のあつき思ひ
の胸にせまりく

生徒らをいつくしみすすみ心のただにつたは
り涙にじむも

(二回目的作品)

夕風に杉の小枝はゆらぎつつひびきくるかな
ひぐらしのこゑ

ひぐらしのこゑをききつつすぎし日のつどひ
のこのよみがへりきぬ

たくましき友のおもはよこの日ごろあはざる
友の恋しく思ほゆ

熊本赤十字病院外科 福田 誠

久々の友と語れば夕せまり窓辺近くにひぐら
しのなく

(二回目的作品)

夕せまる部屋内友と語らへば窓辺近くにひぐ
らしのなく

福岡大学医学部医師 古井 博明

八木秀次氏の「合宿導入講義」を聞きて
生き方を求むるすべをなくしたる「相対主
義」の矛盾を語る

熊本県砥用町文化財保護委員 北島 道治

南郷の谷は霞に埋もりて外輪山もほのに見え
たり

人も牛も集ひてやはらかき光の中にゆるび遊
べり

広々と緑の原の美しく夏の陽ざしも涼しかり
けり

(二回目的作品)

台風十号、県内を通過す(午前六時)

台風の前に行かむと起きたれど早くも風は
木末さわがす(十二時)

東風いよ、吹き荒れ雨も亦しぶき烈しくいか
にか行かむ(午後二時)

合宿の開会式の時なれど行くに行かれず断念
したり(午後六時)

西風となりて台風過ぎたればいざや行かんと
いで立ちてくる(午後九時「阿蘇の司」到着)

小雨降る中に愛車をたよりにて合宿の地に遂
に着きたり

長崎県・元・中学校長 白井 博
あをやまのかげにしさけるしろたへのなもな
きはなをしみじみとみき

こめづかのゆかしきやまをひだりてにみつ
くだりぬ阿蘇の大嶺を

いのちあるかぎりつづけむ夏合宿阿蘇のもゆ
るひむねにきざみて

(二回目的作品)

阿蘇国原抄

台風をものともせず玄海ゆ阿蘇につどへる
雄心わすれじ

途次六時間くるまとまるもなにせむや燃ゆる
火の阿蘇にわれはたちけり

大阿蘇の山ふところに立ちにけり日本の心お

こさむと来し

日本を興さむいのちいやさらに阿蘇の大嶺に
つどひけるはや

村松大人くにもふころそくそくともゆるお
もひをのべたまひける

くにおもひいへをもせおひひとすぢをここ
にまなばむと理事長先生はや

しみじみと涙あふれてふきたまふ優しき乙女
子わすれかねつとも

くれなゐの軍帽しめし若き友にみくにまもり
のころかたれり

まゆ若き青春の友よ乙女子よあすをいのりて
努めざらめや(明日を祈りて)

西、東あひ別るるも阿蘇の野にきたへし結び
あに忘れめや

なにげなくやさしきいのち大和心をかたりて
あれりなつのゆふべに(「青年体験発表」の吉川理夫
さんに)

昭和さまのおほきみうたしみじみとずしてあ
りけるありがたきかな(同じく黒岩真一先生に)

松陰とその弟子たちのあたたかきをしへをと
けり七規七則はや(「古典講義」の奥宮修一さんに)

わかき日に松下村塾たづねけるかのひなつか
しいまのうつつに

みいくさにありしひとほく堅琴の兵士のおも

ひむねにかへりく(平川祐弘先生に)

「死友に負かず」といひし松陰のおもひとき
つつかたるひとはも(山内健生先生に)

大正のわれらの年代長内大人もゆるロマンに
なみだぐみ(長内俊平先生に)

たんたんとつながるいのちひとすぢに明治み
かどをときますゆゆし(加納裕五先生に)

鹿児島(鹿)の小白合乙女があさのつどひ壇上(鹿)にた
ちて指揮するうれし(古川小白合さん(鹿大、農三
年)に)

おほらかにあまたのうたを批評します大人の
みちびき(澤部寿孫先生に)

けむりはく阿蘇の中岳はこの朝もはるかかす
めり茫洋として(最終日の「朝の集ひ」に)

ふたたびをまたもあはめやくるとしの夏をも
ひつつ雄心つとめむ(来夏を期して)

元法政大学人事部長 香川 亮 二
暮れなむ夏の日はいまだ高空にかかりて列

車は筑紫路に入る
左右つらなる低き山なみの緑色こく木々繁り
たり

ひろびろとひろがる青田のなつかしきみづほ
の国の姿とどめて

草を焼く煙ならむかをちこちにうすき煙のた
ちのぼる見ゆ

遠山は霞かかりてやうやうに日は沈まんとす

山のかなたに

この道を友がりゆくといくたびか通ひし友の

ただになつかし

たたかひに敗れてのちの日いまだ浅くきびし

かりけむ日々偲びつつ

あまた友の眠れる不知火筑紫路にいまあり

きぬことしの夏も

(二回目(白)の作目)

「全体意見自由発表、班員登壇す」

思はざるに気づかひをりし子の手をあげて壇
に上るといそぎ歩みゆく

壇にのぼるやこゑのつまりて涙あふれ顔もあ
げずしやくりあぐばかり

やうやくに語りはじめぬお年寄の国を思ふ姿
に涙とどまらずと(白井傳先生登壇)

体質のゆるかふるまひもどかしく見えてかな
しと思ひてありし

合宿の集ひの中にはぐくまれし思ひ一時に噴
きいでたるか

悉有佛性とふふ言葉のたゞに仰がれて涙して
聞きぬただありがたく

日本銀行監事 小田村 四郎

合宿の前日阿蘇へ向ふ車中台風の近づきければ

のぼりゆく阿蘇の山々雲蔽ひ雨降りはじむ嵐

近きか

白川の水は濁りて岩をかみ流れて早し嵐まだ

来ぬに

明日より始まるつどひに向ひます友らの無事

を祈るほかなし

宿より阿蘇五岳を眺む

ま青なるみ空に白き噴煙の高くのぼりて雲に

つらなる

み佛の姿そのままに横たはる阿蘇の五岳を美
しと見つ

(二回目(白)の作目)

合宿も無事に終りぬ亡き友のみたまのふゆと

かしこみまつ

荒れ狂ふ嵐の中を集ひ来し若き友らを尊しと

思ふ
相共に学びゆかむと語ります若き友らの声の
すがしき

この五日共にむつびし若人の再び集ふ日をば
待ちつつ

朝夕に眺めし阿蘇の山なみの緑陽に映えひと
きは美し

浄土真宗本願寺光隆寺 岡 棟 猛

草千里歩めばしのぼるなき友もここにあそび
てうたをよみしを

(二回目(白)の作目)

若き等があふるる懐ひばつぽつと語るを聞けばわれも涙す

遅々として進まざれども絶ゆるなく友らにつらなり生きむとぞ思ふ

乃木神社祓宣 松吉宣和

(二回目の作品)

草千里にて

山すそに群たる牛に近づけば草喰みながら顔向けて来る

こはごはと手をさしひだす幼児は牛ふりむくやおどろきはなるる

幼児は放牧の馬めづらしく顔を見やりつそつと手を出す

(株)BBS金明代表取締役 中田一義

理事長の開会式のお言葉

お言葉の一つ一つが我が道をさとしみちびき励まし下さる

足下を照らし下さるお言葉の一つ一つに力湧き出づ

お言葉を心に刻みひらすらに日々の生活正しき出づ

(二回目の作品)

「慰霊祭」

師の君の御声に続き歌はんとすれども涙で胸のふたがる

中島法律事務所 中島繁樹

公務員 太田文雄

(二回目の作品)
楽しくも時を忘れてみ友らと語り会ひたり合宿の日々を

亜細亜大学助教授 東中野修道

川井修治先生をお迎へして

師の君の降りますときは阿蘇駅にお迎へせむとかねて思ひぬ

先生とみ名を呼びかくれば思はずもこみあげてきて胸のつまりぬ

十あまり七年ぶりに師の君と合宿をすごすはうれしかりけり

神奈川県立秦野菅屋高校教諭 原川猛雄

友どちの後を追ひかけ駆けたれど息せききれて足は動かず

丘の上のぼりて見れば中岳の火口のあたり白煙の湧く

風吹きて心地良きなか皆ともに腰をおろして写し絵をとる

(二回目の作品)

第一班の轟崇大君(拓大、一年)の話をお聞き

台風で列車動かず博多にてカプセルホテルに泊まりしといふ

いかばかりあわてたまひし友どちのいたづき思ひて胸あつくなる

このとしまで吾をば育てし母君は寝たきりとなれり去年秋ふかくやさしくも時には厳しき母にしてあらぬもの言ふただに悲しも

車椅子引きて夕暮れの窓の辺に「ふるさと」

歌へば母も口ずさむねたきりの母をばおきて心残るも吾は赴かむ外国の勤めに

(二回目の作品)
鯛のしき鳴く朝に合宿の学びの日々をかへりみるなり

長崎中央郵便局 橋本公明

「班別輪読」に参加して
友達と思ひこめたる言の葉を聞きもらさじと

ひた耳傾けぬ
防衛施設庁 山根清

台風の過ぎて大阿蘇山なみに雲たち登り夏空に映ゆ

台風のつめあとしるしあはれにもタウキビあまた倒れてありけり

(二回目の作品)
とこしへにみ国守りますみおやらの魂まつらむと斎庭に集ひぬ

師や友と力をあはせて整へし斎庭に集ひみま

つりつとめむ

明々とかがり火燃えてみおやらの魂降りまして祭文ささげぬ

福岡県立大宰府高校教諭 黒岩 真一
(二回目の作品)

あまたゐる教へ子の中ゆ誘ひ来し一人の教へ子如何にと案ずる

閉会の間近に寄り来て教へ子は顔はれやかに
お礼を言ひたり

来年も参りますてふ言の葉を己が励みに努め
ゆきなむ

公務員 加来 至誠
平川先生の御講義を聞きて

外つ国の人の心をうつほどの学なかりせば国
危しと

おのれを知り他を知ることぞなすべきと語り
たまひし御言葉つよし

戦に勝つよりもなほ力あり心のくらきをひら
く書こそと

外つ国の人の心をも和ぐる書の力を思はざら
めや

(二回目の作品)
阿蘇原にひぐらし鳴けば都なる愛ぐし妻子の
しのばるるかな

運営の責を負ひつつかおだやかになごみて話す

友ありがたし

福岡県立福岡中央高校教諭 占部 賢志
那須君の講義聴きつゝ

越の國に遊ぶ旅路の楽しさを歌に託して君詠
みたまふ

君が詠みし歌日記たどればまなかに生徒ら
の姿は蘇る如し

雪原を滑る生徒のはしゃぐ声うつつに聴こゆ
る心地するなり

(二回目の作品)
長内俊平先生の「御講話」を拝聴して

床の辺に手鏡かざして先つ帝みそなはしまし
し十三夜の月

けふの日は十三夜なりきと話さるる御声かな
しく胸打ちにけり

(二回目の作品)
日産自動車(株) 内海 勝彦

最後の「班別懇談」の折に
おのおの思ひをのぶる班友のひたむきな
姿に涙ながるゝ

(二回目の作品)
日産自動車(株) 奈良崎 修二

慰霊祭にて
おのおの苦心重ねて集ひ来し友らとけふ
はみたままつるも

みたままつるにはべに立ちて先帝のみまかり
し日の思ひ出さるゝ
終戦のたふときみ歌聞きゆけば祖国すくはれ
しことの惚ばる
ふたとせまへ逝きませし父もこのには来ま
せしごとく思はるゝなり

(二回目の作品)
出光興産(株) 広島 秀明

長内俊平先生の「御講話」をお聞きして
すずやかなまなこをもてとをしへられかざら
ずに生きむところちかふ

熊本にて
ひやけたをとめのことの葉ひのくにおく
になまりはやさしくきこゆ

(二回目の作品)
日本油脂(株) 上村 栄章

素直にも心を開きて語りゆく班友の言葉にな
みだながるも

(二回目の作品)
タマポリ(株) 吉川 理夫

お互ひに集ひ学びし合宿もはや閉会の時を迎
へぬ

熊本県芦北町立丸米小学校教諭 蓑田 誠一

(二回目の作品)
長内俊平先生

教へ子に授け下さる御歌に聞き入る生徒らの
瞳輝く

「先生に届けて下さい」と頼まれし二通の文
持て阿蘇に来たりぬ

朝の集ひ終りて人影減る中に師の笑顔みつけ
てなつかしきかな

ひとり師はちり捨ひませり黙々と朝の集ひの
濟みし会場ひろばで

丸米の生徒らの文をば読みたまふ師の君あり
がたく頭を垂れたり（長内先生の御講話）

ふるさとを国を愛する子どもらを教へ育まん
我は日本男子

福岡県立春日高校教諭 與 島 誠 央
(二回目の作品)

長内俊平先生の「御講話」の中で、ブータンで三十年
農業指導されて逝かれた西岡さんの事をお聞きして

ブータンに三十とせ土地を耕せる日本人あり
今にして知る

外国に身をささげますますらをのころざし
はもただにかしこし

ふたたびも命うけなばブータンに生れてしが
なと語りますとふ

（二回目の作品）
樹千趣会 桐 山 澄 子

昨日の慰霊祭では雲間より月見えたりと師は

のたまひぬ

今宵は十三夜といふを曆にて知りてをりしと
師はのたまひぬ

十三夜その夜の月は先帝の御床にありて見そ
なはせし月

中岳の上おほふがにいく重にも厚き白雲ひろ
ごりて見ゆ

ふと見れば黒き山の端ゆもくもくと白きけぶ
りのわき立ちてをり

ふきあぐるま白きけぶりのたちまちに天にの
ばりて雲と重なる

（二回目の作品）
合宿を終ふるに際して

あまたなる尊き御魂のみまもりとみちびきか
がふりいま終らんとす

しきしまのやまとのいのちにふれゆきて己が
ころを養ひ育てむ

福岡県甘木公共職業安定所 古 川 広 治
(二回目の作品)

「全体感想自由発表」
思ふこと力をこめてかたりゆく友らの姿に胸
をうたふる

津田学園中学校教諭 三 林 浩 行
(二回目の作品)

（二回目の作品）

草千里での短歌の創作

言の葉を急ぎて紙に書きとむる友の姿を尊し
と見つ

（二回目の作品）
日本青年協議会 清 水 久 仁 子

あたたかき人のまごころ感じられ心の底より
うれしくなりぬ

（二回目の作品）
長野県小諸市役所 中 澤 栄 二

「朝の集ひ」の司会者を見て
ちちちと涙ながらに話しゆく君の姿に心打たれ
し

「全体感想自由発表」の折に
心から溢るる思ひ聴きをればおのずと涙の流
れおつるも

最後の「班別懇談」
班員の真心こもる言の葉を聴けば胸内熱くな
り来る

ヤマハ音楽教室システム講師 橋 本 加 枝
(二回目の作品)

ともに語りともに学びし班室を片づけにけり
友らと共に

合宿で使ひし品をしまひ込む友の思ひはいか
にかあるらん

（二回目の作品）

（二回目の作品）

（二）回目的作品

班友への寄せ書きに

（明大一年、秋元學君に）

涙こぼし感動語る班友をみるにおのずと涙わ
きくも

（防大一年、兵庫剛君に）

合宿が進むにつれていと優しき君の眼まなこに力こ
もりゆく

（富山大二年、大谷利宏君に）

ふるさとの父母思ふすなほなる気持ちに心こ
すつと傳はる

（福井工大二年、杉本利幸君に）

驚きのことばかりなりとややてれて言の葉選
び語りゆく君

（鹿大三、椎原恒介君に）

「いざといふ時自分は戦ひにゆきます」とふ
言の葉ずしんと心に響きぬ

（福岡大四年、梅崎健吉君に）

班友の一言一言しつかりと受け止むる君の心
の豊かさ

現地で受領した会員からの激励短歌

亜細亜大学名誉教授 夜久 正雄

思はざる嵐に集ひいかならむことなからむを
祈るはるかに

北九州市 森 田 維佐男

台風を衝いて集ひし若き等に語りつがれむ
「日本のいのち」

あとがき

秋も日毎に深まってまゐりました。皆さんその後いかがお過ごしでしょうか。雄大な阿蘇のふもとで共に学び合った「合宿教室」から早や三カ月が過ぎやうとしてをりますが、やうやくこの『感想文集』を皆さんのお手許にお届け出来ることになりました。この『感想文集』は、「合宿教室」の最後に「走り書き」して戴いた感想文と和歌を編集したものです。

編集作業は、まづ、それぞれの班の班長又は班付の方々（国民文化研究会会員）に、感想文と第二回の創作短歌を添削・編集していただくことから始めました。

皆さんお一人お一人の心のもった文章・和歌を丹念に読み返し、編集してゆくことは神経を使い、時間のかかる作業ですが、皆さんがお書きになった生々しい言葉に心打たれ、同時に皆さんの緊張したあの時のお姿も思ひ出されました。それぞれの方々に編集したいいただいた編集方針は以下の通りです。

(一) 「感想文」について

原文をできるだけそのまま掲載することを

基本方針としました。ページ数の関係で執筆者のお心のうちが最も強く表現されてゐるところは、執筆者のお気持ちを辿りながら、原文のニュアンスが損はれないやう慎重に加筆しました。なほ、「かなづかひ」については、原文を尊重し、漢字及び文法上の誤まりについては訂正してをります。

(二) 「和歌」について

合宿では二回にわたって和歌をつくりましたが、第一回のもは、全参加者それぞれ一首以上を洩れなく本冊の巻末の「和歌詠草」のところに収めました。また、この感想文の執筆の折につくっていた第二回目的和歌は、それぞれの感想文の末尾に入れられました。感想文と同じく、文法上の誤り等は訂正いたしました。

この『感想文集』作成のためには、班長および班付の方々以外にも多くの方々のご協力を得ました。お忙しいお仕事の中で、休日や勤務終了後の時間をさいてご協力いただきま

した磯貝保博、鏗信弘、山根清、小柳志乃夫、奈良崎修二、久米秀俊、最知浩一、吉川理夫、

八木秀次、真田博之等の各氏に心から御礼申し上げます。

最後に、この『感想文集』の「あらまし」作成および第一回目的和歌の編集にご尽力いただいた国民文化研究会会員の諸氏に厚く御礼申し上げます。またカメラ・レポートの写真は福岡の今泉一彦さんにお世話になりました。

いろいろな方々のご努力によって出来上がった感想文集を、ご精読下さるやう切願ひやみません。

「合宿教室」の四泊五日間の様々な経験が鮮明に甦って来る事と思ひます。三カ月前に阿蘇で得た感動を単なる「思ひ出」に終らせることなく、合宿教室で得た真に語りうる友との交流に、また新たな学問の求道への出発点とされるやう切に祈ってをります。なほ、ご精読後には、是非とも班長又は班付の方々に一筆御礼状を差し上げていただきたくお願ひ致します。

(内海勝彦記)

〔資料〕

第三十七回「合宿教室（阿蘇）」感想文集

非売品

平成四年十月三十一日発行

編集兼発行者

東京都中央区銀座七―一〇―一八 柳瀬七九

電話 〇三―三五七二―一五二六（代）

FAX 〇三―三五七二―一五二七

社団法人 国民文化研究会

理事長 小田村寅二郎

編集委員

内海 勝彦・山根 清

鍵 信弘・吉川 理夫

奈良崎修二・小柳志乃夫

